

文學士藤田豐八編纂



東洋史

東京

文學社

凡例

- 一、本書題して東洋史といふ。その實、東方亞細亞に興敗せし民族の一般史のみ。
- 二、既に一般史といふ。固より各國史の器械的混合たる可らず。必ずや、國民と國民との關係を觀、一偃一起、以て現時の狀態を呈せし所以を釋ねざる可らず。而して東方亞細亞の一般史に於ては、近世に至るまで、支那常に主動國の位置を占めたり。故に本書は支那を中心とし、多く之に關係せる民族を採り、またその他に及はす。
- 三、我日本また東洋史中に班すへきもの。然れども此書も中等教育の教科書に充てんとして編纂せり。茲には國史との重複を避けんか爲め多く省略に従へり。
- 四、本書既に中等教育の教科書に資す。頗る程度に應じて斟酌を加へたるは、往々一般史の本旨に反したるところなきにあらず。

五、逸話は人物事蹟を活動せしめ、生徒をして歴史の趣味を感せしめ、また頗るその記憶を助く。本書の記述なるべく簡ならんを勉めしかば、終に傍及するの餘裕なし。教授の際附加して可なり。

六、年號は凡て支那のを用ひ、紀元は凡て皇紀を用ひたり。耶蘇紀元元年は皇紀六百六十一年に當る。故に若し東西對照の必要ありたらんには、本書記入の皇紀年數より六六〇を減すれば、直に耶蘇紀元年數を得へし。

七、地名人名は大抵漢字を用ひたり。單に西史に傳はれるものは、多く片假名を用ひ、たゞ一般に漢字を填用し來りしものは、往々之に従ひしものあり。また讀みかたきものには、處々片假名を附せり。

八、別に歴史用地圖二卷あり、繁雜みかたきを恐れ、主として本書中に存する地名のみを擧げたり。

明治二十九年七月

著者識

中等教科 東洋史卷一 目次

總論

第一章 東方亞細亞の地勢……………一 丁

東洋史の本領。 山脈。 四大區劃。 河流。 沙漠。

第二章 人種—時期の區分……………三 丁

七族。 三紀。

上世史

堯舜三代

第一章 上古の傳説—堯舜の事蹟……………六 丁

三皇。 五帝。 堯。 曆法。 洪水。 舜。 禹水土を平く。

唐虞の世。

第二章 夏商の興亡……………七 丁

苗族。 禹。 九州。 苗衰ふ。 三代。 世襲。 桀。 湯。

伊尹。商。殷。紂。

第三章 周の興起—その東遷

西伯昌。武王發。箕子を朝鮮に封す。成王。周公旦。

西都東都。周道始めて衰ふ。共和。宣王。幽王。平王。

東遷。

第四章 春秋—覇者

十二諸侯及吳越。霸。齊桓公。管仲。楚文王。宋襄公。

晉文公。城濮の戦。秦穆公。曠の戦。楚莊王。鄆の戦。

鄆の戦。晋秦楚平。鄭子産。吳。晋楚衰ふ。越。

周室愈微。

第五章 戦國

(一) 七國の形勢—秦の富強

七雄。韓魏趙。田氏。魏。吳起。楚また興る。

秦孝公。公孫鞅の變法。秦人富強の基立つ。

(二) 合縱連衡—秦六國を併す

八丁

十丁

十四丁

十四丁

十六丁

蘇秦合縱を説く。張儀連衡を説く。燕齊。樂毅。田單。
趙武靈王。秦趙を攻む。范雎遠交近攻の策。四君。周
魯亡ふ。政立つ。韓趙魏楚亡ふ。海内一に歸す。

第六章 漢族以外の種族

苗族。通古斯族。都爾格族。蒙古族。圖伯特族。

第七章 制度、學術、文藝、風俗

(一) 制度

封建。中央。地方。田制。税法。兵制。三代禮制の

精神。

(二) 學術、文藝

文字。學術。儒家。道家。其他の諸家。文學。

(三) 風俗

天神地祇人鬼。長幼の序。男女の別。葬喪の禮。婚姻
の禮。冠禮。鄉飲酒禮。衣冠。飲食。

十八丁

二十丁

二十丁

二十二丁

二十四丁

中世史

第一篇 上期上 秦漢

第一章 始皇の政策……………二十六丁

皇帝。郡縣の制。巡遊。萬里の長城。火坑。

第二章 秦末の叛亂—秦亡ふ……………二十七丁

二世立つ。陳勝。秦將章邯。趙王武臣。劉邦。項梁項籍。齊王田儼。魏王咎。趙王歇。懷王。豹魏王となる。章邯降る。劉邦關に入る。秦亡ふ。

第三章 漢楚の攻争—楚亡ふ……………二十九丁

法三章を約す。鴻門の會。三傑。田榮齊王と稱し陳餘代王となる。漢王楚を伐つ。漢魏を平け趙を取る。楚漢王を圍む。陳平。漢齊を定む。垓下の圍。項王亡ふ。

第四章 漢高祖の創始—諸呂の亂……………三十一丁

長安に都す。餘類平く。論功。制禮。功臣の誅死。宗室を封す。惠帝。呂后制を稱す。諸呂の亂。

第五章 文景の治績—七國の叛亂……………三十三丁

文帝立つ。諸侯の跋扈。賈誼。景帝立つ。鼂錯。吳楚七國反す。周亞夫。武帝。

第六章 武帝の内政—文學大に興る……………三十四丁

漢初の文運。始めて元を建つ。董仲舒。六經を表章す。河間獻王。方士。

第七章 匈奴—漢武の經略 (一)……………三十六丁

冒頓。匈奴の官號。高祖匈奴を征す。老上。軍臣。漢匈奴和親破る。衛青。霍去病。渾邪王降る。

第八章 兩越—東南及西南夷—漢武の經略 (二)……………三十八丁

南越王趙陀。閩越王無諸。東海王搖。東甌王。東甌中國に遷る。閩越と南越。南越亡ふ。東南海濱悉く平く。西南夷。滇。夜郎。冉苻驤白馬等。匈奴敢て出でず。

第九章 西域諸國—漢武の經略 (三)……………四十丁

中世史 目次 三

張壽。月氏。大夏。大月氏及小月氏。大宛。康居。烏

孫。安息。漢兵西域を困む。漢宛を伐つ。匈奴兒單于。

受降城。匈奴衰ふ。漢武の功業。漢武の晩年。輪臺の詔。

第十章 霍光の攝政—昭宣の撫民……………四十三丁

霍光。孝昭帝。上官桀。孝宣帝。漢世の良吏。魏相丙

吉。黃霸。于定國。

第十一章 烏桓—匈奴漢婿となる……………四十五丁

烏桓及鮮卑。烏桓と匈奴。范友明。烏孫と匈奴。匈奴瓦

解す。鄯善。莎車。先零。趙充國。匈奴の内難。

鄭吉。匈奴二國となる。堅昆。匈奴漢胡と稱す。

第十二章 宦官外戚の亂—王莽の篡立……………四十六丁

霍氏亡ふ。許氏史氏王氏。蕭望之。周堪。劉向。金敞。弘農。石顯。

王鳳。王莽。王莽位を篡ふ。

第十三章 王莽の敗滅—光武の統一……………四十八丁

王莽の施政。遠近兵起る。劉演劉秀起る。劉玄。秀。尋邑

の兵を敗る。隗囂公孫述。莽亡ふ。玄演を殺す。鄧禹。

王郎。寇恂。光武位に即く。馮異。竇融。馬援。

吳漢。岑彭。

第十四章 光武の政策—孝明孝章の治績……………五十丁

光武の政策。東漢の氣習。孝明の承述。孝章の承述。

第十五章 漢—匈奴—西域—東西交通の始……………五十一丁

王莽と匈奴。蘆芳。匈奴北に遷る。匈奴分れて南北となる。

耿秉竇固。伊吾盧。莎車王賢。龜茲。班超。于寔。

疏勒。北匈奴亂る。鮮卑。北匈奴の地に遷る。甘英。大秦に使

す。條支。羅馬の使來る。班勇。

第十六章 外戚宦官の亂—黨錮の禍……………五十三丁

外戚專横の端。竇憲。宦官弄權の始。耿寶。梁冀。五

侯。清節の士。陳蕃李膺。黨人の議。東漢の黨錮。三

君八俊。八顧。八及。八厨。

第十七章 東漢の滅亡—群雄の蜂起……………五十六丁

張角。曹操。州牧是より重し。袁紹。董卓。孫堅。

袁術。呂布。劉備。孫策。呂布死す。袁術死す。章

紹死す。孫權。諸葛亮。赤壁の戦。劉備益州を取る。

關羽敗死す。東漢亡ふ。

第二篇 上期下 魏晉南北朝

第一章 三國の鼎立—晋の一統……………五十九丁

三國鼎立の勢成る。亮師を出す。司馬懿。燕。公孫度。

司馬師。司馬昭。漢亡ふ。司馬炎。魏亡ふ。吳亡ふ。

第二章 晋室の壊敗—戎狄の跳梁……………六十一丁

戎狄の禍漸く萌す。清談。八王の亂。匈奴。劉淵。石

勒。苻李特。成。鮮卑。慕容氏。拓跋氏。劉淵帝と

稱す。西晋亡ふ。

第三章 東晋の内政—諸胡の興敗……………六十三丁

王導。東晋。王敦の逆謀。蘇峻の謀反。陶侃。劉曜自

第四章 趙燕晋秦の興亡—晋秦の抗爭……………六十六丁

冉閔。後趙亡ふ。苻苻蒲洪。苻秦起る。苻苻弋仲。苻

襄。桓温秦を伐つ。秦王苻堅。王猛。燕亡ふ。桓温の

異謀。謝安。涼。涼亡ふ。劉衛辰。秦代を定む。劉庫仁。

第五章 苻堅の敗—晋室の亡……………六十八丁

謝玄。後燕。後秦。西燕。南凉。北凉。西凉。拓

跋珪。南燕。後魏。柔然。夏。桓玄。劉裕。南燕

亡ふ。後秦亡ふ。東晋亡ふ。

第六章 魏武の経略—宋齊の篡奪……………七十丁

太武帝立つ。夏北燕北凉みな亡ふ。五胡。十六國。南北

朝。蕭道成。宋亡ふ。蕭衍。齊亡ふ。

第七章 魏の分裂—魏梁の滅亡……………七十二丁

魏初の清帝。魏の政亂る。高歡。爾朱榮。宇文泰。東

魏西魏。 侯景梁を亂す。 陳霸先。 北齊東魏に代る。 後梁。

第八章 齊周後梁陳隋の一統……………七十五丁

北齊亡ふ。 揚堅。 周亡ひ隋起る。 後梁亡ふ。 陳亡ふ。

南北一に統ふ。

第九章 朝鮮の古代—支那との關係……………七十六丁

箕子。 秦開。 燕王盧縮。 衛滿。 涉何。 三韓。 後の三

韓。 百濟。 新羅。 雞林。 公孫康。 母丘儉。 日本と朝

鮮。 任那。 日本府。 儒佛朝鮮に入り日本に傳ふ。 高麗最

強最盛の時。 任那新羅に降る。

第十章 印度—佛教の東漸……………八十丁

度羅毘陀種。 亞利亞種。 四族。 釋迦。 マリアス王の侵入。

亞歷山大帝。 セレウコス。 毛利亞朝。 亞輪迦。 アンドラ

朝。 一佛教の流傳。

目次終

中等教科 東洋史卷一

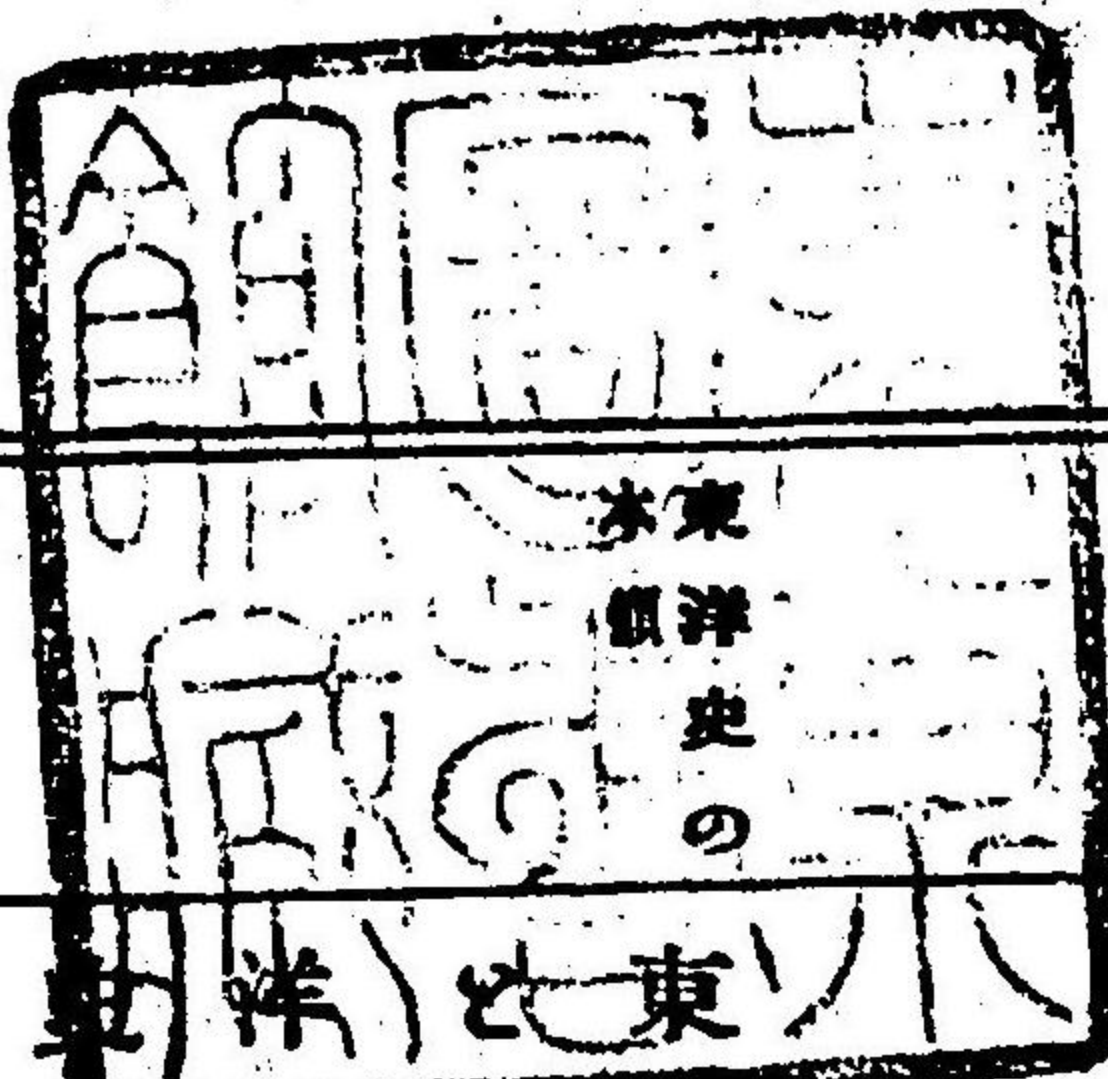
文學士 藤田 豊八 著

總論

第一章 東方亞細亞の地勢

東洋史は支那を中心とし、史上之に關聯せる諸國民を併せて、一團體とし、その團體の史を科學的に叙述するものなり。もと東洋とは、西洋に對する名稱にして、大抵亞細亞全洲を指す。たゞ東洋史に屬する東的團體は、時によりて伸縮ありと雖も、先づ東方亞細亞一帶の國民を包含するものとして、可なり。

亞細亞大陸の中、最も大なる山脈を喜馬拉耶山脈となす、東に走り雲南を過ぎて、苗嶺山脈、五嶺山脈、武夷山脈となる。この三派は西人の稱して南嶺となせるものなり。喜馬拉耶山の西北端より西に走るもの



山脈

を興都克士山脈となす。この山脈は西してエルブルツ山脈となる。又別に喜馬拉耶山脈よりスレーマン山脈出づ。興都克士山脈の東端より正東に進むものを崑崙山となす。その末枝は南北二支となる。南支は東に進みて巴顏喀刺山となり、岷山となり、秦嶺となり、熊耳山となり、天柱山となる。西人は岷山より天柱山に至るまでの山脈を北嶺と稱す。北支は阿爾金山となり、祈連山となる。賀蘭山より東に陰山あり、走て興安嶺となり、スタノナイ山(亞爾泰脈)となる。崑崙山脈の北に天山山脈あり。この兩山脈の西端相會するところに高原あり、その最も高き所を葱嶺といふ。その西は所謂パミールの高原なり。滿州の南に長白山あり、東北にすゝみて完達山となり、西南にすゝみて分水嶺となる。

以上の上の山脈は、大凡之を三大別すへし。喜馬拉耶山脈、興都克士山脈、天山山脈是なり。亞細亞洲は、この三大山脈によりて大凡四大區劃となる。即ち

四大區劃

東方亞細亞 北はスタノナイ山脈によりて境せられ、西は葱嶺に至り、西南は喜馬拉耶山脈によりて限らる。日本、支那、朝鮮の全部、露領の一部を包含す。

南方亞細亞 喜馬拉耶山脈の南、スレーマン山脈の東の地にして、印度、安南、暹羅、緬甸等を包含す。

西方亞細亞 エルブルツ山脈の南、スレーマン山脈の東の地にして、阿富汗斯坦、俾路芝斯坦、波斯、亞刺比亞、亞細亞土爾古等を包含す。

北方亞細亞 興都克士山、天山、スタノナイ山以北の地にして、土耳其斯坦、西伯利亞を包含す。但し露西亞は政治上區劃の必要より、西亞細亞の中に中亞細亞なるものを置く、即ち南興都克士山を以て西亞細亞と界し、東は葱嶺に至り、北はキルギス平原を包含す。

東洋史的の團體に屬するものは、主として東方亞細亞に國せる國民族にして、多く蒙古種に屬す。故に他の三大部に住せる國民は、やゝ客位に居るものなり。

東方亞細亞中、最も有名なる川流を黄河とす。蓋し支那文化の曙光は此河に負ふところ頗る大なり。その支流中、歴史上著名なるものを、涇水、渭水、洛水、汾水、濟水等とす。黄河の南方に江水流る、俗に揚子江といふ。上流を金沙江と稱し、岷江と合して長江或は大江と呼び、その海に注ぐところを揚子江といふ。支那は實に江水によりて南北に二分せらる。江水の支流中、大なるものを漢江、湘江、贛江とす。その南に浙江、甌江、閩江、珠江あり。南方亞細亞に於て、河の大なるものに李仙江(下流を紅河といふ)、瀾滄江(下流を眉公河、東、蒲、秦、河ともいふ)、湄南河、洛江(下流を薩爾文河といふ)、イラワデー河、雅爾藏布江(下流を布刺麻、普特刺河といふ)等あり。なほ西に至りて恒河(梵語にてセガンガ、英語にてガンダス)及印度斯河あり。印度斯河は印度古代の開化を促かし、西方亞細亞のナグリヌス河及ユーフラテス河は、小亞細亞上世の文化を誘起せり。蓋し世界文化の曙光は、黄河河邊の蒙古人種、印度斯河邊のアリアン人種、ナグリヌス河邊のセミナツク人種、ナイル河邊のハミナツク人

種等より發せり。而して前二者は東洋史中の史的團體に屬し、後二者は西洋史中の史的團體に屬す。但しインダス河邊アリアン人種の文化は、黄河河邊蒙古人種の文化に影響せしこと、諺からざるを以て、暫く東洋史中の史的團體に屬するのみ。北方亞細亞中、西伯利亞の大河は、オビ、エニセー、レナの三者とす。然れども史に關係を有するものは、黒龍江、阿睦爾を最とす。烏蘇里江、松花江の二大支流を有す。その他圖們江、鴨綠江、遼河、海河、白河等あり。白河は永定、滹沱、漳等の河と合して海に注ぐ。蓋し北方亞細亞の地は、氣候寒烈にして、東方亞細亞中、支那の北方一帶の地には、沙漠あり。戈壁といふ、斷續西にす。みて亞弗利加のサハラに達す。その中有名なるものは、土爾其斯坦のキ、ア、波斯のイラン等なり。されば、此等の地方は遊牧の民の住するのみにて、南帶地方の如く、終に開明の運に向はさりき。次て、なほ略言せざる可らざるは、東洋史的團體に屬する主要諸國、現時の政治的區劃なり。支那は鴨綠江を以て朝鮮と界し、北は大略阿爾

泰山を以て露領西伯利亞に接し、西はバミール高原を以て土爾其斯坦と界し、南は喜馬拉耶山脈を以て印度と界し、また安南、緬甸と接す。安南と暹羅とは眉公河を以て境とし、暹羅と緬甸はサルウエン河を以て界とせり。北方亞細亞及西方亞細亞は露西亞之を領し、印度の全部は英に屬し、安南中東京は佛の有に歸し、安南また佛の保護國となる。その他阿富汗斯坦の獨立は名のみにして、俾路芝斯坦の一部既に英領に歸し、朝鮮また危し。亞細亞洲中眞に獨立の名實を有するもの、我日本と支那とのみ。

第二章 人種——時期の區分

東洋史的團體に屬する人種は、大抵蒙古種にして、アリアン種の一部之に屬す。然れどもアリアン種は、たゞ幾分の關聯にすぎざるか故に東洋史は地理上より云へば、東亞細亞の史にして、人種上より云へば、蒙古種の史と稱すべし。今之を大別すれば大凡七族あり、即ち
第一漢族 自ら稱して夏といふ。東洋文化は實に此種より發す。う

七族

の起原につきては、今なほ種々の説ありて決し難しと雖も、その史的討究に價すへき時代に於ては、支那黃河の北岸に棲息し、漸次他族を驅逐して、遂に支那全土に蔓延せしか如し。支那種族中最も主要なり。
第二苗族 越族また之と同族なり。漢族の未だ南下せざりし以前に當りて、此族河江の間に住し、實に支那最古の人種とす。支那史中、苗、獠、獍、獠等と稱し、現時は湖北、湖南、四川の一部、及貴州、雲南の殆ど全部に居る。漢族と同化せず、依然未開の陋俗に安んず。安南、暹羅また此族に屬す。

第三通古斯族 古代の肅慎、挹婁、勿吉、靺鞨みな此族に屬す。中世に於ける金、近世に於ける清、また此族なり。現今黑龍江、松花江の間に散居す。幾多の小種族に分れ、滿州族最も大なり。

第四都爾古族 周代の獯鬻、獯豸、秦漢の匈奴、唐時の柔然、突厥みな此族に屬す。現時新疆省の天山以南、即ち支那土耳其斯坦の地に住す。また中央亞細亞および阿多曼帝國の人民は、大抵此族に屬す。

第五蒙古族 秦漢の際東胡と稱す。匈奴に破られて、烏桓、鮮卑等となり、拓跋慕容等みな之に屬す。唐末に至り鮮卑の支族契丹、内蒙古の東部より起り、國を遼と號す。金に敗られ、その族伊犁地方に逃れ、巴爾噶什湖西に西遼國を立つ。後乃蠻に亡はさる。元は實に此族なり。現時内外蒙古、青海および露西亞の一部に住す。歐州の東部また此族の餘類あり。

第六圖伯特族 月氏、氐、羌等みな之に屬す。當時吐蕃、黨項みなこの別族なり。即ち現時西藏の人民にして、緬甸族もまた屬す。故に或は圖伯特、緬甸族とも稱す。

第七韓族 朝鮮半島南部に住せし人種なり。朝鮮の北部には漢種住し、また支那の北方より貊族南に移り、夫餘、高句麗、沃沮、濊等の國を立てたり。貊種は肅慎と同種なるか、將た東胡と同種なるか、今知る可らず。

東洋史は此等七種の人民の興敗を尋ぬ。然れどもその中、主動の位置

に在るものは漢種にして、之に次くものは蒙古種および滿州種とす。今討究に便ならんかため、漢種と他種との勢力消長、社會進運の大勢に鑑み、東洋史を分て三紀とす。即ち

第一紀 古世 太古より秦に至る大凡二千餘年の間を含む。漢族漸々勢力を得て殆ど支那全土に及はんとす。然れども眞に支那全土を統一し、且つ境域判明して國家の體面を具ふるに至りたるは、秦に至りて始めて之を見る。此期は漢族發達の時期と謂ふべし。

第二紀 中世 秦漢より唐宋に至る大凡一千三百年の間を含む。大抵漢族の勢力膨張して他族を壓したる時期とす。また之を三期に小別すべし。即ち秦、兩漢、魏、晉、南北朝を上期とし、隋唐を中期とし、五代および宋を下期とす。三期中一時、他族、漢族を壓せしむ。未だ漢族以外の種屬にして、支那全土を據有せしものはあらず。

第三紀 近世 元、明、清の間大凡七百餘年を含む。中世下期に至りて、漢族以外の種族頗る勢力を加へ、蒙古族なる元朝先づ支那全土を

教科書 洋史 支那史 文庫 學社

呑み、その族の威力遠く西歐に及び、一旦明、漢族を以て之を斃したりと雖も、滿人また北方に起りて之を仆し、即ち現時の清朝を建つ。アリアン人種、蒙古人種此紀に至りて漸く撞突の端を開き、東西兩洋を渾一したる世界史の第一葉は、今や方に開かれぬ。

上世史

第一篇 堯舜三代

第一章 上古の傳説——堯舜の事蹟

支那の文化は、黃河の北岸に栖息せし漢族に起る。傳ふる所によれば太古燧人氏なるものあり、始めて燧を鑽て、民に火食を教ふ。伏羲氏なるものあり、始めて八卦を畫し、網罟を結ひて佃漁を教ふ。神農氏なるものあり、始めて耜耒を爲りて耕稼を教へ、日中市を爲して交易を教ふ。後世之を三皇と稱す。

黃帝は軒轅氏と稱す。神農氏の世衰へ諸侯相侵す。軒轅乃ち干戈を用ひて之を服す。神農氏と阪泉の野に戦ひて之に克つ。當時蚩尤なるもの兵力尤も強し。帝之と涿鹿の野に戦ひて之を禽にす。遂に地を略して、東は海に至り、西は空桐に抵り、南は江に達し、北は釜山に及ぶ。帝始めて器用を作り、舟車を製し、宮室を營み、蒼頡に命じて文字を作らし

五帝 顓頊 帝嚳 帝堯 帝舜 相襲きて立つ、之を五帝と稱す。

五帝

めしといふ。その他諸種の發明みな之を黃帝に歸す。帝涿鹿に都す。帝顓頊、帝嚳、帝堯、帝舜、相襲きて立つ、之を五帝と稱す。以上の傳説は、今を距る四千數百年前のことに屬し、漢人種の支那西北黃河沿岸に於て部落をなし、その開明の度頗る他の種屬に越ゆるものありしを證するのみ、固より事實として信し、かきものも多し。堯舜の時に至りて、人文既に開け、支那の史蹟はよりして較述ふるを得へし。

堯舜

曆法

堯舜の世は今を距ること四千一百餘年、我紀元に先つこと一千六百餘年、後世學者の最も稱述するところたり。帝堯陶唐氏は、帝嚳の子にして黃帝の後なり、頗る仁徳あり、その臣義和に命じて曆象を主らしめ、日行一周天の期を測りて三百六十六日と定め、月行十二回を以て一年となし、閏月を置きて四時を正す。後世曆法みな之に原く。帝の晩年洪水國中に横流して、民定處するを得ず。帝崇伯鯀をして之を治めしむ。九歲績あらず。舜の賢をきき、擧げて天下の事を攝行せしむ。堯の

洪水

舜

禹水土を平く

子不肖なり、舜位に即く。舜は瞽瞍の子にして顓頊の後なり。父頑、母嚚、弟象傲る、舜咈し、漁し、陶し、孝悌の道を盡して善く父母に事へ、その弟を待し、克く諧へて姦に至らしめず。人みなその徳に服す。舜遂に堯に相として政を攝す。四嶽に巡狩し、群后を朝し、時月を協へ、律度量衡を同くし、群后朝聘の禮を修む。また賢を擧げ凶を斥く。驩兜を放ち、共工を流し、鯀を殛し、三苗を竄す。帝權や、振ふ。舜、鯀の子禹を擧げて水土を治せしめ、卒に以て功を成す。

唐虞の世

當時朝廷九官みなその職に協ふ。禹初め司空となり、後百揆に宅す。棄后稷たり、契司徒たり、皋陶士たり、垂共工たり、伯益虞たり、伯夷秩宗たり、夔樂を典り、龍納言たり。而して禹、皋陶、稷、契、益、最も顯る。地方には四嶽十二牧あり。五歲一たび巡狩し、三歲績を考へ、三考して黜陟を行ふ。堯初め陶に居り、後唐に遷る、故に陶唐氏と號す。位に即くに及びて平陽に都す。舜虞に位に即く、故に有虞氏と號す。故にまた堯舜の世を唐

中華 東洋 史 上世史 七

史記 卷八 周本紀 八

虞の世と稱す。舜南狩して蒼梧の野に崩す。その子不肖なり。禹位に即く。

第二章 夏商の興亡

舜の政策は中央の權を大ならしめ、漢族の威頌る他に加はれり。中央に於ては四凶を除き、地方に於ては巡狩朝覲以て群后を督す。三苗は苗族の先なり。江の沿岸に栖息す。險に據り漢族に抗す。舜その渠酋を竄逐す。その死また實に苗種征討の途にありき。禹其政策を襲ひ、帝權漸く揚り、漢族益盛なり。

夏后氏禹は顓頊の後、鯀の子なり。その父に代りて洪水を治せしや、身を勞し、思を焦し、外に居る八年、九州を開き、九道を通じ、九山を渡り、九川を決して海に至らしむ。支那九州の區劃こゝに創まる。因て各州の貢賦を定め、五服の制を立つ。四夷みな懽服す。唯苗民頑固獨り従はず。禹、舜の命を奉して之を逐ふ。是より苗種益衰へて復た漢種に抗する能はず。舜崩して禹位に即き、夏后氏と號し、安邑に都す。夏より以下殷

苗族

禹

九州

苗戎ふ

三代

世

桀

湯

伊尹

周みな王と稱す。之を三代の世と云ふ。而して子孫相襲きて天下に君臨するの制は、實に夏に創まる。

禹崩して其子啓賢なり。立て天子となる。是れ世襲の天子の始めなり。有扈氏服せず。啓之を甘に破る。啓の子太康立つ。盤遊返らす。有窮の后羿、その弟仲康を立て、その政を専らにす。仲康崩して子相立つ。羿相を逐ふて自立す。その臣寒泥又羿を殺して自立す。相の子少康夏の舊臣靡に依り、兵を擧げて泥を滅じ、遂に禹の績を復す。夏國を失ふこゝに至るまで四十年。少康の子王杼立つ。外藩また來朝し、夏道興る。杼より六世を経て孔甲に至り、夏亂る。孔甲の後三世を癸と曰ふ。暴虐淫荒なり。世號して桀といふ。國人大に崩る。遂に湯に滅はさる。時に皇紀前千有餘年なり。禹より桀に至るまで十七世、四百有餘年なり。

湯は子姓、その先契唐虞の司徒となり、商に封せらる。湯に至りて亳に居り、葛と隣す。葛伯暴戾なり。湯之を征す。十一國を伐て諸侯服す。初め莘の人伊尹を用ひて桀を伐ち、之を南巢に放つ。諸侯湯を奉して天子

中華史 上世史 八

となり、國を商と號す。實に我紀元前千九十餘年なり。湯の孫を太甲と云ふ、湯の典刑を顛覆す。伊尹之を桐宮に放つ。三年過を悔い自ら責む。尹乃ち奉して亳に歸る。諸侯之に歸す。號して太宗と稱す。太甲より四世をへて太戊に至り、伊陟相たり、先王之政を修め、商道復た興る。號して中宗と稱す。大戊以後商道漸く衰へ、國都屢遷る。盤庚に至りて都を殷に奠め、諸侯また附す。商是より殷と稱す。武丁に至り、甘盤を師とし、傳説を相とす。殷また大に治まる。號して高宗と稱す。武丁の後陵遲して振はす。四世をへて武乙に至り、都を朝歌に遷す。無道にして天人を僂辱す。曾孫帝辛名は受、號して紂となす。智辯材力人に過く、賦歛を重くし、刑罰を酷にし、荒淫度なり。庶兄微子諫めて去り、比干諫めて死し、箕子佯狂して奴となる。百姓怨み、諸侯畔く、遂に周の武王に亡はさる。商王たる大凡三十世、六百有餘年にして、その亡實に皇紀前四百五十餘年に當る。

第三章 周の興起——その東遷

殷の末年、紂暴戾の時に當りて、西伯昌雍州に興る。昌は姬姓、其先后稷棄、唐虞に仕へて民に稼穡を教へ、部に封せらる。子孫世々后稷となり、以て夏の事ふ。夏衰へてその官を失ひ、戎狄の間に竄る。古公亶父に至り、國を岐山の下に建て、周と號す。亶父の孫昌立ちて仁政を施す。諸侯多く之に歸し、國勢頗る盛なり。紂昌を召して羨里に囚ふ。後赦されて西伯となる。伯は諸侯の長なり。昌こゝに於て征伐を専らにするを得たり。昌賢に禮し、士に下り、呂望、伯夷、散宜生の徒みな歸す。崇を敗り、豊邑を營み、遷て之に都す。化江漢に及び、殆ど當時の支那全土の三分二を有つ。昌卒し子發嗣て西伯となる。時に紂暴虐益甚たしく、人心離散す。發諸侯を率ひて殷を伐つ。呂望師を督し、殷の師と牧野に戦ひ、大に之を敗り、遂に王となる。之を武王となす。昌を諡して文王といふ。是に於て大に宗族功臣を封す。太師呂望を齊に、王弟周公旦を魯に、召公奭を燕に封じ、紂の子武庚を立て、殷の後となし、管叔、蔡叔、霍叔をして之を監せしむ。また箕子を朝鮮に封す。朝鮮は今の朝鮮の西北境なり。

成王
周公旦

先王の後みな封せらる。當時諸侯となりしもの兄弟十五人同姓四十人異姓二十餘人なりき。王の崩するや、東夏未だ夷かす。子成王誦なほ幼なり、周公太宰となり政を攝り、召公太保となり、王躬を保す。管蔡等周公を忌み、且つ殷民の服せざるものあるに乗じ、流言して曰く、周公將に孺子に不利ならんとすと、遂に武庚と亂をなす。奄、徐、淮夷（奄の故地は魯州府曲阜縣の南に在り、徐の故地は魯州府臨沂縣の南に在り、淮夷は淮水の南に在り）並興る。周公東征すること三年にして事平く。乃ち成王の弟康叔を衛に封じて、殷民を抑へしめ、微子を宋に封じて殷祀を紹かしむ。又成王の弟唐叔虞を晋に封す。世始めて治平なり。周公經綸の美才あり、禮を制し樂を定む。周代の禮制文物、こゝに至りて三代に冠たり。後世みな則を取る。漢人今に至るまで、當時を以て支那極盛の世となす。王長して周公政を還へす。

西都東都

初め武王鎬京を作る。之を宗周と謂ひ、之を西都となす。後世長安の地なり。將に洛邑を營まんとして果さず。成王父の志を成す、之を東都となす。後世洛陽の地なり。王西都に居り、諸侯を東都に朝會す。周公召公

周道始め

共和
宣王

幽王

成王を相け、陝より以西は召公之を主とし、陝より以東は周公之を主とする。四方來歸す。成王崩して子康王立つ。成康の際天下又安、刑錯きて用ひさること四十餘年なりしと云ふ。

康王崩して昭王立つ。周道始めて衰ふ。子穆王に至りて犬戎を征す。荒服至らず、西夷漸く中國を犯す。三世をへて夷王に至り、諸侯の權漸く大なり。楚始めて僭して王と稱す。厲王繼きて立つ。虐なり。謗者を殺す。三年國人難を作して、王彘に奔る。諸侯政に間すること十四年、稱して共和といふ。厲王崩して宣王を迎立す。是時四夷みな周に畔き、獫狁京邑に逼る。王尹吉甫に命じて之を伐たしむ。また方叔に荆蠻を、召公虎に淮夷を征せしめ、王親ら徐夷を討つ。仲山甫王を佐けて政を行ふ。後世稱して中興の主となす。晩年漸く政に怠り、姜戎と戦ひて南國の師を失ひ、魯を伐ちて諸侯心を離す。宣王崩して子幽王立つ。褒姒を嬖じ、申后たよひ太子宜臼を廢す。宜臼申に奔る。申は其母の國なり、申侯西夷犬戎を誘ひ、周を攻め、王を驪山の下に殺す。鄭の桓公之に死す。晋の

平王 東周

十二諸侯 及吳越

文侯、衛の武公、秦の襄公、師を帥ひて周を救ひ、犬戎を破り、鄭の武公と共ニ故の太子宜臼を立つ。是を平王となす。當時戎狄の勢甚九昌なり。而して西都は戎に近きを以て、徙て洛邑に居る。是を周の東遷といひ、是より周を東周といふ。諸侯益大に、五霸迭に興る。その事を載する籍を春秋といふを以て、史家之を春秋の世と稱す。武王より幽王に至るまで、凡十二世三百五十二年なり。(皇紀前一〇七)

第四章 春秋——覇者

支那の群后古萬國と稱す。その實族長にすぎず。世々相兼併し、周末春秋の時に至りては、諸侯の大なるもの十有二國、その周と同姓なるもの魯、衛、晉、鄭、曹、燕、燕、その周と異姓なるもの齊、宋、陳、楚、秦最も顯はる。周東遷の後、力また諸侯を制するに足らず、諸侯互に富強を計り、力争を事とす。而して上、周室を戴き一時諸侯を糾合するもの、之を覇といふ。覇は即ち伯にして諸侯の長なり。十二列國の中に於て、齊桓公、宋襄公、晉文公、秦穆公、楚莊王を五覇といふ。吳の闔廬、越の勾踐また覇者と稱

齊桓公

管仲

楚文王

せらる。而して當時の大勢より云へは、支那北方の齊、晉と南方の楚と西方の秦との三勢力鼎立攻争せるなり。

平王より二世をへて、僖王に至り、齊侯小白始めて覇たり、呂望十五世の孫なり。時に長兄襄公無道なり。鮑叔牙小白を奉して莒に奔る。襄公亂に死す。小白入て立つ、之を桓公となす。桓公大略あり、怨を釋て、重く管仲を用ふ。管仲制度を更新し、専ら富強を以て民を率ひ、夷狄を攘ひ、諸夏を救ふ。七年にして諸侯を鄆に會し、始めて覇業をなす。(皇紀前三) 三、周末より戎狄漸く強く、中國その侵犯に困む。白狄、赤狄、西北の地方に居り、山戎諸部その東北に居る。桓公の時に及ひて、山戎、燕を攻め、戎衛を亡はし、また刑を破る。桓公之を攘ひ、衛を存す。當時南方楚の武王、荆蠻の間に崛起し、文王傍近の諸侯を滅して、豫州の南境に及ぶ。成王に至りて、勢中國を壓す。桓公中國諸侯を帥ひて楚を伐つ。是に於て南北二大勢力始めて衝突す。遂に召陵に盟ふ。(皇紀三) 桓公威力を以て諸侯を制すと雖も、毎に尊王の義を忘れず。遂に諸侯

宋襄公

晉文公

城濮の戰

を九合し、天下を一匡せり。皆管仲の力なり。仲死し、桓公小人を昵近す。權漸く傾く。その卒するや、（五）五公子の亂あり。霸業遂に墜つ。時に宋に襄公あり。微子十六世の孫なり。齊の亂を馘めて盟主たらんとす。宋國小なり。もと霸王の資にあらず。襄王十三年、公諸侯を鹿上に會し、楚に辱しめらる。明年、楚と泓に戰ふ。敗績傷を蒙りて卒す。楚獨り南方に雄たり。中國諸侯能く之と抗衡するものなし。尋て晉に文公出つ。その父獻公計を以て虢を討し、虞を襲ひ、共に之を滅して國始めて大なり。獻公驪姫を嬖して太子を殺す。公子重耳出奔す。秦穆公の力によりて國に入る。之を文公となす。（六）文公外に在る十九年、狐偃、趙衰、賈佻、魏犢等と諸侯の國に周遊し、具さに世故に習ふ。歸りて國政を修め、先づ王に勸めて赤狄を逐ひ、宋を救ふて楚を城濮に敗る。楚北上の勢や、挫く。王晉侯に策命して侯伯となす。王庭に盟ふて曰く、みな王室を獎けて相害するなかれと。中國諸侯みな晉に従ふ。晉世々老成人あり、君を輔く。後百有餘年、霸業を墜さす。

秦

穆公

崤の戰

楚

莊王

齊晉の霸は所謂中國諸侯の霸なり。當時西方に秦あり。其先嬴非子始めて秦に封せられしより、毎に戎狄と戰ひ、兵漸く強く、國漸く大なり。襄公に至りて、平王の難に赴き、功を以て諸侯となる。平王の東遷するや、岐豐の地皆秦の有に歸す。うの後、穆公に及びて、百里奚、蹇叔等を用ひて國勢益盛なり。晉を敗りて河西の地を取り、文公を納れて晉君となし、戎を伐ちて國を益すこと二十、地を開くこと百餘里、遂に西戎に霸たり。屢中國を覬覦し、鄭を襲ふて志を得ず。晉襄公の爲に大に崤に敗らる。是より秦晉兵を構ふること七十年、秦終に志を中國に得ず。當時の所謂中國は西方秦を防ぎ、また南方楚を閉かざる可からず。齊晉の覇者漸くその北方を遮きりしと雖も、南方楚の勢は日に昌なり。楚の成王嘗て齊晉宋と覇を争ひ、穆王を經、莊王に至りて遂に諸侯に霸たり。莊王は成王の孫なり。既に位に即きて庸を滅し、蠻濮（夷）を服し、陸渾の戎（西戎の一種、入て河）を伐ち、遂に洛に至り、兵を周の境上に觀す。蓋し周を圖るの意ありたるなり。莊王薨、艾獵を擧げて民を教化し、衆

鄭の戦

舒(魯姓諸侯、故地安、魯州府にあり)を平け、吳越と盟ひ、陳の亂を定む。
初め鄭己に楚に服し、また晉に事へんことを求む。莊王鄭を圍み、之を降す。晉鄭を救ふ。莊王之を鄭に敗る。(周紀六四)莊王のち宋を圍む。晉宋を救はず。宋遂に楚と平く。莊王の時楚國治疆にして、南方の勢全く北方を壓せり。其子共王立つ。威をば中國諸侯の間に振ひ、齊魯秦等皆楚と平く。一時晉の勢や挫く。

鄭陵の戦

周簡王の時、晉の厲公秦楚と平く。三大強國の調和漸く成らんとす。然るに秦楚みな盟に叛きて事また破る。厲公諸侯を帥ひて、秦を伐ちて之を敗り、また鄭を伐つ。共王之を救ひ、鄆陵に戦ふ。楚師敗績す。厲公弒せられ、悼公立つ。賢を擧げ、能を使ひ、人職に協ひ、民業に安んず。晉復た盛なり。悼公先つ諸戎と和し、又鄭と成き、民を息むる所以を謀る。國滯積なく、家貧民なし。用を節し、費を省く。期年にして富強の實舉かる。三駕して楚與に争ふ能はず。諸侯遂に睦し。悼公卒し、子平公立つ。靈王二十三年(五三)秦晉成をなし、後三年晉楚また成く。晉楚覇を争ふこと八

晉楚相平

鄭子産

十餘年、是に至りて始めて平く。
晉楚相抗するや、鄭地その間に介まり、兩國必争の區となる。晉に従はんか、楚之を攻む。楚に従はんか、晉之を攻む。兩國兵力の消長によりて、或は晉に歸し、或は楚に歸す。而して毎に兩國の兵を被るを免れず。周景王の時、鄭に子産出つ。名は僑、その晉楚を待つや、禮を以て自ら固くす。僑の世を没するまで兩國敢て加ふ能はず。

吳

楚の東境海に濱して吳國あり。古周太伯の封せられし地なりといふ。相傳へて壽夢の時、楚の申公巫臣晉に奔る。楚か其族人を殺ししを怨み、晉侯に請ふて吳に使す。吳を晉に通せしめ、之に車戰の法を教へて楚に叛かしむ。是より吳屢楚を伐ち、國勢始めて強し。その後闔廬の時、楚の亡臣伍子胥來る。名は員、楚の平王其父兄を殺ししかは、吳に依りて怨を報せんと欲するなり。闔廬その謀を用ひて楚を伐つ。楚の勢始めて傾く。周敬王十四年(五五)晉定公諸侯を帥ひて楚を犯す。功なくして歸る。晉もまた是に於て諸侯を失ふ。周五年伍員吳の師を導き楚

晉楚衰ふ

を伐つ。進て郢に及ふ。平王の子昭王出奔す。申包胥秦の師を假り、楚を復し、昭王を迎ふ。然れども楚遂に振はす。三大國獨り秦のみ衰へす。吳の南に越あり。夏后氏の後封せらる。吳王闔廬越を伐つ。越當時の王を勾踐といふ。之を攜李に敗る。闔廬傷きて死す。子夫差立つ。誓て父の仇を復さんと期す。周敬王二十六年(二七)越を夫椒に敗る。勾踐餘兵を以て會稽に逃れ、成を吳に乞ふ。伍員以て不可となす。夫差員に聽かず。嬖臣の言を用ひて越の乞を許す。勾踐その臣大夫種、范蠡と兵を治め、吳を圖る。吳王既に越と成き、齊を伐ち中國に覇たらんと欲す。敬王三十八年(二八)諸侯と黃池に會す。勾踐虚に乗じて吳を攻め、その都に入る。周元王元年(二九)越吳を圍む。吳の師潰ゆ。夫差成を乞ふ。越聽かず。夫差自殺す。越已に吳を平け、北中國を攻む。諸侯入朝し、覇業成る。南方覇となりしものこゝに至りて三、北方の勢力遂に南方に輸す。秦は威を振ふ。周東遷より元王崩するに至るまで、凡十五世三百有二年、周室愈微に、諸侯離合して僅に七大國となる。之を七雄といひ、世を戰國

と稱す。

第五章 戰國

(一) 七國の形勢—秦の富强

春秋の時、諸侯は尊王の心を存じ、覇者迭に興り、諸侯の相攻争するを防ぐ。また間、周に朝するものあり、降りて戰國に至り、各國獨立の狀を呈し、富强これ競ひ、力征これ事とし、また能く之を制するものなし。而して三卿晉を分ちて、韓、魏、趙新に興り、田氏齊を奪ひて、姜氏血食せず。越南に衰へて、燕北に興り、秦楚を合して七雄と稱す。

晉初より臣權重し。悼公卒し、平昭頃三世をへて公室益卑く、范、知、中行、趙、魏、韓氏皆大なり。是を六卿となす。出公に至りて知氏、趙、魏、韓氏と謀りて、范、中行氏の地を分つ。(一)出公怒る、四卿反て公を攻む。公出奔して道に死す。知伯貪にして、復三卿知氏を滅して其地を分つ。(二)號して三晉といふ。威烈王二十三年(三)周の命を以て侯となる。魏に文侯といひ、趙に烈侯といひ、韓に景侯といふ。

七雄

韓魏趙

田氏

魏趙韓氏晋を分つに當て田襄子齊に相たり三家と通す蓋し三家且に晋を有たんとし田氏且に齊を有たんとするなり齊は桓公の後景公に至りて晏子あり節儉力行を以て齊に重せらる數世公室卑弱にして田氏獨り大なり襄子の孫和に至りて遂に齊を奪ふ魏の文侯に會して侯たるを求む周安王十一年(七〇三)之を許す之を太公となす當時中國の諸侯公室輕く臣權重く春秋の末年魯は三桓の亂す所となり孔子相となり之を抑へんとして果さず齊晋また重臣の奪ふ所となる而して新興の諸侯の中魏の文侯最も賢なり四方の士多く之に歸す外は樂羊をして狄を伐たしめ内は李埋をして民に地方を盡すを教へ國富み兵強し吳起を用ひて秦の五城を拔く吳起善く兵を用ふ士卒と衣食を同くし勞苦を分つ衆之かために死するを樂む魏の西河を守て秦人敢て東に向はず文侯卒して子武侯立つ吳起合はす去て楚に之く楚の悼王位にあり以て相となす起法令を明にし強兵を勉む南百越を平け北三晋を却け西秦を伐つ楚また興る悼王卒

楚また興る

吳起

魏

秦

孝公

孫鞅の變法

して貴戚大臣起を攻めて之を殺す齊太公の孫を因齊といふ後王と稱して威王といふ初め立つ時國治まらず諸侯來り侵す王非を飾るものを罰して齊國大に治まり兵を被らさるもの二十餘年なり時に西方秦の勢漸く中國を壓せんとす是より先き穆公西戎に覇たり世々その威を墜さすたゞ地邊陲に僻在せるを以て中國諸侯みなり夷狄を以て秦を遇し攘けてその會盟に與かるを得しめす十餘世をへて孝公に至り發憤政を修め以て秦を強くせんとす顯王八年(三〇三)孝公令を下し能く奇計を出して秦を強くするものを募る衛の公孫鞅法術の學を好む公に見えて富強の術を説く孝公大に悦び與に變法の令を定め民をして什伍をなし相收司して連坐せしめ姦を告げさるものは腰斬し姦を告ぐるものは敵を斬ると賞を同くし姦を匿すものは敵に降ると罰を同くし軍功あるものは各率を以て爵を受け私闘をなすもの各輕重を以て刑を被る大小力を黜せ耕織を本業とす粟帛を致す多きものは賦役を除き工商を事としれよひ怠て

秦人富強の基立つ

貧きものは、擧げて以て收撃となす。民二男以上ありて、家を分たさるもの、その賦を倍し、宗室も軍功なければ、宗屬の籍に入るを得ず。井田を廢し、阡陌を開き、更めて賦税の法を作る。要するに、民を農戰に縛して、富國強兵の實を擧げんとするなり。鞅計を以て之を民に信じ、峻嚴法を執り、太子と雖も假借せず。秦人みな令に趨く。之を行ふ十年、道遺を拾はず、山盜賊なく、家々給じ、人々足る。民公戰に勇にして、私闘に怯なり。鞅また諸小郷を并せて一縣となし、縣に令丞を置く、凡て三十一縣、秦人富強の基こゝに立つ。

是時に當りて、韓の昭侯申不害を相とす。不害は故の鄭の賤臣なり。その學黃老に本つき、刑名を主とす。申子の身を終るまで、國富み兵強じ。顯王二十八年、魏の惠王韓を伐つ。韓の昭侯救を齊に乞ふ。齊の宣王田忌孫臏をして魏を伐たしめ、大に之を馬陵に破る。明年孝公鞅の計を用ひて魏を破る。魏の惠王河西の地を秦に獻じ、都を大梁に徙す。秦鞅を商於の地十五邑に封じ、號して商君といふ。商君法を用ふる峻酷、人

蘇秦合縱を説く

多く之を怨む。孝公卒じ、惠文王立つ。遂に車裂以て徇へらる。

(二) 合縱連衡——秦七國を併す

秦今や關を出て、力を東方に宣ふ。諸侯抗する能はず。周人蘇秦こゝに於て合從の説を唱ふ。從は縱なり、南北を縱となす。南北六國相合して秦に當らんとする、之を合縱と謂ふ。蘇秦曾て秦に如き、惠王に説くに、天下を兼ぬるの策を以てす。用ひられず。顯王三十六年(五紀三)北、燕の文公に説くに、秦の燕を伐たさるは、趙その南を蔽ふか爲めなるを以てし、趙と從親すへきを獎む。文公之に資す。趙に至り、肅侯に説くに、六國從親して秦を攘するの計を以てす。肅侯乃ち之に資して、以て諸侯に説かしむ。皆聽るす。乃ち約して曰く、秦一國を攻めは則ち五國之を救はん。約の如くせざるものあらは、五國共に之を伐たんと。蘇秦從の長となり、六國の相印を帶ひ、北、趙に報す。既にして秦公孫衍をして齊魏を欺き、趙を伐たしむ。肅侯蘇秦を讓む。蘇秦趙を去る。從約悉く解く。蘇秦のち齊に於て殺さる。

蘇秦合従の策を六國に説くや、張儀秦に入る。連衡の策を以て惠文王に説く。衡は横なり。東西を横といふ。六國を連ねて東西秦と相和する。之を連衡といふ。張儀は魏の人。秦の客卿となり。次て相となる。屢魏を欺きて秦のためならず。周慎靚王三年(西紀三三)五國秦を伐ちて函谷關を攻む。秦逆撃之を破る。明年秦また大に韓趙を破る。諸侯振恐す。張儀秦のため、魏の哀王に説くに、従の成る可からざるを以てす。魏乃ち従約に背き、秦と成く。秦また巴蜀を取り、國益富強なり。

衡に背く。儀出て、魏の相となり、尋て死す。

春秋の時南北の争多し、楚毎に之か動機たり、戰國に至りて東西の争多し、秦毎に之か動機たり。合従は秦を防かんか爲めなり。連衡は秦に合せんか爲めなり。この後諸侯或は合従し、或は連衡す。蘇張遊説を以て身を富貴に致してより、縦横の術を以て、諸侯の間に遊説するもの頗る多し。公孫衍、蘇代、蘇厲、周最、樓緩の徒最も著はる。

是より諸侯の攻伐日に滋甚たし。赧王元年、齊宣王燕の治まらざるに乘して之を伐ち、遂にその國を取る。燕人齊に畔き、昭王を立つ。昭王民を撫じ、賢を禮す。魏人樂毅を用ひて國政を委す。宣王の子湣王強を貢み、楚を敗り、三晋を摧き、宋を滅す。諸侯みな之を害とす。周赧王三十一年(西紀三三)燕昭王樂毅を上將軍となし、秦楚三晋と齊を伐ち、之を濟西に敗り、燕の師長驅して臨淄に入る。湣王莒に奔る。樂毅齊民を撫じ、その堵に安せしむ。齊の七十餘城みな下る。獨り莒と即墨とのみ下らず。赧王三十六年、昭王卒し、子惠王立つ。樂毅と快からず。齊將田單反間を

北狄

韓趙魏楚
亡ふ

海内
一

甚た以三晋の地益削る。政の六年楚趙魏韓衛魯徒以秦を伐り、秦の師關外出づ。五國賤走、秦王昭勸め、陰謀士を派びて諸侯は遺女、重利を啗はる。その君臣を離し、然るのち猛將を以てその後に隨はむ。政の十七年秦韓を滅び、王安を虜にす。十八年秦將王翦趙を伐り、李牧善く禦す。秦人之を趙に間主遂に殺す。明年趙を滅びて幽繆王を虜にす。二十二年幽の子王賁魏を滅び、王假を殺す。二十三年王翦楚を破り、次年楚王負刼を虜にす。楚は魏王を虜にす。至安凡三晋五世五百年終り。三十六年幽の王賁韓を伐り、臨淄に大敗、王建を下す。是に於て諸侯皆亡ひ、獨り衛のみ二世皇帝元年に至りて亡ぶ。周成王より、茲に至るは五百年餘年海内一統に歸す。史記の漢書は、上古の漢族自ら稱して夏といひ、華といひ、或はまた華夏といひ、而して西の處をとりてを中國と稱し、また中華と稱す。唐虞の世所謂中國は河北少許の地に出で、爾して他はみな夷狄と稱し、蠻夷戎狄と稱す。

苗族

通古斯族

る諸族の占むるところなり。古傳によれば東に夷あり、南に蠻あり、西に戎あり、北に狄ありといふ。歴史上漢族の先づ接觸せしは苗族なり。苗は河江の間に蟠據し、漢種に先ちて支那諸種族中最も勢力を有せしものゝ如し。舜禹曾て之を南に驅逐し、九州を拓きしと雖も、實に勢力の及ひし範圍は、黄河沿岸三百里に滿たす。而して西北戎狄また往々にして中國を犯す。周西北に興り、遠祖古公亶父獯鬻に苦み、文王の時北に獯鬻の患あり、西に昆夷の難あり、獯鬻獯鬻を、北狄の一種なり。武王中國に君臨し、河漢の濱大に諸侯を封建し、道を夷蠻に通じ、肅慎また貢す。肅慎は今の滿州の先にして通古斯族に屬す。當時漢族勢力やゝ振ひしと雖も、西戎は西より北狄は北より冀雍兩州に雜り、南は蠻夷、江淮に據り、動もすれば兵戈を執て中華を亂す。已に成王の時、徐夷、淮夷の亂あり。宣王の時、及ひては獯鬻北より犯し、徐淮の夷南に起る。尹吉甫の力によりて漸く之を攘ふを得たり。その後幽王は犬戎に攻殺せられ、平王の時

周室の東遷は、實に戎を避けんか爲めなり。是に於て維戎、畿甸の間に居る。

春秋の初め、戎頗る強し、齊桓公管仲の力によりて漸く之を攘ひ、中國僅にその蹂躪を免るるを得たり。當時冀州に山戎、赤狄、衆狄あり。雍州に白狄、大荔、義渠の戎あり。豫州に伊洛の戎あり。後また伊洛の濱に姜戎、陰戎、陸渾の戎あり。一時跳梁を極めしか、諸侯の力漸く増すに従ひて之か斥攘に勉め、冀州は晋の地、豫州は晋に近し。故に襄公より數世白狄を敗り、赤狄諸國を滅し、山戎諸部を和し、陸渾の戎を滅す。雍州は秦の地、戰國の初め厲公大荔を伐ちてその王城を取り、義渠を伐ちてその王を虜にす。韓魏また伊洛陰戎を滅す。

蓋し春秋戰國のときは、各國富強に競ひ、拓地に争ひ、専ら國力の充實を勉めしかは、固より戎狄の侵犯を默過すへきにあらず。且つ當時邊陲に國するもの、北には趙燕あり、南には吳楚あり、西には秦あり、おののおの其域内の廓清に勉めしのみならず、また地を略して狄土を奪へ

り。南西東の蠻夷はその性御し易し、楚先つ起り、群蠻みな服す。吳踵て起り、淮濱の諸夷ことごとく屬す。西周の盛時に、一時強國たりし徐夷のことも、また吳の滅すところとなる。是に在りて蠻夷の地漸く化に嚮ふ。

北方に於ては趙襄子に承きて武靈王あり、狄の地を略す。その後趙李牧を將とし、代及雁門に居り、匈奴を防かしむ。匈奴は狄の一種、殷周の獯鬻、玁狁と同類にして、今の都爾格族の先なり。牧大に匈奴に勝ち、東胡を破り、林胡を降す。燕また其將秦開をして東胡を却けしむ。蓋し東胡は今の蒙古族の先なり。西方に於ては秦惠文王巴蜀を併せ、昭襄王義渠を滅し、三國各、長城を築きて戎狄を拒く。秦六國を併するに及び中國の地、東海に至り、西隴山に抵り、北、桓山に及び、南、南嶺に達す。中外の別始めて明なり。唯南嶺の南、閩越散居し、巫黔の西南、土蠻居り、隴蜀の西、氏羌住す。閩越は苗と同族、即ち苗族にして、氏羌は月氏と同族、即

都爾格族
蒙古族

國伯特族

ち圖伯特族なり。俱に甚た大ならず。唯東胡匈奴月氏塞外に於て夷狄の強國たり。

第七章 制度、學術、文藝、風俗

(一) 制度

太古諸族各地に割據し、その族の長之を率ゆ。群后是なり。而してその中材智他に卓れしもの衆族を統ふ。此制度發達して族長は諸侯となり、族長を統ふるもの皇王となる。封建の基礎こゝに立つ。三代の初め中央集權の實舉かり、王者世襲の制定まるに及びて、封建の制度頗る完全の域に達せり。

堯舜の時、中央には司空、司徒、秩宗、士、共工、納言、后稷、虞、曲樂の九官あり。地方には四嶽十二牧あり。天子は五歲毎に巡狩し、諸侯は一歲毎に朝覲す。夏の世には三公、九卿、二十七大夫、八十一元士あり。殷の世には二相、六太、五官、六府、六工あり。周に至りて二代に鑑み、官制最も具はれり。天地春夏秋冬の六官を建て、天官は冢宰を長とし、他の五官を總理し、

封建

中央

地官は大司徒を長とし、教育の事を主とし、春官は大宰、伯を長とし、祭祀及諸種の禮式を主とし、夏官は大司馬を長とし、兵馬のことを主とし、秋官は大司寇を長とし、訴訟を司とし、冬官は大司空を長とし、農工土木のことを主とする。

地方

周また地方諸侯の制を定め、爵を列する五等、公、侯、伯、子、男。是なり。公侯の國は方百里、是を大國といひ、伯は方七十里、是を次國となし、子男は方五十里、是を小國となし、方五十里以下諸侯に附し、附庸といふ。是れ常例なり。また禹の制に沿ひて、九州五服の制を定む。王城を中心として、方千里之を甸服といふ。王畿の地、王官の采邑に充つ。實に國政の行はれしは此範圍を出てさりき。但し此等の制度は周初僅に行はれしのみ。また諸侯の中たゞ魯のみや、周制に従ふ。

田制税法は、夏の時田五十畝を一間とし、十間を一組とし、十人一組の田を受く、一人五十畝の收入十分一を税す、之を貢法といふ。殷井田の制を行ひ、一井六百三十畝とす。八家一井を耕し、周圍七十畝を一家の

田制税法

東洋史

兵制

三代禮制

私田とし、中央七十畝を公田とし、その收穫を税とす。之を助法といふ。周に至りて一井九百畝、八家一井を耕し、一家私田百歩を受け、公田百歩の收穫を税とす。之を徹法といふ。(百畝は一町七反三以上は田地の税にして所謂粟米の征なり。征は即ち税なり。その他力役の征、布縷の征、山澤漆林の征あり。後世戰國に至りて井田廢す。)兵制は夏殷考ふ可らず。周は五人を伍となし、五伍を兩となし、四兩を卒となし、五卒を旅となし、五旅を師となし、五師を軍となす。軍は即ち一萬二千五百人、王は六軍、諸侯大國は三軍、次國は二軍、小國は一軍なり。軍將は命卿、師の帥は中大夫、旅の帥は下大夫、卒長は上士、兩司馬は下士を用ふ。此制また周末に至りて壞敗す。三代禮制の精神は教を先さる。故に唐虞の際已に教育に力を用ひ、夏殷の際大學小學の設あり。周に至りて京師に大學あり、辟雍或は成均と稱し、地方に小學あり、庠序是なり。教に従はざるもの之を刑す。刑に墨、劓、剕、宮、大辟の五刑、たよひ流刑、鞭刑、扑刑、贖刑の類あり。征も亦刑

文字

學術

と同じ意に出つ。以て民を教法に納る。この精神は秦時一たひ破れしと雖も、毎に支那立法者の襲用する所なり。

(二) 學術文藝

支那の文字は、黃帝の時蒼頡詛誦の作るころなりと傳ふ。是より先き伏羲八卦を畫す、或はいふ、是れ文字の祖なりと、三代以上單に之を文といひ、また名といふ。後世之を字といふ。字は孳、増加の義に取る。古文形蝌蚪に似たり、故に之を蝌蚪文といふ。後其形漸次省略に従ひ、周宣王の時太史籀大篆を作る。また之を籀文といふ。秦時李斯等小篆を作る。當時獄吏程邈繼て隸書を作る。字畫頗る省く。當時未だ紙あらず。漆を以て木版竹簡に書し、韋を以て之を編む。

文字已に起り學校已に設けられ、二代をへて文運大に開け、周初既に詩書禮樂の書あり。春秋戰國の際政綱弛むと共に思想の繫縛解け、攻伐盛なると共に治國濟民の術を講ずるもの四方に起る。春秋の初め孔子魯に起り、儒家の祖となり、老子楚に起りて道家の祖となり、北方

東洋史 上世史 二十二

の學者多く孔子を祖述し、南方の學者多く老子を祖述す。降りて墨家、法家、兵家、農家、名家、縦横家、陰陽家紛々として起る。これを諸子九流といふ。

孔子名は丘字は仲尼、周靈王二十一年(一〇四一)魯に生る。堯舜禹湯文武周公の蹟に鑑み、仁を以て道の要とし、孝悌を以て仁の本とし、以て國を治め、天下を平にするに終る。子の學専ら實行を務め、高遠の談をなさず。時に周室日に微、孔子之を挽回して、周初の盛に復さんとす。諸侯容るゝものなり。是に於て弟子と易書詩禮樂を整へ、春秋を刪す。春秋は魯の史なり。孔子之を刪して微に褒貶を寓す。支那正史の始めなり。周の敬王四十一年(五二二)年七十三歳にして歿す。弟子三千、人身六藝(禮樂射御書數)に通するもの七十餘人。論語は孔子及子の弟子の言行を集録せるもの、子の學見るへし。其道永く支那政教の基礎となり。歴代帝王之を推尊せざるものなし。血胤今なほ存すといふ。その孫子思曾參に學ひ中庸說二篇を作る。今の中庸はその遺なり。後孟子あり。名は軻

郟の人、魏惠文、齊宣王と時を共にす。孔子の仁を述へて仁義を説き、性善の説を發し、また養氣の論をなす。齊楚の間に遊ひて道行はれず。其徒萬章の徒と道を講じ、孟子七篇を作る。孔子を祖述するもの之を儒家と稱す。戰國の末、孟子に後れて趙に荀子あり。名を況といふ。孔子の旨を推して禮樂を尙ひ、孟子の性善に對して性惡の説をなす。荀子三十三篇を作る。

孔子に少しく先ちて楚に老子出づ。姓は李、名は耳、或はいふ聃、周の守藏室の吏たり。その道無名を體とし、無爲を勸め、以て太古の朴に反らんとす。關尹のため老子二篇を著はす。世を逐れて終るところを知らず。のち列子、莊子あり。莊子特に著はる。莊子名は周、宋の人なり。殆ど孟子と時を同じくす。子の學老子に本つき、死生を一にし、是非を齊くし、無爲自然を旨とす。其文洗洋自恣、以て己に適す。老子の道を奉ずるものを道家といふ。儒家と共に先秦學術の偉觀なり。而して後世道教實に道家の流なり。

道家

儒家

其他の諸

その他注意すべきものは墨家、法家、楊家なり。墨子名は翟、宋の人、墨家の祖たり。兼愛節用の説を唱ふ。楊子名は朱、墨子に對して自愛の説を立つ。一時楊墨盛に行はれ、殆ど儒を壓す。法家は法術を行ひ、富強を致さんとす。法は吏の民を治むる所以、術は君の吏を理むる所以、名と形との參同を以て下を率ゆ、故にまた刑名といふ。子の學管仲を祖とし、申不害術を説き、商鞅法を説き、韓非合せて法術を説き、盛に秦に行はる。その他宋研、尹文、非戰の説を唱へ、公孫龍、惠施、堅白異同の辯を弄し、孫吳兵を談し、鄒衍等天を談し、各自家獨得の見地を立つ。皆書を著す。支那人智力の發達、此時より盛なるはなり。

文學

簡勁激厲は蓋し支那文學の特質なり。尙書は夏殷周史官の筆するところ、詩は民間の歌謠、在朝士大夫の作、また少からず。みな後世の宗とするところなり。春秋に至りて文學の士輩出し、散文には老子、孫子論語の簡奧なるあり。孟子の正、莊子の奇、韓子の峭、また後世多くうの匹を見す。左氏傳の浮華、戰國策の縱橫なる、蓋しまた有數の文なり。詩賦

には楚に屈原あり、懷王に事ふ。騷に遺ひ憂悶して離騷を作る。賦の始めなり。其弟子宋玉、唐勒、景差等みな賦を以て聞ゆ。漢に至りて盛に行はる。其他醫學、天文曆法、また早くより開けたり。支那古代樂を以て子弟に教ゆ、故に其起原頗る古く、發達また見るべきものあり。

(三) 風俗

天神地祇
人鬼

上世に在りては、天地日月山川林澤みな祭らる。祖先の崇拜また極めて盛なり。天に神といひ、地に祇といひ、人に鬼といふ。天神最も尊きもの、昊天上帝と曰ひ、或は單に天といふ。天子唯之を祭る。之を郊祀といふ。子の祖を以て之に配す。上帝に次くものを社稷となす。社は土神、后土之に配す。稷は穀神、后稷之に配す。社稷は諸侯また之を祭るを得。祖先を祭る所之を宗廟といふ。昭穆互に列し、互に除く。子の意、天地の神祇、瞑々の裡に人を賞罰するの力ありとし、祖先の靈、天に在り、子の孫を監視するものなりとなす。

長幼の
男女の
別序

支那人は祖先を重するのみならず、家族の間には在ては長幼の序、極め

教科書
東洋史
史

文
學
社

中世史

第二篇 上期上 秦漢

第一章 始皇の政策

三代の際諸侯割據し、夷狄蟠居し、王家はたゞその大綱を統ふるのみ。秦王政六國を并すに及びて内外の別始めて明に、九州全く王家の有となる。其二十六年は實に我紀元四百四十年なり。是に於て先づ尊號を議し、三皇五帝の名を采り、更め號して皇帝と曰ふ。命を制となし、令を詔となし、自ら稱して朕といふ。また諡法を除きて自ら始皇帝と稱し、二世三世より數へて萬世に至るの制を立つ。

始皇の政策は法術の説に依據し、毎に中央に權を集むるに勉む。當時丞相王綰等言す、燕齊楚地遠し、王を置かすんは以て之を鎮むることなけん。請ふ諸子を立てよと。廷尉李斯曰く、周の子弟同姓、後疏遠に屬して仇讎の如し。今海内一統して郡縣となる。諸子公臣、公の賦税を以

郡縣の制

中世史 二十六 文 學 社

て之を賞賜せば甚た足りて制し易からん。天下異意なきは安寧の術なり。諸侯を置くは不便なりと。始皇以爲らく國を立つるは兵を樹つるなりと。遂に域内を三十六郡とし、郡に守尉監の三職を置く。守は郡守なり、土を守り、民を治む。尉は丞尉、守を佐く。監は御史、郡を監す。是れ實に支那に於ける郡縣制度の嚆矢なり。是に於て民間の兵器を收めて之を咸陽に聚め、銷して鐘鐻金人となす。諸郡の豪富を咸陽に徙すこと十二萬戸。以て亂民の起るを防く。

始皇海内の人心を壓せんと欲し、二十八年東郡縣を行き、泰山を封じ、以て天を祭り、梁父を禪して山川を祭り、以て成功を告ぐ。遂に東して海上に遊ぶ。後また北巡南遊し、大に馳道を治め、東、燕、齊を窮め、南、吳、楚を極む。至るところ石を立て、秦徳を頌するの文を刻す。また頗る神仙不死の説を信じ、山東の方士多く至る。その三十二年、方士の言を信じ、蒙恬を遣はし、兵三十萬人を發して北匈奴を伐ち、長城を増築し、臨洮に起り、遼東に至る。延袤七百餘里、堡を設け、戍兵を置く。世之を萬

萬里の長城

里長城といふ遺跡今は存す。また南越を略取し、贛民五十萬人を徙して五嶺(南嶺)に戍す。威胡越に振ふ。また阿房宮を建て、之を咸陽宮に屬す。宮觀複道相連る。民みな苦む。

大坑

是よりさき戰國諸子争起し、諸侯厚く士を遇し、海内の思想一ならず。秦法術を以て政をなす。學者の法令を誹るもの頗る多し。儒最も新政に嫌からず。三十四年丞相李斯請ふ。史官秦記にあらざるもの皆これを燒き、博士の官職とする所にあらすして、詩書百家の語を藏むるものあらは、皆守尉に詣て雜へて之を焚き、詩書を偶語するものあらは、棄市し、古を以て今を非るものあらは、族し、若し法令を學はんとするあらは、吏を以て師となさんと。始皇之を可るす。次年諸生の始皇を誹謗するもの四百六十餘人を咸陽に坑にす。長子扶蘇之を諫む。始皇怒て蒙恬の軍を上郡に監せしむ。始皇性剛戾、自ら用ふ。その政略専ら版圖の統合、人心の歸一にあり。支那史中、權の中央に集ること當時の如く盛なるもの少なし。

第二章 秦末の叛亂—秦亡ふ

秦は商鞅法を布きて威を立て、歴世其政策を改めず。始皇之を以て海内を律じ、益刻なり。且つ頻年民土木徭役に困み、賦歛また愈重し。人漸く故主を懷ふ。三十七年(五二四)始皇出遊す。少子胡亥、丞相李斯、宦者趙高從ふ。途にして崩す。趙高李斯と謀り、詔を矯めて胡亥を立て、扶蘇蒙恬に死を賜ふ。胡亥立つ。是を二世皇帝となす。二世庸暗また始皇の剛膽に似す。事みな趙高に決す。務めて法を嚴にし、刑を刻にし、公子大臣多く戮せらる。

秋七月楚人陳勝字は涉といふ。吳廣と役徒を聚め始めて兵を斬り起し、詐りて公子扶蘇、楚の將項燕と稱し、大楚と號し、陳に據る。魏人張耳陳餘來り投す。勝自立して王となり、張楚と號す。郡縣秦の法に苦む者争て長吏を殺して勝に應ず。陳勝陳人武臣と善し、引きて將軍となし、耳、餘を校尉となし、趙の地を徇へしむ。また周布をして魏の地を徇へ、周文をして秦を伐たしむ。秦將章邯周文を逆撃して大に之を敗る。耳

趙王武臣

劉邦

項梁、項籍

齊王田儼

魏王咎

趙王歇

餘周文の敗をきし、武臣に説きて自立して趙王とならしむ。時に沛人劉邦豁達にして大度あり。家人の産業を事とせず。兵を沛に起す。父老争ひて令を殺し迎へ立てし沛公となす。沛邑の椽主吏蕭何曹參ために沛の子弟を收め三千人を得たり。沛公と前後して項梁また兵を擧ぐ。項梁は楚の將項燕の子なり。梁の兄の子を籍といふ。字は羽、慍悍にして膂力人に絶す。遂に吳中の兵を擧げて八千人を得、籍を裨將となす。當時故の齊の王族田儼從弟榮、横と兵を擧ぐ。儼自立して齊王と稱す。武臣の將韓廣、燕の地を徇へて燕王と稱し、元の魏の公子咎を迎へ立てし魏王となす。海内亂れて麻の如し。二世の二年秦將章邯連に陳勝の軍を敗る。周文再び敗れて自刎し、吳廣陳勝みな下の弑する所となる。趙王武臣また弑せられて、張耳陳餘故の趙の後、歇を求めて趙王となす。時に項梁西して進て下邳に至る。劉邦等多く之に會す。居巢の人范增年七十奇計を好む。往て項梁に説て楚の後を立てし民に従はしむ。是に於て項梁楚の懷王の孫心

懷王

約、魏王と
なる

章邯降る

を求め得て立てし楚の懷王となす。盱眙に都す。張良又梁に韓の公子成を立てし韓王とならしむ。章邯兵を進めて魏に勝ち、並せて齊楚の援軍を破り、魏王咎齊王儋周布等を殺し、逐うて田榮を圍む。項梁其圍を解き、再び秦軍を破り、驕色あり。宋義諫む、聽かず。章邯と戦て敗死す。懷王都を彭城に徙し、魏王咎の弟豹を立てし魏王となす。秦軍進て趙を攻む。楚懷王義を以て上將となし、項羽を次將となし、趙を救ふ。義驕る、羽之を斬てその兵を領す。大に秦兵を鉅鹿の下に破る。王離等を虜にす。章邯その軍を以て降る。羽是より諸侯の上將軍となる。實に二世の三年なり。(五紀四)

初め楚の懷王諸將と約す。先つ入て關中を定むるものは之に王たらしむ。當時秦の兵強し。諸將みな恐る。獨り項羽秦の項梁を殺すを怨む。奮て沛公と先つ關に入るを願ふ。懷王の諸老將みな項羽の慄悍を惡み、劉邦の寛大遣はすへきを言ふ。懷王乃ち劉邦を遣る。劉邦途高陽を過さる。高陽の儒生酈食其劉邦に見え、ために説て陳留を降す。張良韓

劉邦關に
入る

秦亡ふ

法三章を
約す

兵を帥ひ劉邦に従ひ西す。

秦室は二世位に即きしより、趙高李斯政を擅にし、益刻法を行ふ。また上下を壅塞して太平を装ふ。高斯を讓殺して益私威を張る。既にして秦兵數敗れ、劉邦武關を屠る。高誅を恐れ、其三年遂に二世を弑し、公子嬰を立てし秦王となす。嬰立ちて高を族滅す。劉邦秦軍を曉關に敗り、明年覇上に至る。秦王素車白馬にて出て降る。秦亡ふ。秦は始皇二十六年、海内を統一せしよりたし二世十五年のみ。子嬰王たること四十六日にして降る。(五紀四)

第三章 漢楚の攻争——楚亡ふ

劉邦既に秦を定め、還て覇上に軍す。悉く諸縣の父老豪傑を召し、諸侯との約に従ひ、關中に王たるへきを告げ、法三章を約す。人を殺さんものは死せん、人を傷け及盜せんものは罪に抵さん、餘は悉く秦の苛法を除き去る。秦の民大に喜ぶ。項羽諸侯の兵を率ひ河北の地を定め、西關に入らんとす。劉邦關門を守らしむ。羽至る。門閉ちたり。大に怒て之

を攻破し、進て鴻門(陝西省西華縣)に軍じ、旦日劉邦を撃たんと期す。范增も
 と劉邦の爲すあるを知る。羽に説き急に撃て失ふなからしむ。季父項
 伯素と張良とよじ、劉邦項伯をして羽に他意なきを告げしめ、旦日自
 ら羽に鴻門に見えて陳謝す。事漸く平くを得たり。之を鴻門の會とい
 ふ。居ること數日、羽兵を引きて西、咸陽を屠り、降王子嬰を殺し、秦の宮
 室を焼き、始皇の冢を掘き、寶貨婦女を收めて東す。陽に懷王を尊て義
 帝となし、江南に徙し、彬に都せしむ。羽自立して西楚霸王となり、梁楚
 の地に王たり。劉邦を立て、漢王となし、巴蜀漢中に王たらしめ、關中
 を三分して秦の降將三人を王とし、以て漢の路を距塞す。是を三秦壘
 塞(翟)といふ。また諸將を趙魏燕齊に分封し、その故主を他に徙す。
 漢王羽の約に背きたるを怒る。蕭何の諫を聽きて國に就き、何を以て
 丞相となす。何經世の才あり、理財に長す。淮陰の人韓信將才あり。初め
 羽を干す。用ひられず。亡けて漢に歸す。何之を奇とし、漢王にすゝめて
 大將となす。王信か計を用ひ、諸將を部署し、蕭何を留めて巴蜀の租を

收め、軍の糧食を給し、信をして兵を引て故道より出て襲て三秦を下
 さしむ。初め項王、韓王成の功なきを以て廢して之を殺す。その臣張良
 間行漢に歸す。良韜略に長す。漢王帷幄の臣となす。
 項羽の諸將を封じて王とするや、田榮陳餘與らす。田榮兵を發して三
 齊(齊北)を并せ自立して齊王となる。時に彭越梁にあり。之に應じて
 楚軍を破る。陳餘また齊の兵と襲うて常山王張耳を破る。趙王歇陳餘
 を立て、代王となす。張耳漢に奔る。項王兵を引きて北、齊を撃ち、大に
 之を破る。過くるところ殘殺多し。齊王榮死す。榮の弟橫榮の子廣を立
 て、齊王となし、以て楚を拒く。項王留り戰ふ。
 漢王楚を伐たんと欲し、河を渡る。魏王豹これに降る。初め項王人を以
 て義帝を弑せしむ。漢王洛陽に至りて義帝のため、喪を發し、諸侯に
 告ぐるに與に項王を撃たんことを以てす。漢兵の名始めて正し。諸侯
 の兵五十六萬と楚を伐ち、彭城に入り、子の寶貨美人を收めて置。酒高
 會す。彭城は楚の都なり。項王之をき、自、精兵三十萬を以て、齊より還

漢、魏を平
け趙を取

り漢を撃つ。大に漢軍を淮水の上に破る。漢王漸く數十騎と遁る。父太公未人呂氏楚軍に獲られ、常に軍中に置いて質となる。漢王滎陽に至る、諸敗軍みな會す。蕭何もまた關中の老弱を發して、悉く滎陽に詣らむ。漢軍復た大に振ふ。何關中を守り、宗廟社稷縣邑を立て、事便宜に施行す。關中の戸口を計て轉漕して兵を調し、未だ嘗て乏絶せず。魏王豹叛す。漢王韓信をして之を撃たしむ。襲うて豹を虜にす。信既に魏を定め、兵三萬人を請ひ、北、燕、趙を擧げ、東、齊を撃ち、南、楚の糧道を絶ち、西、漢王と滎陽に會せんと願ふ。王張耳を遣り、與に俱にせしむ。三年、信耳趙を撃ち、陳餘を斬り、趙王歇を禽にす。趙風靡す。辯士隨何また九江王黥布を説き、楚に畔きて漢に歸せしむ。後立て、淮南王となす。時に楚、漢王を滎陽に圍む。是より先き陽武の人陳平魏王咎に事へ用ひられず。項羽に事へて罪を得、亡けて漢に歸し、護軍中尉に拜し、盡く諸將を護す。漢王と共に軍にあり。王に請ふて多く反間を放ち、范増を羽に疑はしむ。范増去て憤死す。楚、漢王を圍む益急なり。紀信漢王と稱して

楚漢王を
圍む

陳平

漢、齊を定
む

出て降る。王間を得て走て成臯に軍す。羽之を圍む。王逃れて北河を渡りて趙壁に入り、韓信の軍を奪ひ、信をして趙の兵を收め、齊を撃たしむ。酈食其漢王のために齊王に説て之を下す。信その功を忌み、四年襲て齊を破る。齊王食其を烹て走る。楚の將齊を救ふ、信また之を撃破す。漢王信を封じて齊王となす。時に漢王復た成臯を取り、敖倉の食に就き、楚と廣武に軍す。項王助少なく食盡く。韓信また兵を進めて之を撃つ。項王乃ち漢と約し、天下を中分して鴻溝以西を漢となし、以東を楚となし、太公呂后を歸して東に歸る。漢王また西に歸らんと欲す。張良陳平楚兵の餓疲に乗すへきを説く。王之に従ふ。五年(五九四)王、項王を追ふて固陵に至る。韓信彭越黥布來り會す。項王垓下に至る。兵少なく食盡く。信等之に乗す。項王敗れて壁に入る。漢兵之を圍むこと數重。項王夜八百餘騎を從へ、圍を潰して南に出つ。漢兵之に追ひ及ぶ。東城に至る。僅に二十八騎を餘す。東烏江に至り自刎して死す。楚の地悉く平く。乃ち項氏の地を分て梁楚二國となし、信を立て、楚王となし、彭越

垓下の圍

項王亡ぶ

漢書 高祖本紀 漢高祖の創始 諸呂の亂

を梁王となす。漢王皇帝の位に即く。是を漢の高祖となす。洛陽に都す。項王兵を起してより八年、漢と争ひしより五年にして亡ふ。

第四章 漢高祖の創始 諸呂の亂

初め高祖洛陽に都す。洛陽は四面敵を受くるの地、守るに便ならず。關中は山を被り、河を帶ひ、四塞以て固となす。高祖齊人婁敬の説をきき、即日西關中に徙り、都を長安に定む。敬後又帝に説き、齊楚の大族豪傑十餘萬口を移して關中を實す。

高祖既に楚を滅じ、皇帝の位に即きしと雖も、殘類往々兵を擁するものあり。高祖の洛陽にあるや、田横等の徒五百餘人と海島に入る。帝之を招來す。皆自到して死す。既に長安に徙りて臨江王降らす。撃て之を虜にす。燕王叛す。また撃て之を虜にす。盧縮功あり以て燕王となす。當時戰亂の餘、民困弊を極む。朝廷令を下して流民を招致し、その故爵田宅を復し、殊死以下の罪を赦す。その政制多く秦の故に襲る。尋て六年高祖大に諸功臣を封す。蕭何鄼侯たり。食邑尤も多し。張良留侯たり。良

長安に都す

餘類平く

論功

罰禮

功臣の誅

宗室を封す

もと盛滿の禍を知る。故に齊三萬戸をすて、留を擇ふ。病を謝し、殺を辟け、人間の事を棄つ。その他功を定め、封を行ふ。各差あり。

高祖、秦の苛政に懲りて簡易を主とす。群臣酒を飲み、功を争ひ、酔て或は妄呼し、劔を拔て柱を撃つ。博士叔孫通高祖に説き、魯の諸生を徵じ、共に朝儀を起す。七年長樂宮成る。諸侯群臣みな朝賀す。敢て喧嘩して禮を失ふものなし。

諸將既に封を受け、君臣の分また定まりしと雖も、漢功臣に薄く、功臣亦安せず。是よりさき六年人あり、楚王韓信反すと告ぐ。高祖陳平の計を以て韓信を捕ふ。赦して淮陰侯となす。十年、代の相國陳豨反す。帝自ら將として之を撃つ。人また淮陰侯韓信陰かに豨に通謀するを告ぐ。呂后蕭何と信を給きて之を捕へ、遂に之を斬る。次年高祖また豨を破て歸る。梁王彭越、淮南王黥布相尋て反し、皆誅せらる。その後趙王張敖(張耳の子)燕王盧縮等また前後廢滅に歸す。

戰國諸侯の後、秦末に起りしもの、先きにみな敗亡し、漢室の功臣封を

中華東洋史 中世史 三十一 文 學 社

受くるもの今や相尋きて絶滅す。高祖秦の藩屏なく、孤立して亡に至りしに懲り、周制に倣ひて子弟同姓を要塞の地に封す。約して曰く、劉氏にあらざれば王たるを得ずと。みな百官宮觀を置き、制を京師に同くす。その最も大なるものを齊代、吳、楚となす。漢室有つところ唯十五郡のみ、中央の權始めて輕し。

高祖の賂布を撃つや、流矢に中る。其十二年(五十四)遂に崩す。孝惠帝位に即く。初め戚姫高祖に寵あり。子あり如意と云ふ。孝惠仁弱なり。高祖如意の己に類するを以て、之を立てんと欲す。果さず。孝惠乃ち立つことを得たり。政みな呂后に出つ。即位の元年、呂后趙王如意を毒殺し、戚夫人の手足を斷ち、眼を去り、耳を灼き、瘡藥を飲ましめ、廁中に居らしめ、帝を召して之を觀めず。帝驚て大に哭し、因て病む。歲餘起つ能はず。帝在位七年にして崩す。子なし。呂后他人の子を立て、皇帝となし。親ら朝に臨て制を稱す。

高祖

呂后體を稱す

たり。蓋し高祖の遺言に本つくなり。呂后の元年、呂后諸呂を立て、王となさんと議す。王陵高祖の約を執て聽かず。陳平周勃之を可とす。遂に呂氏を王とす。四年太后少帝を廢して之を幽殺し。また他人の子を立てて帝となす。諸呂事を用ふ。

諸呂の亂

八年呂后崩す。諸呂亂をなさんとす。齊王兵を發して諸呂を討つ。時に呂祿北軍に將たり。呂産南軍に將たり。大尉勃兵を主とること能はず。平勃名を齊王を拒くに托して産祿を給き印を解き、兵を以て勃に授けしむ。勃齊王の弟に卒千餘人を與へ、呂産を撃て之を殺し、部を分ちて悉く諸呂を捕へ、少長となくみな之を斬る。諸大臣議して孝文帝を代より迎立す。(五十四)

文帝立つ

第五章 文景の治績——七國の叛亂

文帝即位の元年、平勃を左右丞相となし、益國家の事を明習す。帝性仁儉にして寛厚法を用ひ、田租を免し、收摯相坐の律令を除き、また肉刑を廢し、唯宮刑舊に沿ふ。廷尉には張釋之あり、法を執る公平にして阿

らず。守には吳公あり。河南治平當時第一と稱す。將軍には周亞父あり。軍規天子と雖も曲けず。また賈誼鼂錯の辨智なるあり。在位二十三年、宮苑車服増益せしところなし。その幸せる愼夫人衣地を曳かず。帷帳に文繡なし。露臺を建つるに直金百斤を要するとき、是れ中人十家の産なりとて作らず。朴を示して民の先となる。また専ら徳を以て下を化す。當時の公卿大夫、風流篤厚にして人の過を言ふを耻つ。是を以て海内安寧、國富み家給す。その政みな黃老道德の意に本つく。

諸侯の跋扈

當時泰平の裡禍機自ら伏す。諸侯の倨傲是なり。漢は高祖の時より諸侯頗る大なり。文帝諸侯より入て帝位に登る。權自ら軽く、諸侯驕ること甚たし。濟北王反して敗死し、帝の弟淮南厲王反を謀り、廢徙せられ、て死す。吳王濞郡國の亡命者を招致し、頗る漢法に循はず。齊楚二國も亦みな強僭す。賈誼上書して大國諸侯の地を割き、その力を分つべきを言ふ。帝その議を容れ、齊王の嗣絶ゆるに及び、齊を分ちて六國となす。齊始めて弱し、帝崩し、孝景帝立つ。權益輕し。吳王濞またもとより帝

賈誼

景帝立つ

鼂錯

吳楚七國反す

を怨む。帝の太子たりし時鼂錯家令となり、頗る幸を得たり。帝已に即位し、言みな聽かる。文帝の時錯屢、吳の削るべきを言ふ。文帝忍ひず。是に至りて帝に説て吳の二郡を削らしむ。時に楚趙罪あり。みな一郡を削る。膠西姦あり。六縣を削る。吳王濞に反す。楚王、趙王、齊の膠西、膠東、菑川、濟南の王みな先つ吳の約あり。是に至て同じく反し、錯を誅するを以て名となす。是を吳楚七國の亂といふ。景帝文帝の遺戒により周亞父を大尉に拜し、三十六將軍に將として往て吳楚を撃つ。鼂錯素と袁盎と善からず。盎言ふ、たゞ錯を斬り諸侯の故地を復せは兵罷むべしと。錯是に於て斬らる。周亞父大に吳楚を破り、諸反みな平く。是より帝諸侯王を摧抑して、その百官を減黜し、京師に留めて國に就かしめず。別に内史をしてその國を治めしむ。帝在位十六年にして崩し、太子徹立つ。是を孝武帝となす。武帝推恩の令を下し、諸王をして地を割き、子弟を封して列侯となすを得しむ。諸侯自ら弱く、遂に王侯の實なきに至る。後内史を省き相をして國を治めしむ。國相は郡守の如し。是に於

周亞父

武帝

て漢封建と稱すと雖も郡縣の政全國に行はる。中央の權始めて重し。漢興てより繁苛を掃除し、民と休息す。孝文加ふるに仁儉を以てす。孝景能く其業に遵ひ、心を刑獄に用ひ、節儉下を愛す。人給し、家足り、府庫貨財を餘す。武帝に至りて、内文を飾り外武を揚げ奢侈度をなきに至る。

第六章 武帝の内政——文學大に興る

高祖武を以て天下を取り、往々文士を輕んず。叔孫通禮を制し、陸賈新語を奏せしと雖も、文運未だ開けず。尋て惠帝挾書の律を除き、文帝遊學の道を廣め、且つ文景の際黃老を尙ひ、政治簡淨を務め、専ら樸素を以て民を率ひしかば、國家殷富、人心漸く文學に傾く。然れども文士未だその力を延はすの餘地なかりき。當時賈誼、鼂錯ありしも、苟の用ひられしは文學を以てにあらす。武帝位に即き、儒を好み、文を愛し、漢一代文學の隆運當時を以て最となす。

武帝即位の元年、始めて元を建て、建元と曰ふ。年に號ある此に始まる。建元元年（五紀五）詔して賢良方正直言極諫の士を擧げ、帝親ら治道

漢初の文

始めて元を建てつ

董仲舒

六經を説く

河間獻王

を策問す。廣川の董仲舒對策して、人君心を正して百官萬民を正すへきを説き、大學を興し、以て士を養ひ、また郡司縣令に賢者を貢せしむへきを論じ、六藝の科、孔子の術に在らざるものは、みなその道を絶たんと請ふ。上りの對を善とし、以て江都の相とす。丞相衛綰奏す、擧ぐる所の賢良或は申韓蘇張の言を治め、國政を亂るものは請ふみな罷めんと。帝之を可るす。是に於て學者盡く範を孔子に取り、儒道専ら行はる。六經を表章する實にこゝに始まる。帝始めて五經博士を置き、郡國をして孝廉を擧げ、又吏民儒術に習ふものを徵し、博士の弟子五十人を置き、以て官に任じ、吏一藝以上に通するものを選び、以て右職に補す。帝の兄河間獻王また學を好み、金帛を以て四方の善書を求め、多く古文經籍を得たり。されは當時の朝臣儒雅には、董仲舒、公孫弘、孔安國、倪寬の徒あり、弘は布衣より出て、丞相となり、董仲舒と共に春秋を以て進む、倪寬また經術を以て吏事を飾る。安國は孔子の裔、侍中となり、尙書傳を作る。文章には司馬遷、司馬相如の徒あり。遷太史たり、史記

を作る。相如特に辭賦を以て幸を得たり。滑稽には東方朔枚乘の徒あり。辭賦を善くし、談諧を好む。帝俳倡を以て之を養ふ。漢經術文章の盛、前後比なし。

方士

帝又神仙の説を好む。元光二年方士李少君帝に見ゆ。善く巧發奇中をなす。言く竈を祠らは物を致さん。丹砂化して黄金となすへし。蓬萊仙者見るへし。之を見て封禪せは死せずと。上之を信す。始めて自ら竈を祠り、方士を遣り、海に入り、蓬萊の安期生の屬を求む。海上燕齊迂怪の士、争ひ來て神事を言ふ。

帝屢方士に欺かれ、方士またみな詐を以て誅せらる。たゞ公孫卿寵信尤も久し。卿云ふ、神仙樓居を好むと。是に於て帝大に土木を起し、以て神仙の居を作る。千門萬戸具さに侈靡を極む。また數巡幸して祠祀を崇ふ。封禪を修す。末年に至りて漸く其妄を悟る。

漢國を建つ諸侯大に過く、文景之を抑へ、漸くその權を奪ふ。漢また歴世民と休息し、夷狄を遇する寛に過く。夷狄漸く大なり。武帝舉國の大

權を擁し、雄資を以て殷富の後を承く。漢威始めて塞外に振ふ。

第七章 匈奴 漢武の經略(一)

秦の北略するや、東胡疆くして月氏盛なり。匈奴の單于を頭曼といふ。單于は胡言猶天子といはんかことし。頭曼、秦に勝たず、北に徙る。十餘年にして蒙恬死す。諸侯秦に畔き、中國擾亂す。秦の徙して邊に謫戍するものみな復た去る。匈奴寬を得て復た稍南河を渡る。單于太子あり、冒頓と名く、勇武權略あり。頭曼を殺して自立して單于となる。東、東胡を襲ひて之を滅し、西、月氏を撃て之を走せ、悉く秦の蒙恬をして奪はしめたる匈奴の故地を收め、進て燕代を侵す。是時漢の兵項羽と相拒き、中國兵革に罷かる。故に冒頓自ら疆くするを得たり。匈奴是時を以て最も疆大となす。その官號左右賢王、左右谷蠡王、左右大將、左右大都尉、左右大當戶、左右骨都侯あり。匈奴賢を屠者と謂ふ。故に常に太子を以て左屠者王となす。左右賢より以下當戶に至るまで、大なるものは萬騎小なるものは數千、大凡二十四長あり。諸大臣みな官を世々にす。

匈奴の官

冒頓

高祖匈奴を征す

呼衍氏、蘭氏のち須卜氏の三姓はその貴種なり。諸の左方の王將東方に居り、上谷以往に在るもの東、穢貉朝鮮に接し、右方の王將西方に居り、上郡以西に在るもの月氏、羌に接す。而して單于の庭は代雲中に在り、各分地あり、水草を逐ふて移徙す。而して左右賢王、左右谷蠡王最も大國たり。左右骨都侯、政を輔く。歳の正月諸長小會し、五月大會して祭祀す。漢初めて域内を定め、韓王信を代に徙し、馬邑に都す。匈奴之を圍む。信匈奴に降る。九年(六三)高帝自ら將として往て之を撃つ。冒頓伴り敗れ、漢兵を誘ふ。漢兵北之を逐ふ。高帝先つ平城に至る。歩兵未だ盡く到らず。冒頓精兵を縱て高帝を白登に圍む。帝陳平の計を用ひて、厚く閼氏に遣らしむ。閼氏は猶后妃といはんか如し。冒頓圍を解く。高祖出て大軍と合す。交兵を引きて去り、劉敬をして和親の約を結はしむ。是後漢將衆く往て降るを以て、冒頓常に往來して代の地を侵盜す。漢之を患ふ。高帝乃ち劉敬をして宗室の女公主を奉して、單于の閼氏となさしむ。歳に財物を奉する各數あり。冒頓乃ち少く止む。後燕王

老上單于

盧縮反し、匈奴に降る。往來して上谷以東を苦む。高祖崩し、孝景呂太后の時、漢初めて定まる。冒頓驕る。書を呂后に遣て妄言す。呂后之を撃たんとす。諸將諫めて止む。

孝文の三年(福四)匈奴の右賢王入て河南の地に居り、上郡堡塞の蠻夷を侵盜し、人民を殺略す。丞相灌嬰之を撃つ。右賢王走て塞を出つ。文帝大原に幸す。後匈奴益強く、月氏を夷滅し、樓蘭烏孫呼揭およひ其傍二十餘國を定む。文帝和して財物を贈る。暫くして冒頓死す。子稽粥立つ。號して老上單于と曰ふ。文帝復た宗室の女公主を遣して閼氏となし、宦者中行説をして公主に傳たらしむ。説行くを欲せず。漢を怨む。單于に教へて漢を苦む。文帝十四年單于十餘萬騎を率ひて北地に寇す。進て彭陽に至る。漢之を防く。月餘にして乃ち去る。匈奴日に已に驕り、歳に邊に寇し、人民畜産を殺略する甚た多し。雲中遼東最も甚たし。後二年復た和親す。老上單于死し、子軍臣立て、單于となる。中行説復た之に事ふ。單于立て四歳、復た大に上郡雲中に入り、殺略するところ甚た

軍臣單于

漢匈奴和親破る

多くして去る。文帝の匈奴を遇する防備するのみ。兵を發して深く入らず。文帝崩じ、景帝立つ。大寇なし。高帝以來漢毎に匈奴に苦み、女公主財物を貢してその歡心を結ふ。而して匈奴和親を破る前後七回。武帝に至りて始めて斥攘に勉め、國威大に外に揚る。武帝位に即き、和親の約束を明にし、厚く之を遇す。單于以下みを漢に親み、長城の下に往來す。元光二年(五八五)帝聶翁壹をして、私に塞を出て、匈奴と交市せしむ。伴て馬邑城を賣るとなし。單于を誘ふ。單于之を信じ、乃ち十萬騎を以て武州の塞に入る。漢兵三十餘萬を馬邑の傍に伏す。單于漢兵の謀を知り、兵を引きて還る。此役や、王恢兵謀を造て進まず、斬らる。是より後、匈奴和親を絶て、當路の塞を攻め、往々入て漢邊に盜む。たゞ關市絶えず。後五年漢匈奴と相攻む。匈奴數々入て邊に盜む。漁陽尤も甚たし。將軍韓安國をして漁陽に屯し、之に備へしむ。明年匈奴漢に入り、安國を圍む。會、燕の救至る。匈奴乃ち去る。また雁門に入る。將軍衛青等雁門代郡に出て、之を擊破す。その明年衛青復た雲中

衛青

以西に出て、隴西に至り、遂に河南の地を取り、朔方郡を置く。復た秦時の故塞を繕して、河に因て固となす。漢また上谷の一部を割て胡に與ふ。是歲漢の元朔二年(四三三)なり。青人奴より起り、將才あり、善く士卒を遇し、屢、匈奴を破る。後匈奴の軍臣單于死じ、その弟伊稚斜立て、單于となる。代郡雁門上郡等の地數、その略殺を蒙る。右賢王の河南の地を奪はれたるを怨み、邊に寇じ、朔方を侵す。元朔五年青功を以て大將軍となり、六將軍に將として、右賢王を伐て、之を走らし、明年復た匈奴を擊て深く入り、首級を得る。前後凡九千級。漢の失ふところまた少からず。

此役や前將軍趙信の兵利あらず。匈奴に降る。趙信は故と胡の小王、漢に降りしもの。單于以て自次王となし、與に漢を謀る。信單于に教へ、益北幕を絶ち、以て漢兵を誘ひ、其疲極を以て之を取り、塞に近くなからしむ。衛青の甥霍去病また善く兵を用ふ。元狩二年(四〇五)漢、去病をして萬騎に將とし、隴西の北地を出て、匈奴を擊ち、居延を過き、祁連を攻

霍去病

渾邪王降

め、殺虜頗る多し。たゞ代郡雁門に於て李廣等大敗す。單于、渾邪王、休屠王の西方に居りて、漢兵に殺虜を恣にせしめしを怒り、之を誅せんとす。二王恐れ謀て漢に降る。渾邪王、休屠王を殺し、その衆を將ひて漢に降る。是に於て隴西北地河西益胡の寇少なり。關東の貧民を徙し、北地以西戍卒の半を減す。

元狩四年大將軍青驃騎將軍去病軍を中分し、道を分ち幕を絶り、匈奴を撃たんと約す。單于之を聞き、精兵を以て幕北に待つ、青大之を敗る。去病左賢王を破り、大漠を絶り、狼居胥山（外蒙古、喀喇崑崙山）姑衍に禪し、輪海（北海の名）に臨て還る。是後匈奴遠く遁れ、幕南王庭なり。漢河を渡り稍蠶食し、匈奴の舊地以北に及ふ。然れども此役漢の士馬死するもの多く、尋て去病の死に會ふ。是に於て漢久しく北撃せず。伊稚斜單于立て、十三年死す。子烏菴立ちて單于となる。時に元鼎三年（西紀五）なり。その後漢方に兩越を誅し、匈奴を撃たす。匈奴もまた邊を侵さず。

第八 兩越——東南及西南夷——漢武の經略（三）

南越王趙佗

さきに秦、楊州の南越を平け、南海桂林象郡を置く。秦の亂るゝや、南海の尉趙佗撃て桂林象郡を并せ自立して南越王と稱す。高祖の十一年（西紀六）漢使を遣り、册立して南越王となす。佗臣と稱して漢の約を奉す。呂后の時に至り、佗遂に僭して武帝と稱し、閩越（福建）西甌（安南に居る）を役屬せしめ、地東西數百里に亘る。略は越なり、閩越と共に南蠻の一種なり。文帝買誼を遣り、佗に書を賜ふ。佗帝制を去り、復た臣と稱す。建元四年佗卒し、子の孫胡南越王となる。

閩越王無諸、東海王搖

南越の東方今の福建の地に閩越あり。その王無諸たよひ越の東海王搖は皆越王勾踐の後なりといふ。秦天下を并せて廢して君長となし、その地を閩中郡となす。秦亡ひ無諸、搖共に越人を率ゐて漢に功あり。漢の五年復た無諸を立て、閩越王となす。閩中の故地に王たり。東冶に都す。孝惠三年搖の功を擧げて東海王となし、東甌に都す。世俗號して東甌王となす。景帝の時吳王濞反す。東甌吳に従ふ。吳破る。漢の購を受けて吳王を殺す。吳王の子閩越に走り、勸めて東甌を撃たしむ。建元

東甌王

東甌中國
に遷る

三年、閩越東甌を圍む。東甌急を天子に告ぐ。乃ち莊助を遣り、東甌を救ふ。閩越去る。東甌國を舉げて中國に徙らんと請ひ、來て江淮の間に居る。

閩越と南

建元六年、閩越南越を伐つ。南越王胡、天子の約を守り、敢て擅に兵を發せず。以聞す。帝王恢、韓安國を遣る。閩越王郢之を拒く。郢の弟餘善郢を殺して漢に謝す。無諸の孫丑を立て、越の繇王となし、餘善を立て、東越王となし、並ひ處らしむ。南越王天子に見えて謝せんとす。うの大臣みな諫む。遂に病と稱す。後十餘歳にして薨じ、再傳して興に至る。元鼎四年、帝入朝を促す。興年少し、太后中國の人なり、淫行あり、國人服せず。王太后漢に内屬せんとす。うの相呂嘉衆心を得ること王に愈る。上書して王を止む。王漢使と嘉等を誅せんと謀る。成らず。漢兵越境に至る。呂嘉等遂に反し、王太后及漢使を殺し、漢兵を破る。明年漢楊僕等を遣り討て之を平く。遂に九郡となす。甌略また漢に屬す。尉佗初めて王たりしより七世九十三年にして南越亡ふ。

南越亡ふ

西南夷

漢の呂嘉を討するや、東越王餘善陰に兩端を持す。元鼎六年、餘善遂に反す。楊僕等を遣りて之を討たしむ。餘善殺され、東越降る。帝閩越の悍にして數反覆するを以て、うの民を江淮の間に徙す。東越の地遂に空し。是に於て東南海濱の地盡く平く。

滇

夜郎

巴蜀西南外の蠻夷みな氏類なり。君長の數百を以て數ふ。うの大なるもの牂牁江に臨みて夜郎あり。うの西、滇(滇)最も大なり。滇より以北、邛都最も大なり。みな邑聚あり。田を耕す。うの他、冉、笮、騫、白馬等またうの大なるものなり。うの俗或は土着し、或は移徙す。楚の威王の時、將軍莊驩、巴蜀黔中以西を略して滇に王たり。秦時此等の地を略して頗る吏を置く。漢初巴蜀の民竊に出て、商賈するのみ。武帝の元光二年、唐蒙上書して南夷に通せんと請ふ。千人を將ひ夜郎に入る。夜郎約を聽く。以て犍爲郡となす。また蜀人司馬相如をして西夷に通せしむ。邛、笮、冉、騫に郡縣を置く。元狩元年、騫を遣はし、蜀の道に因て身毒國を求めしむ。通せず。滇國に至る。みな未だ全く服せざるなり。夜郎侯始め南越

匈奴敢て
出てす

に倚る。南越已に亡ひ、また且蘭を平けて牂牁郡となす。夜郎遂に入朝す。漢また邛君、笮侯を殺すに及びて冉駹みな振恐し、吏を置かんと請ふ。乃ち邛都を越嵩郡となし、笮都を沈犁郡とし、冉駹を汶山郡とし、廣漢の西白馬を武郡となす。元封二年滇を平け、益州郡を置く。是に於て西南夷盡く平き卒に七郡となる。

武帝已に南越を滅し、元封元年(五紀五)親ら大軍を帥るて邊を巡り、朔方に至り、使を遣はして烏維單于に會戰を促し、戰ふ能はされは漢に臣たれと告ぐ。單于怒て使を留む。然れども敢て出てす。好辭甘言、和親を請ふて已ます。是時漢東は穢貉、朝鮮を拔き以て郡となし、西は酒泉郡に至り、以て胡と羌と通するの路を隔つ。漢又西、西域に通す。

第九章 西域諸國——漢武の經略(三)

張騫
月氏

匈奴の西邊れよひ葱嶺以外の地、當時概稱して西域といふ。今の中央亞細亞の地なり。張騫往て使するに及び、其地に國するものや、考ふへし。初め敦煌、祁連山の間に月氏國あり。畜に隨て移徙し、匈奴と俗を

大夏
大月氏及
小月氏

大宛
康居

同くす。衆くして且つ疆きを恃み、匈奴を輕す。冒頓立つに及びて、月氏を破り、老上單于に至りて、月氏王を殺す。月氏乃ち遠く去り、西、大夏(バク)トリアを撃ちて之を臣とし、その北に居る。之を大月氏といふ。故土に留る少衆之を小月氏といふ。武帝に至り、漢方に胡を滅するを事とす。月氏の匈奴を怨むを聞き、使を通せんと欲し、元朔三年(五紀五)遂に張騫を遣る。騫隴西を出て、匈奴を襲ふ。匈奴之を留むる十餘歲、亡けて西に走り、遂に大宛に至る。大宛は大月氏の東、支那の西、今の浩罕塔地方なり。城郭屋室あり、兵また多し。騫を導き、康居に至る。康居は大宛の西北に當り、今の撒麻兒干(カキ)以北の地なり。康居轉じて大月氏に致す。大月氏既に大夏を臣とし、地肥饒にして寇少なし。志安樂、また胡に報するの心なし。騫竟に要領を得る能はず。留ること歲餘にして還る。南山(崑崙山)に並ひ、羌中より歸らんとす。復た匈奴の獲るところとなる。時に匈奴に内亂あり、騫乃ち逃れ歸る。前後十三歲、唯騫一奴と還るを得たり。身至るところ大宛、大月氏、大夏、康居、而して其の旁大國五六を傳聞し、

具に天子に奏し、且つ蜀より身毒に通ずべきを言ふ。天子既に大宛、大夏の屬みな大國奇物多く、兵弱くして漢の財物を貴ふをきき、またその北大月氏康居の屬兵彊く賂遺を以て朝すべきを知り、欣然として焉を遣る。西南夷に隔てられて通せず。始めて滇に通ず。是に於て漢また西南夷を伐つ。會渾邪王の民を率ゐて漢に降る。單于遠く北に通れ、河より以西南山に并ひ鹽澤(今の鹽池)に至るまで空しくして匈奴なし。後二年漢擊て單于を幕北に走らし、西域道開く。焉烏孫に賂ひ招きて以て東し、故の渾邪の地に居らしめ、匈奴の右臂を斷たんと請ふ。烏孫は大宛の東北、今の新疆の地に居り、匈奴に羈屬す。焉烏孫に至る。當時烏孫の王を昆莫といふ。その兒孫國を争ひ、國分れて三となる。昆莫故に敢て焉に約せず。焉副使を遣り、大宛康居、大月氏、安息、巴爾辛ア、身毒等に使はず。焉烏孫の使と歸る。焉遣るところの使皆其國人と俱に來る。西北の國始めて漢に通ず。時に元鼎二年(西紀五)なり。

焉西域の道を通じ、益使を發して西域に遣る。武帝宛の馬を好み、使者

安息
烏孫

漢兵四城
を困む

道に相望む。是時漢既に越を滅し、西南夷を平けて郡となす。地接し以て大夏に通せんとす。昆明に閉られて通せず。酒泉に道し大夏に至る。使者既に多くして外國益漢の弊を厭ふ。漢兵の遠く至る能はざるを度り、沿道その食物を禁じ、以て漢使を苦しむ。匈奴の奇兵また時々之を遮る。使者争ひ言ふ、西國兵弱く撃ち易しと。漢兵始めて烏孫大宛の屬を困む。西北外國の使更に來り更に去る。然れども宛以西皆自ら以て遠しとし、尙ほ驕恣晏然たり。未だ服使す可らず。烏孫より以西安息に至るまで匈奴に近し。匈奴月氏を困む。故に匈奴の使重せられ、漢の使輕せらる。宛漢の遠くして來る能はざるを恃み、その善馬を與へず。また漢の使を攻殺す。天子兵を發して李廣利を將とし、宛を伐つ。是れ太初元年(西紀五)なり。軍道にして敗れ、王都に達せず。更に大軍を發して西し、宛城に至る。その迎へ撃つものを敗り、外城を毀つ。宛の貴人その王を殺して漢に謝し、和を請ふ。漢康居の救を恐れ、遂に之を許し、その善馬を取て歸る。凡そ四歳にして罷むを得たり。漢使十餘輩を發し、宛西

漢宛を伐つ

諸外國に至て奇物を求めしむ。因て風覽するに宛を伐つ。威徳を以てす。

于匈奴兒取

初め漢の西域に通するや、匈奴西方の援國を失ひ、勢稍屈す。漢また使を遣り和を議す。成らず。互にうの使を抑留して相償ふ。烏維單于立ちて十歳にして死す。子立つ年少し、號して兒單于となす。是の歳元封六年なり。此よりのち單于地を西北に増し、左方の兵は雲中に直り、右方は酒泉燉煌郡に直る。兒單于年少く殺伐を好む。國人多く安せず。左大都尉單于を殺し、漢に降らんとす。漢故に受降城を築く。また破奴を將とし、兵を遣して之を迎ふ。左大都尉發せんとして事覺はる。單于之を誅す。また漢軍を圍む。破奴捕へられ、遂に匈奴に没す。進て受降城を攻む。下す能はずして去る。太初三年（五十九）單于死し、响犁湖單于立つ。また邊に寇して去る。一歳にして死す。子の弟且鞮侯單于立つ。時に漢既に宛を誅し、威外國に震ふ。武帝意に遂に胡を困めんとす。太初四年單于既に立て盡く。漢の使の降らざる者を歸し、和を請ふ。次年漢蘇武を

受降城

漢武の功

遣り、幣を厚くし、單于に賂遺す。單于益驕りて禮甚た倨る。漢廣利李陵等をして匈奴を撃たしむ。利あらず。陵匈奴に降る。後二年廣利等また北伐す。家巫蠱を以て族滅せらるると聞き、衆を并せて匈奴に降る。後單于死し、狐鹿姑單于立つに及びて内亂あり、國頗る衰ふ。

武帝北、匈奴を斥け、南、南越を取り、東、東越を降し、西南諸夷を平け、東北穢貊（東夷の種名、今の朝鮮）朝鮮を定め、また西北西域に通じ、大宛を討つ。其中秦

時もと有せしところ、已に淪して外國に入りしものあり、また已に内屬すと雖も、たゞ附隸にすぎざるものあり。武帝に至りてみな郡縣とす。秦もとなきところにして、新に之を闢くもの西北には酒泉敦煌等の郡、南には九真日南等の郡、西南には益州等の郡あり。西域諸國また秦時未だ聞かざるところなり。武帝闢くところの疆土を統計して、高惠文景の時に視れば、幾と一倍に至るといふ。

帝外征を事とし、神仙を信じ、且つ驕奢を好みしかば、國用多端、財政頗る紊る。爵を賣り、鹽鐵酒等を政府の專賣とし、また種々の税を課し、汲

漢武の晩

輪臺の關
々補給に務む。孔僅、桑弘羊等みな理財に長するを以て進む。また人民の法を犯すもの多く、張湯、趙禹等の酷吏頗る用ひらる。然れども猶之を禁遏するに足らず。東方盜賊並ひ起る。帝直に之を平けしと雖も海内頗る愁苦す。晩年輪臺の詔を下し、諸の苛政を除きしかば、漢室稍安きを得たり。帝崩す。在位五十四年。

第十章 霍光の攝政—昭宣の撫民

征光
武帝さきに太子あり、巫蠱の事起りて自殺す。是を戾太子といふ。帝少子弗陵の多知なるを愛す。病篤きに及ひ之を立て太子となし、霍光の忠厚にして大事を任すへきを察し、大司馬大將軍となして遺孤を託す。光は去病の異母弟なり。帝崩して太子即位す。是を孝昭帝となす。霍光政を輔く。始元元年(七五)燕王旦長にして立つを得ざるを以て反を謀る。赦して治せず。黨與誅に伏す。武帝の末年國內虚耗す。霍光首として民の疾苦を問ひ、貧窮を賑はし、賦役を軽くし、民と休息す。民生漸く蘇す。

孝昭帝

上官桀

左將軍上官桀の子安、霍光の婿たり。女を生む。立て、皇后となす。桀と安とみな光の政を爲すを忌む。昌長公主御史大夫桑弘羊等また怨望す。是に於て燕王旦と謀を通じ、人をして光の專權を上書せしむ。時に帝年十四、其實にあらざるを知り、上書せしものを捕へしむ。後桀の黨光を譖するものあり。上輒ち怒て曰く、敢て毀るものあらば之を坐せんと。是より敢て復た言ふものなし。桀等謀て光を殺し、帝を廢し、旦を立てんとす。事聞す。桀、安、弘羊等を捕へて盡く之を誅し、公主、燕王みな自殺す。

孝宣帝
帝在位十四年にして崩す。霍光武帝の孫昌邑王賀を迎へて位に即かしむ。皇后上官氏を尊て太后となす。賀淫戯度なし。光太后に奏して之を廢し、戾太子の孫病己を迎立す。是を孝宣帝となす。宣帝生れて數月、巫蠱の事に遭ひ、獄に繋かる。長するに及ひ高材にして學を好み、また遊俠を喜ぶ。具さに閭里の姦邪、吏治の得失を知る。立つとき十八。六年にして霍光卒し、始めて政を親らす。

帝政を親らするに及びて精を勵し治を爲し特に意を民治に用ひ刺
 吏守相を拜する輒ち親ら見聞す常にいはいはく民の田里に安んじ歎
 息愁恨の聲なき所以のものは政平に訟理れはなり我と此を共にす
 るものは其れ唯良二千石かと以爲らく太守は吏民の本なり數變易
 すれば則ち民安からずと故に太守治理の效あれば輒ち璽書を以て
 勉厲し秩を増し金を賜ふ公卿缺くれば則ち諸の表するところを選
 ひ次を以て之を用ふ朱邑龔遂尹翁歸入て右扶風となり趙廣韓延壽
 黃霸の如きみな一たひ地方の大守たりしもの漢世の良吏是に於て
 盛なりとなす帝また信賞必罰名實を綜核す政事文學法理の士咸な
 其能を精くし吏の職に稱ふ當時丞相には魏相あり好て漢の故事
 を觀る便宜の行事賢臣の所言を條し請て之を施行す魏相卒して丙
 吉あり寛大を尙ひ禮讓を好み大體を知る吉卒し黃霸于定國之に代
 る定國もと廷尉たり民冤枉なし張釋之と並ひ稱せらるたし帝法を
 用ふる刻に過くまた頗る神仙を好む賢良名吏爲めに罰を獲るもの

漢世の良

魏相丙吉

多し是れたし少しく惜むへしとなす

第十一章 烏桓—匈奴漢婿となる

烏桓及鮮

東胡の冒頓に破らるるや餘類烏桓山(内蒙古の東にあり)を保つもの烏桓と號
 し鮮卑山(内蒙古の西にあり)を保つものを鮮卑と號すみな匈奴に臣伏す

匈奴と匈奴

武帝霍去病を遣て匈奴を撃破するや烏桓を上谷遼東等の五郡の塞
 外に徙し漢の爲めに匈奴の動靜を偵察せしむ昭帝の時烏桓漸く強
 し乃ち匈奴の單于の冢墓を發きて冒頓の怨を報す匈奴大に怒て東
 烏桓を撃破す霍光きよて將范友明を遣り遼東より出て匈奴を邀

范友明

へしむ匈奴已に引き去る范友明烏桓の新敗に乗じて遂に之を撃つ
 是より烏桓幽州に寇す友明輒ち之を破る宣帝の時乃ち稍塞を保ち
 て降附す

烏孫と匈奴

是よりさき孝武の元封二年烏孫王使を遣して和を乞ふ烏孫の地は
 今の新疆是なり武帝公主を以て之に妻す匈奴志を烏桓に得ず即ち
 使を烏孫に遣し漢の公主を求め兵を以てその地を取る昭帝崩し宣

匈奴五解

帝立つ、烏孫連に匈奴の爲めに侵削せらる。本始三年范友明等五將軍に命じて、大軍を發して匈奴を撃たしむ。烏孫の兵また會す。匈奴の民衆畜産死亡するもの擧て數ふ可らず。是に於て匈奴遂に衰耗して烏孫を怨む。單于尋て烏孫を攻む。會天大に雨雪す。凍死して還るもの十の一に足らず。是に於て四方之を困む。匈奴大に虚弱なり。諸國の羈屬するものみな瓦解す。その後漢三道より匈奴に入り、捕虜數千を得て還る。匈奴遂に寇せず。邊境是に於て事少し。

鄯善

莎車

先零

是よりさき昭帝の時樓蘭王死す。匈奴その質子を歸し王たらしむ。霍光使を遣し之を刺殺し、その弟の漢にあるを送り立て、王となす。その國の名を鄯善と改む。尋て宣帝元康元年(五十七年)使を西域に遣す。會莎車反す。莎車は西域の國名にして、故地、今の回疆葉爾羌の近傍にあり。漢使兵を發して攻めてその城を拔き、その王を更め立て、歸る。神爵元年(五十九年)先零諸羌と漢に叛き金城を圍む。先零は西羌の一種にして、今の青海地方に棲息せしものなり。趙充國屯田の便宜を奏す。諸

匈奴の内

匈奴二國

堅昆

匈奴漢切

羌降る。漢遂に金城に屬國を置く。

匈奴已に大に衰へ、内難また發す。日逐王立ちて單于屠耆堂と隙あり。その衆を率ひて漢に降る。鄭吉之を迎へて漢京に詣る。吉西域を護し、烏孫康居等三十六國を督す。咸西域に振ふ。時に屠耆堂暴虐なり。衆離散して遂に滅す。五單于争ひ立つ。匈奴分れて二國となり。呼韓邪單于の兄郅支單于と相争ふ。呼韓邪敗れて漢に歸す。甘露三年(五十八年)呼韓邪朝す。漢客禮を以て之を待す。還て五原塞下に居る。是より烏孫以西の諸國、匈奴に近きものみな漢威に伏す。尋て二年をへて郅支單于の勢また盛なり。撃て烏孫を破り、北に進みて堅昆を併す。堅昆は北狄の一種にして、阿爾泰山地方に居りしもの、今の吉利吉思族はその後なりといふ。郅支留て之に都す。宣帝崩じ元帝立つ。初元五年(一七七年)郅支漢の使者を殺して西康居に走る。後漢將の爲めに殺さる。呼韓邪尋て入朝す。元帝宮人王昭君を以て之に妻す。是より匈奴世々漢の甥と稱す。

第十二章 宦官外戚の亂——王莽の篡立

漢諸侯の禍罷みて宦官外戚の災また萌す。昭帝の時、上官桀亡ひ霍氏の子弟戚族みな貴く、黨與朝に滿つ、賀廢せらるるに至り、光の權益重し。宣帝立つに及びて、光の夫人顯の少女成君を后となさんと欲し、許皇后を毒殺す。遂に成君を納れて后となす。宣帝の六年(元鼎五)、光卒す。霍氏奢縱益甚し、帝その兵權を收め、張安世をして諸軍を領せしむ。四年霍氏恐れて遂に謀反し、誅に伏す。皇后霍氏また坐して廢せらる。宣帝のとき霍氏亡ふと雖も、外戚許氏(許后の家)史氏(宣帝の祖母史長姉の家)王氏(宣帝の生母の家)みな貴寵を得、帝また刑法を以て治をなし、中書宦官を信任す。孝元は許后の出なり、柔仁儒を好み、また父に似す。外戚宦官の亂交起る。

霍氏亡ふ

許氏、史氏、王氏

蕭望之、周堪、劉向、金敞

元帝の立つや、遺詔により外屬史高尙書の事を領す。蕭望之、周堪、之に副たり。二人はもと帝の師傅頗る信任せらる。宗室劉向、中に給事し、金敞侍中たり。並に左右に拾遺し、四人同心謀議す。史高は位に充つるの

弘、石顯

み。是より望之と隙あり。中書令弘、恭、僕射石顯、宣帝の時より久しく權機を典る。帝位に即くに及びて多疾なり。顯か中人にして外黨なきを以て、遂に委するに政事を以てす。貴幸朝を傾け高と表裏す。望之等外戚許史の放縱を患ひ、また恭顯の權を擅らにするを疾み、中書宦官を罷めんと請ふ。上從ふ能はず。恭顯誣ひて望之等を獄に下す。望之遂に自殺す。のち弘恭死し、石顯中書の令たり。威權日に盛なり。諸の附倚するもの寵位を得。

王鳳

帝崩す。優游不斷にして漢業衰ふ。孝成帝立つ。母は王氏尊て皇太后となす。元舅王鳳を以て大司馬大將軍となし尙書の事を領せしむ。石顯罪を以て免じ、其黨悉く廢す。政柄外戚に歸し、王氏獨り盛なり。此歲鳳の弟崇、安成侯となり、のち五弟みな同日列侯となる。世之を五侯となす。谷永、杜欽等諸儒多くは鳳の羽翼となり、王氏の子弟勢官に分據す。諫むるものはみな死に處す。公卿目を側つ。劉向極諫す。帝終に用ふる能はず。鳳卒し從弟、音大司馬となる。

王莽

永始元年(五五)王莽新都侯となる。莽は王太后の弟曼の子なり。太后の兄弟八人獨り曼早く死し侯たらず。莽幼にして孤なり。五侯の子佚遊相高ふる。莽獨り抑損身を勤め、博く學ひ、外英俊に交り、内諸父に事へ、曲さに禮意あり。是に至りて侯に封せられ、侍中となる。聲望諸父を傾く。綏和元年(五三)遂に大司馬となる。賢を尙ひ、士に下り、愈、儉約をなして名を飾る。同二年帝崩す。帝酒色に荒み、政外家にあり。漢業愈衰ふ。孝哀帝立つ。太后を尊て太皇太后といふ。帝の外家一時事を用ひ、莽太皇太后の命を含み、罷めて國に就きしと雖も、帝崩し、莽また大司馬となり、尙書の事を領す。元帝の庶孫を迎へ立つ。是を孝平帝と爲す。帝甫めて九歳、太皇太后朝に臨み、大司馬莽政を執る。百官己を總へて以て聽く。元始元年(六一)莽大傅となり、安國公といふ。尋て莽か女を納れて皇后となし、莽に宰衡の號を加ふ。蓋し伊尹周公の稱號を采るなり。位諸侯王の上にあり。成哀以來張禹、孔光名儒を以て位三公にあり。詔倭是れ事とし、上下風をなす。上書莽を頌するもの四十八萬人に至る。

王莽位を篡ふ

是歲莽遂に帝を弑す。宣帝の玄孫嬰を迎へて皇太子となす。號して孺子嬰と曰ふ。莽攝に居て祚を踐む。養するに假皇帝と曰ふ。民臣之を攝皇帝と謂ふ。位を攝する三年、遂に位を篡ひ國を新と號し、元を改めて初始といふ。(五八)漢高祖より是に至るまで、凡十三世、二百九年なり。

第十三章 王莽の敗滅—光武の統一

王莽の政

莽未だ篡せざるの時、官名及十二州の界を更定す。罷置改易して國內多事なり。當時貧富懸隔甚たしかりしかば、古の井田の法に倣ひ、國內の田を改名して王田となし、賣買することを得ず。男口八に盈たすして、田一井に過くるものは、餘田を分ちて九族郷里に予ふ。民怨むもの多し。また數、寶貨を更作して信なし。百姓潰亂す。是に於て農商業を失ひ、食貨俱に廢す。加ふるに制度を改易し、政令煩多にして、賦歛重數、四方囂然として人漢を思ふ。莽の意蓋し周時の制を采り、先聖の政を行ふの美名を竊まんとするなり。

遠近兵起る

さきに莽の逆を討せんとして皆克たす。今や四方囂然として遠近兵

劉續、劉秀
起る

劉玄

秀、尋邑の
兵を敗る

起る。樊崇青州に起る。子の兵自ら赤眉と號す。蓋し其眉を赤くして以て莽の兵と別つなり。王匡の兵荊州に起り、綠林山中に藏る。のち分れて下江新市の兵となる。新市の兵南陽に入る。平林の兵起て之に應ず。時に漢の宗室劉續および弟秀も亦兵を春陵に起す。時に地皇三年（二六）なり。新市平林下江の兵と力を戮せて莽を攻めんとす。衆已に十餘萬、統一する所なし。みな劉氏を立て、人望に協はんとす。明年諸將共に劉玄を立て、皇帝となす。玄は續、秀と高祖を同くす。時に平林の軍中にあり。諸將その懦弱を貪て之を立つ。大赦して更始と改元し、宛に都す。續を以て大司徒となし、秀を將軍となす。王莽、王尋王邑を遣はし、大に兵を發して山東を平けしむ。兵百餘萬と號す。諸將みな走て昆陽に入り、散り去らんとす。秀寡兵を帥るて先鋒となり、尋邑の兵を退く。諸部之に乗す。秀また敢死者と尋の中堅を衝き、遂に之を昆陽に殺す。城守するもの亦出て、夾撃大に莽の兵を破る。關中之を聞きて震恐し、海内の豪傑響應す。子の牧守を殺し、漢の年

隗
公孫

非
亡ふ

玄、續を殺す

鄧禹

王
郎

號を用ひ、旬月の間國內に逼り、成紀の隗囂兵を起し、傍近の諸郡を下し、公孫述また兵を成都に起す。のち自立して蜀王となる。玄將を遣り、武關を破る。析の人鄧曄兵を起して長安に迎へ入る。衆兵莽を誅す。莽帝を稱する十五年にして亡ふ。時に皇紀六百八十三年なり。昆陽の戰、續、秀殊功あり。威名益盛なり。玄續を忌みて之を殺す。秀敢て喪を服せず。たゞ枕席涕泣の處あり。また嘗て功を伐らす。玄慙ち秀を大將軍に拜し、未だ幾ならずして大司馬の事を行はしめ、河北を徇へしむ。過くるところ莽の苛政を除く。南陽の鄧禹、秀に説くに、更始は常才、帝王の器にあらず。公英、雄を延攬し、務めて民心を悦はしむれば、天下定むるに足らざるを以てす。秀大に悦ふ。禹をして中に宿止せしめ、與に計議を定む。時に卜者王郎詐て成帝の子と稱し、邯鄲に入て帝と稱し、幽冀を徇ふ。州郡響應す。秀北、薊を徇ふ。諸侯の兵を會して進て邯鄲を抜き、王郎を殺す。更始使を遣して秀を立て、蕭王となし、兵を罷めしむ。王辭する

寇恂

光武帝に
即く

馮異

竇融

馬援

に河北未だ平かざるを以てし、徵に就かず。銅馬の諸賊を撃ちて之を降す。悉く諸將を分配し、南河内を徇ふ。時に赤眉西長安を攻む。王、鄧禹等が兵をして關に入らしむ。禹寇恂を薦め、河内を守らしむ。恂牧民御衆の才あり。糧食器械を調へ、以て軍に供す。王自ら兵を引き、燕趙を徇へ。遂に再三衆の請によりて皇帝の位に鄯南に即き、建武と改元す。是を光武帝となす。赤眉長安に入る。更始走る。尋て殺さる。帝洛陽に入て之に都す。史故に之を東漢と稱し、前漢を西漢と稱す。(八五、八六)

時に關中未だ定らず。鄧禹衆を引き、西す。赤眉と長安に戰ふて利あらず。帝馮異をして關に入らしめ、禹に代らしむ。禹と共に赤眉を攻めて、また敗績す。已にして大に之を峭底に破る。赤眉の餘衆東宜陽に向ふ。帝軍を勅して之を待つ。樊崇等降る。關中定まる。餘の帝と稱するもの或は降り、或は亡ふ。たゞ隗囂天水に據りて西州の上將軍と稱し、公孫述蜀によりて帝と稱し、竇融河西によりて五郡大將軍と稱す。帝數馬援をして、關に遊説せしむ。關述に臣たり。建武八年帝自ら將と

吳漢半彭

光武の政
策

して、關を伐つ。竇融五郡の太守を率ゐて之に會じ、關を奔らす。明年關死し、十年攻めてその子を降す。隴右平く。十一年帝吳漢をして兵を帥る。岑彭と會して公孫述を蜀に攻めしむ。明年漢兵成都に至り、撃て述を殺す。蜀平く。竇融に詔し、五郡の太守と入朝せしむ。融を拜して冀州の牧となす。海内是に於て一統し、漢業復た興る。

第十四章 光武の政策——孝明孝章の治績

光武政體を明慎し、權綱を總攬し、時を量り、力を度り、舉として過事なし。嘗て宗室を會して曰く、吾天下を理むる柔道を以て之を行はんと。久しく兵間に在て武事を厭ふ。蜀平きて後は警急にあらざれば、未だ嘗て軍旅を言はず。玉門關を閉ちて西域を謝絶し、功臣を保全して復た任するに兵事を以てせず。皆列侯を以て第に就かしむ。吏事を以て三公を責め、功臣を以て吏事に任せず。諸侯みな功名を以て自ら終ふ。たゞ馬援死する日恩思頗る終さず。帝賊罪に於て貸すところなし。用ふる所の群臣宗弘の如き、みな重厚

東漢の系

正直なり。州牧郡守縣令またみな良吏なり。また尤も高節を重し、處士を禮遇す。漢世清節の士多き此に始まる。天下未だ平かざるに方て、上已に文治に志あり。首として大學を起し、古典を稽式し、禮樂を修明す。晚歲明堂、靈臺、辟雍を起つ。粲然たる文物述ふへし。帝二十八始て兵を起し、三十一帝となり、四十二歳悉く群雄を平け、六十二歳にして崩す。在位三十二年、孝明帝嗣く。

孝明の本

孝明また儒を尙ひ、皇太子諸王侯群臣の子弟經を受けざるなし。又建武の制度を遵奉して更變することなし。皇妃の家侯に封せられ、政に預るを得ず。當時の吏の人のを得て民その業を樂む。遠近畏服し、戸口滋殖す。たゞ上性偏察にして好て耳目を以て發隱して明となす。公卿大臣數、誣毀せられ、近臣尙書以下提曳せらるゝに至る。在位十八年にして崩す。孝章帝立つ。

孝章の本

孝章、明帝察々の後を繼ぎ、人の苛切を厭ふを知り、事寛厚に従ひ、之を文るに禮樂を以てす。州郡また人を得たり。當時徭を平にし、賦を簡に

し、忠恕の長者政をなす。上の世を終るまで民の慶による。尋て崩す。光武より此に至る六十餘年、海内無事にして紀綱正し。

第十五章 漢 匈奴 西域 東西交通の始

王莽と匈奴

宣武の朝漢武西北に震ひ、匈奴西域みな懽服す。莽の篡立するや、府庫の充實せるを恃み、威を匈奴に立てんと欲し、匈奴單于を改めて、降奴服于となし、諸將をして北伐せしむ。時に呼韓邪の子、知立て單于たり。怒て曰く、先單于宣帝の恩を受く、背く可らず。今の天子は宣帝の子孫にあらず、何う次て立つを得んと。遂に寇して塞に入る。西域諸國みな叛す。知卒す、弟咸立つ、陽に莽と和す。莽匈奴を改め號して恭奴と曰ひ、單于を善于といふ。然れども匈奴の寇略故の如し。王莽の末路盧芳なるものあり。詐りて武帝の曾孫と稱し、兵を擧ぐ。更始亡ひ、匈奴芳を迎へ立て、漢帝となし、屢邊に寇す。芳後、漢に降り、復た反し、匈奴に奔て死す。匈奴、烏桓、鮮卑と屢兵を連て入寇す。のち匈奴連年旱蝗して人畜死するもの過半なり。烏桓その疲に乗じ、擊て之を破る。匈奴北に徙る

盧芳

匈奴北に

て匈奴分れ
なる南北と

耿秉

伊吾

莎車王賢

數百里漢より南の跡を絶つ。尋て匈奴の南邊八部、日逐王比を立て、南單于となし漢に附す。比は知の子なり。匈奴分れて南北となる。時に建武二十五年(○五二七)なり。知もと北單于と隙あり、互に相攻伐す。漢南單于を西河の美稷(内蒙古郡東河にあり)に移し、兵を以て之を擁護す。北匈奴もまた和を求む、再ひ求むるに及ひて之を許す。南單于比卒し、弟莫立つ。光武武事を厭ふ。明帝位に即くに及ひて、南北匈奴相交通するを患ひ、度遼營を五原に置き以て之を阻つ。永平十五年(三二七)耿秉、北匈奴を撃たんと請ひ、先づ西域に通じ、以て匈奴の右臂を斷するの策を獻す。帝の言を嘉す。耿秉、竇固等をして、翌年、酒泉、燉煌等の兵を發し、南單于、烏桓の兵を合して北匈奴を伐たしむ。固等進て伊吾(今甘肅伊吾縣)の地を取り、兵を置きて屯田せしむ。是よりさき王莽の時、西域諸國みな叛きて匈奴に附し、頗る方の重飢に困む。光武海内を定むるや、みな漢に屬し、復た都護を置かんと請ふ。光武事端を外國に啓くを欲せず、故に許さず。莎車王賢再ひ奉獻す。光

班超

于寘

疏勒

武賢に都護の印綬を賜ふ。燉煌の太守上言す。夷狄假すに大權を以てす可らずと。乃ち更に大將軍の印を賜ふ。賢恨み詐りて大都護と稱し、尋て西域を兼井せんと欲す。鄯善車師十八國侍子を遣り、漢の都護を得んと請ふ。光武其侍子を還し、厚く之に賜ふ。また西域に意なし。賢遂に鄯善を破り龜茲王を殺す。鄯善、車師等復た匈奴に附す。時に建武二十二年(○五二六)とす。固等既に北匈奴を伐ち、班超を西域に遣す。超は彪の子なり、兄固及妹昭みな博學文を善くす。漢書は方の作るところなり。超鄯善に至る。其王廣、厚く之を遇す。匈奴の使また至り、忽ち疎懈す。超襲うて匈奴の使を斬る。鄯善王乃ち服す。超次て于寘(今新疆之回疆)に使し、て其王を降し、また疏勒(今新疆之回疆)を服し、西域諸國復た漢に通す。竇固耿秉尋て車師を撃ちて之を定む。漢、都護戊校尉已校尉をその地に置き、て之を鎮せしむ。明帝崩じ、焉耆(今新疆之回疆)龜茲その都護を没し、北匈奴その戊己校尉を圍む。章帝兵を遣して之を救ふ。建初元年己校尉敗没し、漢兵戊校尉を迎へて歸り、都護及戊己校尉の官を罷め、班超を召

し還す。超上疏して兵を請ひ、建初八年(四三七)西域を伐つ。

時に北匈奴衰耗して黨衆離叛す。南匈奴その前を攻め、丁零その後に寇し、鮮卑の左を撃ち、西域その右を攻む。自立する能はずして遠く

北匈奴亂る

引き去る。鮮卑また撃てその單于を斬る。匈奴大に亂れ五十八部漢に降る。章帝崩じ、和帝立つ。永平元年(四七)外戚竇憲の罪を贖はんと欲し、上奏して北匈奴を撃て大に之を破り二十餘萬を降して還る。三年憲また兵を遣して北匈奴を撃破す。北單于走死す。鮮卑徙てその地を領す。匈奴の餘衆留るものみな鮮卑と號す。鮮卑是より漸く盛んじて、西晋の末更に大に起る。

鮮卑漸く盛なり

甘英大秦に使す

班超已に兵を得て疏勒を定め、章帝の末年、于闐諸國の兵を發し、撃て莎車を降じ、月氏龜茲等尋てみな降る。漢因て超を以て都護となし、龜茲に居らしむ。永元六年(五三)擊て焉耆を破り、うの王廣を斬る。是に於て西域五十餘國悉く質を納れて漢に屬す。永元九年超、甘英を使し、大秦に使せしむ。大秦は羅馬をいふなり。當時羅馬歐羅巴を統一し、亞

條支

非利加の北部を并せ、又亞細亞の西部を取る。波斯其東進の路を遮る。史に稱す、英條支に抵り、大海に臨みて、渡らすして還ると、條支は「カルデア」、大海は波斯灣をいふならん。蓋し、支那は夙に絹布を以て希臘羅馬に知らる。西人故に支那を稱して「セリカ」となす。絹布の義なり。西亞細亞の行賈之を支那に得て羅馬に輸す。羅馬人頗る之を貴重す。羅馬諸帝常に産絹の國に通せんと欲す。毎に波斯に隔らる。羅馬帝「マルカス・オウレリアス・アントニアス」、波斯を伐ちて大に之を敗り、延熹九年(一六六)海路より使を漢に遣す。吳の黃武五年(二六六)羅馬の「セルベス」また波斯を侵し、うの賈人交趾に来る。交趾は安南の東京地方なり。太守之を孫權に送る。みな要領を得ずして還る。

羅馬人來る

班超

超西域に在る三十年、年老いて歸を乞ふ。和帝之を許し、任尙を以て都護となす。任に適せず、邊の和を失ふ。安帝永初元年(一〇七)竟に西域を棄つ。復た都護を置かず。北匈奴復た諸國を驅使し、連りに河西に寇す。班超の子勇父の風あり。鄧太后の計を用ひ、敦煌の營兵を復す。尋て

勇兵を將るて車師に屯す。順帝の永建元年(五十六)、勇諸國の兵を發して匈奴を敗る。西域また漢に服す。勇尋て罪を獲て去る。西域遂に漢の威令を奉せず。

第十六章 外戚宦官の亂——黨錮の禍

光武前漢外戚の禍に懲り、親ら大權を握る。明帝嗣きて立ち、最も任使を慎む。馬后賢にして内助の功多し。然れども性謹厚私を以て公を害せず。章帝位に即き、尊て太后となす。諸馬の封せらるゝもの、皆太后の戒を奉して自ら守る。帝竇后を寵するに及ひて、諸竇みな貴く、漸く外戚專横の端を啓く。

章帝崩し、孝和帝立つ。年甫めて十歳、竇后朝に臨む。竇憲外戚を以て侍中たり。事を川ふ。罪あり、北匈奴を撃て自ら贖ひ入て大將軍となる。四年父子兄弟共に公卿將校となり、朝廷に充滿す。逆謀あり。上之を知り、遂に宦者鄭衆と議を定め、迫て自殺せしむ。衆を以て大長秋となり、常に與に政を議す。宦官權を用ふる此より始まる。

の外戚專横

の宦官弄權

の宦官弄權

帝崩し、孝殤立つ。生れて漸く百餘日、八閏月にして崩す。時に皇太后鄧氏朝に臨む。鄧隲と策を定めて孝安を立つ。年甫めて十三、少にして聰明なり。既に位に即きて失徳多し。初め鄧太后制を稱し、公卿に接せず。乃ち宦官を用ふ。宦官權益大なり。帝の乳母王聖、宦者李閔、江京等と太后を毀る。帝怒る。太后崩し、宮人また太后兄弟を誣ゆ。鄧隲罷められて死し、諸鄧悉く黜く。宦者李閔、江京、乳母王聖等事を用ふ。閔皇后の兄弟共に公卿將校となる。大尉楊震之を諫む。遂に譖せられて死す。舅耿寶大將軍となる。

帝崩し、太子さきに后及江京等の爲めに讒せられ、廢せられて濟陰王となる。閔后朝に臨み、兄閔顯と安帝の從弟懿を迎へ立つ。顯大將軍耿寶を斥け、王聖母子を徙す。宦者孫程等顯を誅し、閔后を遷し、濟南王を迎へ立つ。是を孝順帝となす。宦官功を以て侯に封せらるゝもの十九人、勢益大なり。帝皇后の父梁商を以て大將軍となす。商死す。子の冀を以て大將軍となす。或は冀か君を無するの心あるを劾奏す。用ふる

の宦官弄權

教科書 東洋史 卷之五 五侯

能はず帝崩じ、孝冲帝立つ。三閱月にして崩す。梁太后孝質帝を迎立す。年甫めて八歳なり。梁冀の聰慧を惡みて之を弑じ、孝桓帝を迎立す。梁冀定策の功を以て封を益し、子の弟みな封せられて侯となる。威内外に行はれ、天子手を拱するのみ。延熹二年（熹平）帝宦者單超等と謀り、兵を勅して冀の印綬を收む。冀自殺じ、梁氏少長となくみな棄市せらる。超等五人並ひ侯たり。世に之を五侯といふ。宦官益専恣なり。冀誅せられて天下異政を想望す。黃璜首として大尉となる。この後三公楊秉、劉寵の如き大抵人望ありしか、終に五侯の徒を制する能はず。陳蕃、李膺をすゝめて司隸校尉となす。宦官や之を畏る。

清節の士

東漢光武以來清節の士多し。是より先き王襲の如き、陳蕃實にその引進による。また荀淑の如き、當時の名士李固、李膺共に之を師宗す。而して陳寔實に之と名を齊くす。その他郭泰、崔寔の徒擧げて數ふ可からず。此等の士みな氣節を尙ひ、宦官に抗す。初め桓帝侯たりしとき學を

黨人の議

甘陵の周福に受く。位に即くに及ひて擢て尙書となす。時に同郡の房植名あり。郷人諺て曰く天下規矩、房伯武、因師獲印、周仲進と。二家の賓客互に相毀揣して隙をなす。是より甘陵南北部あり。黨人の議此に始まる。汝南の太守宗資、范滂を以て功曹となし、南陽の太守成瑨、岑暉を以て功曹となし、みな善を褒じ、違を糾す。滂尤も剛勁惡を疾むこと讐の如し。二郡また謠ふ。當時大學の諸生三萬餘人、郭泰、賈彪之が冠たり。陳蕃、李膺と更に相推重す。學中歌謠を作て蕃、膺を褒す。是より中外風を承け、競て臧否を以て相尙ふ。朝臣密にその毀貶を恐る。會南陽の太守成瑨と大原の守劉瓚と赦の後、於て宦官の黨を案殺す。徵して獄に下す。また宦官の制を踰へたる冢宅を破るものあり。宦官の家屬の法を犯せるものを收めて之を殺すものあり。宦官冤を訴ふ。みな罪を得たり。蕃屢之を争ふ。上聽かず。李膺また赦後に於て宦官を殺す。宦官人をして上書せしめ、李膺大學の遊士を養ふて共に部黨をなし、朝廷を誹訕し、風俗を疑亂すと奏す。帝震怒じ、郡國に下して黨人を捕ふ。

東漢の黨

膺等を北寺の獄に下す。薛、杜密、陳寔、范滂等二百餘人に連る。使者四出して追捕す。蕃復た極諫す。帝策して之を免す。賈彪乃ち皇后の父。寶武に説き、上疏して之を解かしむ。膺等の獄辭また多く。宦官の子弟を引く。宦官懼れ、帝に白して黨人を赦す。ふな田里に歸し、終身を禁錮す。是を東漢の黨錮といふ。實に永康元年(五二八)なり。
李膺等既に廢錮すと雖も、海内士大夫の道を高しとし、朝廷を汚穢とす。更に相標榜して稱號を爲くる。寶武、陳蕃、劉淑を三君となす。言は一世の宗とするところなり。李膺、荀昱、杜密等八人を八俊となす。言は人英なり。また八顧八及八厨の目あり。帝崩じ、寶皇后孝靈帝を迎立す。年十二。寶太后朝に臨み、寶武大將軍となり、陳蕃太傅となり、李膺、杜密等また朝に列す。天下太平を想望す。蕃、武共に議し奏して宦官曹節、王甫等を誅せんとす。謀泄る。宦者譔ゆるに大逆を以てし。先づ陳蕃を執へて之を殺す。武自殺す。太后を南宮に遷す。膺等黨人死するもの百人。子の死徒廢錮せらるるものまた六七百人。時に建寧二年(五三二)なり。

第十七章 東漢の滅亡——群雄の蜂起

張角
州牧是より重し

時に天下大に亂れ、豪傑四に起る。鉅鹿の張角妖術を以て教授し、太平道と號す。十餘年の間徒衆數十萬あり。中平元年(四四三)一時に俱に起る。其徒黃巾を著く。旬月の間、天下響應す。皇甫嵩等をして黃巾を討せしむ。嵩、沛國の曹操と軍を合せ、賊を破る。操少くして機警權數あり。是に至て賊を討するを以て起る。張角死す。嵩戰うて子の弟を斬る。是より所在盜賊多し。朝廷牧伯を置き、重臣を以て之に任す。州牧是より重し。

董卓
袁紹

靈帝崩じ、子辯立つ。何太后朝に臨む。后の兄大將軍何進、尙書の事を録す。袁紹進に勸めて宦官を誅せしむ。太后未だ肯かはす。紹等畫策し、四方の猛將を召し、以て太后を脅かす。遂に將軍董卓が兵を召す。卓未だ至らず。進宦官の爲めに殺さる。紹兵を勅して諸の宦官を捕へて、少長となくみな之を殺す。凡そ二千餘人。卓至る。陳留王協幼にして慈なり。之を立てんと欲す。紹さかす。卓怒る。紹出奔す。卓遂に協を立て、是を孝

獻帝となす。

孫堅

袁術

呂布

劉備

孫策

關東の州郡兵を起して卓を討す。袁紹盟主たり。卓洛陽の宮廟を焼き都を長安に遷す。長沙の太守孫堅また兵を起して卓を討す。南陽に至る。衆數萬袁術と兵を合す。術紹と同祖なり。みは故の大尉袁安の玄孫なり。紹壯健にして威容あり。士を愛す。士輻湊す。術もまた俠氣あり。是に至てみな起る。堅撃て卓か兵を敗る。時に司徒王允密に謀て卓を誅せんとす。中郎將呂布卓を怨む。相結ひて卓を刺す。卓か黨兵を擧げて關を犯し。王允を殺す。呂布走り。袁術に依り。また袁紹に歸す。涿郡の劉備字を立德といふ。子の先景帝の後に出づ。大志あり。言語少なり。河東の關羽。涿郡の張飛。備と相善し。備起る。二人之に従ふ。興平元年。徐州を領す。呂布曹操に破られて備に歸す。さきに孫堅袁術に従ひ。爲めに荊州を圖る。荊州の刺史劉表の兵に射られて死す。堅の子策弟權と壽春に留る。堅死する。時策年十七。往て袁術に見え。父の餘兵を得たり。策十餘歳の時已に交結して名を知らる。舒人周瑜策と同年に

してまた英達夙成なり。是に於て策に従て起る。策東江を渡りて轉鬪す。向ふところ敢てその鋒に當るものなし。軍規頗る嚴明なり。

初め曹操兗州に入りて之に據る。使を遣はして上書す。帝以て兗州の牧となす。時に帝董卓餘黨の亂を逃れて安邑にあり。建安元年(五十六)

洛陽に還る。荀淑の孫荀彧。曹操の謀士たり。操に説て帝を擁し。天下に號令せしむ。操兵を引きて入朝し。帝を許に遷す。遂に袁紹に大尉を授け。自ら司空となる。劉備呂布に襲はれて操に歸す。操備をして沛に屯せしむ。布復た備を攻む。備復た走て操に歸す。操布を撃て之を殺し。備と許に歸る。

呂布死す

袁術初め南陽に據る。已にして壽春に據る。讒言を信して遂に帝と稱す。淫侈甚たし。既にして資實空虚。自立する能はず。袁紹に奔らんとす。

袁術死す

操劉備をして之を邀へしむ。術走り還りて死す。(五十七)袁紹時に冀州に據り。勢大にして心驕る。精兵十萬騎一萬を簡ひ。許を攻めんとす。操と官渡に相拒む。操襲て紹か輜重を破る。紹か軍大に潰ゆ。後慚憤して死

袁紹死す

魏書 卷之三十九 魏書 卷之三十九 魏書 卷之三十九

す。

孫權

諸葛亮

操紹と相拒むや、車騎將軍董承劉備と曹操を誅せんと謀る。備既に遣はされて袁術を邀ふ。因て徐州に之き兵を起す。謀泄る。董承殺され。劉備敗れて袁紹に走る。袁紹敗れ。劉備また破られて荆州に走り。劉表に依る。當時孫策江東を定め、許を襲ふて漢帝を迎へんとす。密に兵を治む。未だ發せずして怨家の射るところとなり。卒す。權代てうの衆を領す。専ら江東を守りて北上せず。曹操また袁紹の二子を破り、北方一帯全くその手に落つ。（三十二年）劉備已に劉表に依り、士を訪ぬ。瑯琊の諸葛亮襄陽隆中に寓居す。備三ひ往て亮を見るを得たり。亮、備に説くに三國鼎立を以てし、荆州、益州を跨有し、曹操孫權と對立するの策を畫す。時に曹操漢の丞相たり。建安十三年劉表を撃つ。表卒す。子宗荆州を舉げて操に降る。劉備江陵に奔る。操之を追ふ。備夏口に奔る。操軍を江陵に進め、遂に東に下る。亮、備に謂て救を孫權に求む。權説ふ。操書を權に遺て會戰を挑む。權意を決す。

赤壁の戰

して、周瑜に三萬人を督せしめ、備と力を并せ操を逆ふ。進て赤壁に遇うて水戰す。火攻の策を以て大に操の軍を破る。操走り還り、後屢、兵を權に加ふ、終に志を得ず。

劉備益州を取

劉備荆州江南諸郡を徇ふ。周瑜死し、魯肅代てその兵を領す。肅權にすしめ、荆州を劉備に借し、以て共に曹操を防ぐ。時に劉璋益州に據る。龐統、備に説て益州を取らしむ。備、關羽を留めて荆州を守らしめ、兵を引き流に沂り巴より蜀に入り、建安十八年遂に劉璋を破り、益州を取る。孫權人をして備に荆州を求めしむ。備敢て還さず。遂に之を争ふ。已にして荆州を分ち、備蜀より漢中を取り、自立して漢中王となる。漢中の將關羽江陵より出て樊城を攻め、襄陽を取る。許より以南往々遙に羽に應ず。威頗る震ふ。曹操許都を徙してその鋒を避けんと議するに至る。權心之を忌む。曹操、權をしてその後を躡ましむ。操か師樊を救ふ。權の將また羽の後を襲ふ。羽走る。權の軍羽を獲て之を斬る。遂に荆州を定む。是時に當り曹操丞相となり、冀州の牧を領し、魏公に封せられ、爵

關羽敗死

中世史 五十八 文

を進めて王となる。建安二十五年(西暦260年)操卒し、子丕立つ。遂に帝に迫りて位を禪らしむ。東漢光武より是に至るまで十三世、百九十六年にして亡ふ。

第二篇 上期下 魏晋南北朝

第一章 三國の鼎立—晋の一統

さきに關東諸將董卓を討するを以て兵を起し、のちみな曹操の爲めに亡はされ、江北十三州全くうの有に歸す。孫權江東三州に割據し、劉備巴蜀に王として、三國鼎立の勢成る。曹丕漢帝の禪を受け、高祖文帝と稱し、國を魏と號し、黃初と改元し、洛陽に都するに及びて、他二國また相次て帝を稱す。

黃初二年蜀中傳へ言ふ、漢帝已に害に遇ふと、漢中王喪を發し、服を制し、諡して孝愍帝と曰ふ。群臣王に勸めて帝號を稱せしむ。是を漢昭烈帝となす。章武と改元し、成都に都し、諸葛亮を丞相となす。漢帝關羽の没を恥ち、自ら將として孫權を伐つ。權使を魏に遣す。魏權を封して吳王となす。漢帝吳と相拒くこと累月、吳將陸遜漢營を連破す。漢帝夜遁る。魏主吳の侍子を求む。至らず。怒て之を伐つ。吳王黃武と改元し、江に

三國鼎立の勢成る

臨て拒き守る。四年漢の昭烈崩し、後皇帝立つ。諸葛亮遺詔を受けて政を輔け、先つ吳と和す。魏主屢舟師を以て吳を撃つ。志を得ずして師を還へす。遂に崩す。明帝立つ。

亮師を出

亮南夷の漢に畔くものを討て之を平け、諸軍を率ゐて北魏を伐つ。遂に漢中に屯す。(明帝本紀)明年漢軍祁山を攻む。戎陣整齊、號令嚴明なり。初め魏昭烈既に崩し、數歲聞ゆるなきを以て備を設けず。朝野恐懼す。天水、南安、安定みな亮に應ず。關中響震す。魏帝張郃を遣して之を拒く。亮馬謖を以て諸軍を督せしむ。謖亮か節度に違ふ。郃大に之を破る。亮乃ち漢中に還る。已にして復た兵を引ききて散關より出て陳倉を圍む。利あらず。二年を歴て亮また魏を撃ち、祁山を圍む。魏司馬懿をして諸軍を督し、亮を拒かしむ。張郃亮に向ふ。魏兵大に敗れ、張郃死す。亮還て農を勸め、武を講じ、三年にして之を用ふ。衆十萬を悉くして魏を伐ち、進て渭南に軍す。魏の大將軍司馬懿兵を引ききて拒き守る。亮前さば數、出てみな運糧繼かす。已か志をして伸ひさらしめしを以て、乃ち兵を分

司馬懿

て屯田し、數、懿に戦を挑む。懿出てす。未だ幾ならずして亮卒す。長史楊儀軍を整て還る。(魏書、明二年、本紀)是より先き吳主孫權自ら皇帝を武昌に稱し、(天璽)已にして建業に都す。是を太祖皇帝となす。亮の兵を出すや、吳と約す。吳兵三道より魏に入る。魏帝自ら將として之を却く。

燕

公孫度

魏の明帝大略あり。既に吳蜀を却け、景初二年(九八八)また兵を北燕に用ふ。初め漢末公孫度遼東の太守となる。東高句麗、西烏桓を撃ち、勢頗る張る。子康をへて、その孫淵に至り、屢、吳に通す。乃ち魏に歸じ、また叛きて自立して燕王となる。景初二年明帝司馬懿を遣じ、遂に之を滅じ、盡くその地を取る。翌年明帝崩す。子芳立つ。司馬懿曹爽遺詔を受けて政を輔く。曹爽驕奢度なり。司馬懿之を殺し、魏の丞相となり、専ら家門を營立す。懿尋て卒し、その子師、撫軍大將軍となり、尙書の事を録す。魏帝その専恣を惡み、之を誅せんとす。師帝を廢す。明帝の姪髦を迎立す。師卒し、弟昭繼て相國となり、晋公に封せらる。魏帝威權日に去るを見、て子の忿に勝へす。昭を誅せんとす。昭の黨賈充入て魏帝を刺す。昭文

司馬師

司馬昭

帝の姪璜を迎立す。是を元皇帝となす。

漢は亮の後賢相力を計り、専ら内を守る。姜維事を用ふるに及ひて、數兵を出して魏を攻む。司馬昭之を患ふ。魏景元四年(三三九)、鄧艾鍾會を將とし、漢を伐たしむ。維退て劍閣を守て會を拒く。艾山を鑿て道を通じ、猝かに成都に至る。帝出て降る。蜀漢二世四十三年に亡ぶ。
咸熙元年(三三四)、司馬昭尋て卒し、子炎嗣く。元帝に迫て位を禪らしむ。魏曹丕より是に至るまで五世四十六年にして亡ぶ。炎位に即く是を晋の世祖武皇帝となす。

晋既に蜀魏を并せ、吳を滅するの志あり。晋羊祜を以て荊州の事を督せしむ。吳は陸抗を以て諸軍を都督せしむ。互に境を對し、各分界を守るのみ。時に吳は太帝權より二世を歴て暗に至る。德政を修めず、兼并を欲す。諸將の謀を用て、數、晋の邊を侵盜す。抗諫むれども聽かず。抗卒す。祜吳を伐たんと請ふ。果さずして卒す。武帝乃ち杜預王濬をして大舉して吳を伐たしむ。江を渡て建業に造る。吳王皓降る。大帝より是に

漢亡ぶ

蜀漢

魏亡ぶ

吳亡ぶ

至るまで四世、帝と稱するもの五十二年にして亡ぶ。孫策江東を定め、て以來、通して八十餘年、晋遂に中國を一統す。

第二章 晋室の壞敗——戎狄の跳梁

戎狄の禍漸く萌す

武帝初め位に即き、頗る儉を示す。既にして侈縱なり。後宮數千日々酣宴に耽る。群臣と語る、未だ嘗て經國の遠謀に及はず。吳既に平きてより、天下無事なりと謂ひ、盡く州郡の武備を去る。山濤獨り之を憂ふ。漢魏以來、羌胡鮮卑の降るもの多く、塞内の諸郡に處る。或は上疏す、宜しく吳を平けし威を以て、漸く内郡の雜胡を邊地に徙し、四夷出入の防を峻にすへしと。帝聽かず。卒に後年の患を爲す。吳を滅し十年にして崩す。孝惠帝立つ。性不慧なり。太子たるとき賈充の女を納れて妃となす。權詐多し。帝の位に即くを得たる、妃の力實に多きに居る。是に至て賈氏皇后となり、政に預る。先づ太后楊氏を廢し、其父太傅駿を殺し、また太宰汝南王亮、太保衛瓘、楚王瑋を殺し、以て前朝の重臣已と合はざるものを除き、張華、裴頠、王戎を用ひて、衆望に協ふ。華、頠と心を同くし、

清談

政を輔く、暗主上に在りと雖も、而も朝野安靜なり。戎は清談の徒なり、時と浮沈す。凡て賞拔するところ、専ら虚を事とす。王衍樂廣みな清談に善し。衍の弟澄および阮咸等皆放任を以て達となり、醉裸して非となさす。初め魏の時阿晏等論を立つ。以爲らく、天地萬物皆無を以て本となすと。衍等之を愛重す。裴頠崇有論を著はす、救ふ能はず。賈氏淫虐なり。また太子遯を殺す。蓋しその出にあらす。趙王倫兵を勅し、宮に入り、后を廢して之を殺す。併せて張華裴頠を殺し、自ら相國となる。淮南王允兵を率ゐて倫を討す。克たすして死す。倫帝に逼て位を禪らしめ、黨與みな卿相となり、奴卒また爵位を加ふ。齊王冏、成都王穎、河間王頤、各兵を舉げて倫を討す。倫誅に伏す。冏政を輔く。驕奢にして權を擅にす。頤、長沙王父をして之を殺さしむ。穎もまた功を恃みて驕奢なり。已にして頤と兵を舉げて反す。父帝を奉じて穎と戦ふ。穎を表して皇太弟となす。東海王越帝の命を奉じて穎を征す。穎拒戦す。乘輿敗績し、帝穎に獲らる。穎帝を奉じて洛に還へる。穎の將張方洛に在

八王の亂

り、帝を長安に遷す。頤太弟穎を廢し、豫章王熾を太弟となす。東海王越兵を發し、西長安に入り、帝を奉じて洛に還る。のち穎、頤みな殺さる。諸王事に與るもの前後八人、惠帝の十七年光熙元年に至りて始めて平く。之を八王の亂といふ。かく宗室互に殘害し、域内分れ崩れ、且つ清談の風盛に行はれて、士大夫みな懦弱となり、戎狄之に乗じて各地に蜂起し、遂に制する能はず。惠帝崩し、太弟熾立つ。是を孝懷帝となす。

匈奴

劉淵

漢魏以來匈奴の中國に臣從し、入て塞内に居るもの、その先世漢の甥たりしを以て、みな劉姓を冒す。魏の武帝その衆を分て五部となす。單于於扶羅の子左賢王劉豹左部の帥たり。太原の茲氏に居る。豹淵を生む。幼にして雋異なり、文武を兼學ふ。豹死す。武帝淵を以て左部帥となし、既にして北部の都尉となす。五部の豪傑多く之に歸す。帝の世に及びて五部の大都督と爲す。成都王穎表して左賢王となす。當時單于た虚號ありて尺寸の土なし。晋骨肉相殘ひ、四海鼎沸するに乗じて、故

石勒

業を恢復せんとし、左國城に於て、衆、淵を大單于とす。胡晋之に歸するもの愈衆し。乃ち國號を建て、漢と曰ひ、漢王と稱す。（録）淵の子、聰、驍勇あり。族子、曜、膽略あり。共に好く書を讀み、文を屬す。是に於て、淵の將となる。また石勒なるものあり、上黨武郷の羯人なり。羯は匈奴の別部。その父祖、その小帥となる。勒に至りて、黨を結ひて、群盜をなす。已にこて漢に從ひ、淵の將となる。

氏、李特

巴西の氏、李特、初め流民を以て蜀に入る。旬月にして、衆二萬、廣漢より進て成都を攻む。刺史羅尙敗て之を斬る。弟流代てその衆を領す。勢復た盛なり。流死し、弟雄代る。攻めて羅尙を走らし、成都に入る。淵王を稱するの歲、また自ら成都王といふ。後帝と稱して國を成と稱す。

鮮卑
慕容氏

漢魏の際、匈奴已に衰へ、鮮卑轉た盛なり。その族、宇文、慕容、拓跋等、遍く北邊に布く。慕容、拓跋兩氏最も著はる。慕容、庖武帝の時より、已に寇をなす。既にして降る。以て鮮卑の都督となす。虜號を生む。遼東より徒河に徙居す。また大棘城に徙る。帝の世に及ひて、慕容か部愈盛なり。虜

拓跋氏

自ら大單于と稱す。拓跋氏はその部を素頭と稱す。其俗、素を以て髪を辨む。故に名つく。子の部酋を可汗といふ。世々北荒に居る。魏の時、南匈奴の故地に遷る。力微に至りて復た盛樂の故城に移る。力微死し、子悉祿官立つ。帝の世に及ひて國三部となる。一は上谷の北に居り、祿官之を統ふ。一は代郡の北に居り、兄の子、猗叡をして之を統へしむ。一は盛樂の故城に居り、猗叡の弟、猗盧をして之を統へしむ。晋人附くもの稍衆し。猗叡、漠を渡りて北巡し、西諸國を略す。降附するもの三十餘國。拓跋氏の盛こゝに始まる。夷狄中國を亂るの禍、みな漢魏晋の間に萌す。帝の世に至り、中國の大亂に乗じ、始めて四もに起る。

劉淵帝

惠帝崩して、孝懷帝立つ。永嘉二年（西紀）漢王劉淵帝と稱し、徙て平陽に都す。子の聰及石勒等を遣して、晋の内郡を攻め、以て洛陽に至る。淵卒し、子和立つ。聰弑して之に代る。

晋の太傅東海王越、兵を遣りて入て宿衛せしめ、仍て四方の援兵を徵す。越自ら兵を帥るて石勒を討す。軍に卒す。勒か兵、越の軍を敗る。聰ま

四世亡ふ

た呼延晏を遣はし、兵に將として洛陽を攻む。劉曜、王彌、石勒皆會す。遂に洛陽を陥れ、帝を執へて遂に之を弑す。孝愍帝位に長安に即く。麴允、索琳等之を奉す。屢漢兵と戦ひ、遂に敗れて出て降る。西晋武帝より是に至る、凡四世五十二年にして亡ふ。

第三章 東晋の内政—諸胡の興敗

王導

懷帝の時、瑯琊王睿、楊州の諸軍を都督し、建業を鎮す。睿は惠懷に於て再從兄弟たり、王導を以て謀主となし、事毎に咨ふ。吳人初め附かず。導勸めて諸名流を用ひ、新舊を撫綏す。江東心を歸す。周顛、桓彝等また亂を避けて江を過き、來りて睿に事ふ。愍帝睿を以て左丞相となす。洛陽の祖逖少より大志あり、是に及びて南に渡り、兵を睿に請ふ。睿素より北伐の志なし。逖を以て豫州の刺史となす。僅に兵千人を與へ、江を渡らしむ。時に長安陥いる。群臣勸めて晋王の位に即かしめ、明年遂に皇帝の位に即く。是を元帝となす。江東に據るを以て東晋と稱す。(七七九) 初め王敦從弟王導と心を同うして帝を翼戴す。敦は征討を總へ、導は

東晋
王敦の謀

蘇峻の謀
反

陶侃

機政を専らにす。群從子弟顯要に布列す。敦功を恃て驕恣なり。帝畏て之を惡む。乃ち劉隗、刁協を引きて腹心となし、稍王氏の權を抑損す。敦遂に兵を武昌に舉げ、進て石頭城に至る。隗協を誅するを以て名となす。隗協等道を分て出て戦ふ。大敗して還る。帝百官をして石頭に詣て敦に見えしむ。太子紹文を喜ひ、武を善くす。敦その勇略あるを以て之を廢せんとす。衆論うの謀を沮む。敦朝せずして武昌に還る。帝憂憤して崩す。太子紹立つ。是を明帝となす。敦位を篡はんことを謀り、屯を姑孰に移す。帝王導を以て司徒となし、諸軍を督して敦を討す。敦反し、兵を發して病む。帝また諸軍を帥るて出征す。敦卒す。敦か黨盡く平く。帝崩して成帝立つ。年甫めて五歳なり。王導帝の舅、庾亮と政を輔く。初め王敦再ひ闕を犯し、とき、臨淮の守蘇峻入衛して功あり。威望漸く著る。歴陽に内史たるに及びて卒銳に器精なり。志朝廷を輕んす。庾亮之を激す。遂に兵を舉げて姑孰を陥いる。庾亮出奔す。峻か兵闕を犯す。陶侃温嶠入て峻を討して之を斬る。侃少して孤貧なり。初め荊州の都

督の爲めに用ひられ、屢叛亂を平けて功あり、遂に荊州の刺史となる。一たひ王敦に退けられしも、復た荊州を鎮す。性聰敏、恭勤なり。士女相慶す。是に至りて大功あり、遂に八州に都督として威名赫然たり。軍に在る四十一年、明殺善く、斷す。南陵より白帝に至るまで二百里、路遺を拾はす。尋て卒す。溫嶠さきに卒し、後王導、庾亮また卒す。

晉、域内事あり、力を中原に延はす能はず。諸名臣みな志を齎して逝く。

漢主劉聰さきに西晋を亡はし、尋て卒す。子粲立つ。子の臣靳準弑して

之に代る。石勒準を討す。劉曜自立して、勒を封じて趙公となす。曜疑ふ。

勒自ら趙王と稱す。曜もまた號を改めて趙となし、都を長安に移す。史

に曜を前趙とし、勒を後趙となす。是より曜、勒連に攻戦し、互に勝負あり。

咸和三年(八四九)、曜後趙の金墉城を攻む。勒自ら將として之を救ふ。

大に洛陽に戦ふ。前趙の兵大に潰え、曜勒の爲めに獲られ、遂に殺さる。

前趙亡ふ。石勒天王と稱し、尋て帝と稱す。咸和八年卒す。子弘立つ。石虎

之を殺し、自立して趙天王となり、都を鄴に徙す。

劉曜自立

石勒趙王

前趙亡ふ

成漢と改

拓跋猗盧

什翼犍

さきに成王李雄兒の子班を以て太子となす。雄卒す。班立つ。雄の子越班を弑して、其弟期を立つ。期、雄か弟漢王壽か威名を忌み、出でて外に屯せしむ。壽還り、襲ふて期を弑して自立し、國號を漢と改む。(咸寧四年、八四九)初め拓跋祿官死し、猗盧三部を總攝す。並州の刺史劉琨、猗盧と結ひて兄弟となる。懷帝の時表して大單于となし、代公に封す。部落を帥るて雲中より雁門に入る。琨與ふるに陜北の地を以てす。是より益盛なり。嘗て琨か援となりて大に劉曜の兵を敗る。猗盧盛樂に城き北都となし、平城を南都となす。愍帝、猗盧か爵を進めて王となす。官屬を置き、代常山の二郡を食む。猗盧少子を愛し、遂に長子に弑せらる。是より内難多く、部落離散す。猗盧の從孫翳槐奔て趙に依る。趙、翳槐を代に納る。翳槐卒するに臨み、諸大人に命して弟什翼犍を立つ。什翼犍勇武にして智略あり、能く祖業を修む。始めて百官を制す。號令明白、政事清簡なり。百姓之に安んず。是に於て東は濊貊より、西は破落那(漢の大宛國、今の中)に及ひ、南は陰山に距り、北は沙漠を盡し、率ねみな歸服す。拓跋氏是より

愈大なり。

當時慕容氏亦大なり。是より先き元帝の時、慕容廆大に宇文氏を敗り、遼東を取り、使を晋に遣はす。帝以て平州の牧、遼東公となす。世子號雄毅にして、權略多し。經術を喜ぶ。廆卒し、號立つ。子の下勸めて、燕王と稱せしむ。晋に請ふ。成帝遂に之を封す。南攻北伐。趙王石虎の兵を卻け、高句麗の都城を毀ち、宇文氏を滅し、扶餘王を虜にす。

慕容廆、燕王と稱す

桓温

趙、漢、拓跋、慕容、成帝の世を卒るまで、晋と攻伐せず。帝頗る勤儉の徳あり、崩して、康帝嗣立す。初め、晋、庾亮、中原を恢復せんと欲し、上疏して、趙を伐つ。規をなさんと請ふ。詔して、聽かず。弟、庾翼、人となり、慷慨にして、功名を喜ぶ。瑯邪の内史、桓温、豪爽にして、風概あり、翼嘗て之を薦む。康帝の時に至り、翼、胡を滅し、蜀を取るを以て、己か任となす。建元元年(西紀三)、衆を悉して北伐せんと欲し、移て襄陽を鎮す。翼に詔して、征討諸軍を都督せしむ。翼温を以て前鋒の督となす。帝尋て崩し、穆皇帝立つ。此年、庾翼卒し、桓温をして、荆、梁等の州の軍事を都督せしむ。時に、漢

漢亡ふ

王李壽己に卒し、李勢嗣く。驕淫にして、國事を恤へず。桓温師を帥ゐて、漢を伐ち、進て成都に至る。勢、降を乞ふ。漢亡ふ。是に於て、晋、蜀を併せ、江南皆屬す。

第四章 趙、燕、晋、秦の興亡——晋、秦の抗爭

趙王石虎勢に乗じて、暴虐なり。永平五年(西紀一〇)、帝と稱し、尋て卒す。子世立つ。其兄、遼之を弑して、自立す。趙亂る。晋、征討都督、褚裒、趙を伐つ。部將、敗没す。時に、趙王、遼大將軍、石閔を殺さんと謀る。閔、遼を弑して、その弟、鑑を立つ。鑑、又、閔を殺さんと謀る。閔、鑑を幽して、之を殺し、國號を改めて、魏といふ。虎か三十八孫を殺し、盡く石氏を滅す。虎姓は冉、石氏に養はる。是に至て、その姓に復す。のち、永和八年、燕、魏を敗り、冉閔を捕へて、之を殺す。當時、燕王、號己に卒し、世子、備立つ。是に於て、帝と稱し、のち、都を鄴に徙す。備卒し、太子、暉立つ。

冉閔

後趙亡ふ

氏酋、蒲洪

是より先き、略陽、臨渭の氏酋、蒲洪、驍勇にして、權略多し。群氏畏て、之に服す。劉聰嘗て拜して、將軍となす。受けず。懷帝の世に在て、自ら、略陽公

符兼起る
と稱す。後、趙王曜に降る。また後趙の石勒、石虎に事ふ。虎、洪を以て流民都督となし、枋頭に居らしむ。のち雍秦州に都督たり。石閔、趙王邃に蒲洪の人傑にして恐るべきをいふ。邃、洪か都督を罷む。洪怒て枋頭に歸り、晉に通す。虎、趙を篡するに及びて自ら三秦王と稱し、姓を苻と改む。下の鳩するところとなり死す。子健、洪の衆を領し、長安に入り、自ら秦天王と稱し、已にして帝と稱す。

羌會七仲
蒲洪と同時に南安赤亭の羌會に、弋仲なるものあり。懷帝の末、戎夏之に隨ふもの數萬、自ら扶風公と稱す。その後、洪と共に劉曜に事へ、また石勒、石虎に事ふ。虎甚た之を重んず。虎死して趙亂る。冉閔、趙を滅するに及び、弋仲使を遣して晉に降る。弋仲卒す。その子襄衆を率ゐて晉に來り、歷陽に屯す。勢頗る強盛なり。

七區
時に桓温、威名晉廷に振ふ。殷浩、盛名あり。晉廷舉げて温を制せんとす。中原大に亂るとき、復た進取を謀る。浩を以て楊豫等の州を都督せしむ。浩、襄の強盛なるを惡み、將を遣りて之を襲ふ。克たす。諸軍を率ゐ

桓温 秦を討つ
て再舉す。襄甲を伏せて邀撃し、浩を走らす。襄遂に燕王慕容儁に降る。桓温、浩か敗に因り免して庶人となさんと請ふ。此より内外の大權一に温に歸す。浩、謫所に卒す。

永和十年、桓温師を帥ゐて秦を伐つ。大に秦の兵と藍田に轉戦して灊上に至る。秦主苻健、長安の小城を閉ちて自ら守る。遠近みな降る。温また秦兵と白鹿原に戦ふ。利あらず。秦人野を清む。温か軍食に乏し、退き去る。健尋て卒し、子生立つ。

秦王苻堅
さきに姚襄、燕に降る。北、許昌に據る。また洛陽を攻む。桓温、諸軍を督して襄を討す。襄戦ふて連りに敗れ、去て西關中を圖らんとす。秦兵を遣り拒撃して襄を斬る。襄か弟萇衆を以て秦に降る。秦主生悖虐なり。從弟苻堅之を弒し、自立して秦天王となる。北海の王猛、側儻にして大志あり、人之を堅に薦む。一見、舊識の如し。異才を舉げ、廢職を修め、農桑を課し、困窮を恤む。秦民大に悦ぶ。帝崩し、哀帝立つ。在位四年にして崩し、弟奕立つ。燕人洛陽を攻陥す。成

燕亡ふ

桓温の異

謝安

將之に死す。温師を帥るて燕を伐ち、枋頭に戦ふ。大敗して還る。此役や、燕王儁の叔父垂實に晋軍を撃破す。垂、威名日に盛なり。燕王之を忌む。垂秦に奔る。太和五年(皇紀三〇三)秦の王猛諸軍を督し、燕を伐ち、遂に鄴を圍む。秦主苻堅鄴に入る。燕主儁を執へて以て歸る。燕亡ひ關東悉く平く。後また晋を撃て梁益二州を取る。

桓温哀帝の時より大司馬となり、中外諸軍事を都督し、尙書の事を録す。楊州の牧を加へ、陰に不臣の志を蓄ふ。枋頭の敗より威名頓に挫く。遂に太后に白し、帝を廢し、簡文帝を迎立す。以て威權を立つ。帝在位九閱月にして不豫なり。温帝の終に臨て位を禪らんことを望む。副はす、帝崩し、孝武帝立つ。時に朝廷に王坦之謝安あり。安少より重名あり。桓温入朝す。終に晋祚を移す能はず。温疾あり、姑執に還り、尋て卒す。

秦丞相王猛卒す。秦國大に治まり、富强敵なし。猛の力なり。終に臨み堅に謂て曰く、晋江南に僻處すと雖も、然も正朔相承け上下安和なり。臣没するの後願くは晋を圖ることなかれ。鮮卑西羌は我が仇敵なり。終に人の患をなさん。宜しく漸く之を除きて社稷を安すへしと、鮮卑は慕容氏を謂ひ、西羌は姚氏を謂ふなり。

涼

涼亡ふ

劉曜辰

秦、代を定む

劉庫仁

初め惠帝の世、張軌涼州の刺史たり。威西土に著はる。懷帝陷没す。軌兵を遣り、愍帝を長安に助く。帝軌を以て涼州牧西平公となす。子寔立つ。寔妖賊に殺さる。弟茂立つ。趙主劉曜茂を撃つ。茂趙に降る。茂卒し、寔か子駿立つ。茂駿に遺言して晋を奉せしむ。駿復た後趙石勒に臣たりと雖も、意之を恥つ。成帝の時遂に晋に通す。駿卒し、子重華立つ。自ら涼王と稱す。穆帝の時、駿の孫玄靚立つ。藩を秦主苻生に稱す。叔父天錫玄靚を殺して自立す。酒色に荒み政亂る。秦主堅撃て天錫を降す。

代王拓跋什翼犍か世子寔早く卒し、繼嗣未だ定らす。庶長子遂その諸弟を殺し、什翼犍を併せ殺す。是より先き匈奴の劉衛辰朔方に居る。代に逼られ、救を秦に求む。秦兵を遣して代を撃つ。代王什翼犍南部大人劉庫仁をして拒かしむ。大敗す。什翼犍弑せられ、部衆逃潰し、國中大に亂る。秦主苻堅代を分て二部となす。河より以東を劉庫仁に屬し、以西

を劉衛仁に屬し、その衆を統へしむ。衛辰庫仁はみな故の漢主淵の族なり。代の世子寔か子珪尙ほ幼なり。その母以て庫仁に依る。秦王堅、燕を滅し、蜀を取り、涼を平け、是に於て代を定む。慕容氏姚氏また屬す。北帶みな秦にさく。東夷西域また朝貢す。堅是に於て晋に寇せんとす。

第五章 苻堅の敗—晋室の亡

晋、秦人の強盛なるを以て憂となし、詔して良將の北方を鎮禦すへきものを求む。謝安兄の子玄を以て詔に應ず。玄廣陵に鎮す。戰て捷たさるなり。北府の兵と號し、敵人之を畏る。秦兵を遣り、道に分て晋に寇し、諸郡を陷いる。己にして大舉を議す。中外みな諫む。慕容垂姚萇の聲に乗せんと欲し、之を勸めて南伐せしむ。太元八年（西紀三〇四）堅遂に長安を發す。成卒六十餘萬、騎二十七萬齊しく發す。晋謝石を征討大將軍とし、謝玄を前鋒都督となし、衆八萬を督して之を拒く。秦兵泅水に逼て陣す。玄計を以て撃て大に之を敗る。堅狼狽して長安に還る。秦勢頓に挫く。

泅水の戰

謝玄

後燕
後秦
四燕

秦軍既に大に敗れ、慕容垂河内に起り、自ら燕王と稱す。是を後燕となす。姚萇北地に起り、自ら秦王と稱す。是を後秦となす。慕容冲兵を平陽に起し、帝と稱す。是を西燕となす。冲長安を攻む。秦主苻堅出奔す。後秦の主萇執へて之を弑す。堅の子丕帝を晉陽に稱す。

その後、燕王垂帝を中山に稱し、西燕王三たひ弑せられて、慕容永に至り、秦王丕を撃ちて之を走らし、丕晋に殺さる。帝を長子に稱し、秦の疎族苻登帝を南安に稱す。後秦の姚萇是より先き己に長安に入て帝と稱し、互に相攻伐す。登は數々萇と戦ひ、のち萇の子興に殺され、垂は永を殺して長子を抜く。

苻堅の敗れしより中原大に亂る。其大なるものを慕容氏、姚氏とす。迭に大號を擧ぐ。その他秦の故臣、呂光は涼州に據て涼天王と稱し、鮮卑の乞伏國仁は隴右に據て西秦王と稱す。後また鮮卑の秃髮烏孤河西に起り、南凉と號す。涼の段業、涼王と稱し、張掖に據る。是を北凉となす。沮渠蒙遜、段業を弑して自立す。蒙遜は匈奴の種なり。段業の王た

中原大に亂る

南凉、北凉

四涼

る實にその力なり。隴西の人李暠また敦煌に據り涼公と稱す。是を西涼となす。涼王呂光卒し、諸子篡立して隆遂に立つ。後秦、涼を亡はし、西秦、南涼を亡はし、北涼、西涼を亡はす。

拓跋珪

初め拓跋珪劉庫仁に依る。庫仁その下に殺さる。弟頭眷代てうの衆を領す。庫仁の子顯、頭眷を殺して自立す。また珪を殺さんと欲す。珪賀蘭部に奔り、うの舅に依る。諸部の大人珪を推して主となす。遂に王位に即き、徙て盛樂に居る。後改めて魏と稱す。珪連歲燕を攻む、進て中山を圍む。燕主慕容寶出奔す。のち其下に殺さる。燕慕容祥帝と稱す。慕容麟祥を殺して自立す。珪麟を破て之を走らす。麟慕容徳に走る。徳の爲めに殺さる。徳東晉の地を略し、廣固に據り後帝と稱す。是を南燕となす。燕の慕容盛帝を龍城に稱す。是を北燕となす。魏王珪已に燕に勝ち、都を平城に移し、帝位に即く。是を魏の太祖道武帝となす。時に晋の隆安二年(五三二)なり。史に之を後魏と謂ふ。三國魏に別つなり。道武帝のち其子に弒せられ、長子齊王之を誅して立つ。是を明元帝となす。實に晋

南燕

北燕

後魏

の義熙五年(五三六)なり。

柔然

當時柔然漠北に起り、高車の地を奪て之に居る。諸部を吞併し、土馬繁盛、北方に雄たり。うの地、西、焉耆に至り、東、朝鮮に接し、南、大漠に臨む。旁の小國みな羈屬して魏と敵たり。秦將赫連勃勃秦に叛き、朔方に據り、自ら大夏天王と稱す。勃勃は匈奴の劉衛辰の子なり。

夏

桓玄

劉裕

北方の紛亂此の如し。而して魏最も大なり。南方は晋室漸く微にして、孝武帝崩し、安皇帝立つ。性不慧なり。口言ふ能はず。寒暑飢飽すら辨せず。晋の政亂る。東土囂然たり。妖賊孫恩、民心の騷動するに因て、海嶋より出て、亂をなす。劉裕勇健にして大志あり。恩を討して功あるに因て起る。恩遂に海島に赴て死す。初め桓玄父温に嗣て南郡公となる。才地を資み、雄豪を以て自ら處る。復た江州の刺史たり。尋て荆江等八州の軍事を都督す。是に至て兵を擧げて建業に入り。帝に迫て位を禪らしむ。劉裕兵を京口に起し、玄を討し、大にうの兵を破り、玄を江陵に斬る。帝位に復し、劉裕京口に鎮す。漸く兵を北に用ふ。

南燕亡ふ

是より先き南燕の主慕容徳卒し。超立ち晋の邊を侵略す。劉裕抗表して之を伐つ。義熙六年(西紀四一〇)廣固を抜き、超を斬り、南燕を亡はす。裕の北伐に乗じ、孫恩の殘黨靈循、番禺より出て直に下て建康を襲ふ。劉裕徵されて急に還る。諸軍力戦す。循乃ち退く。裕追て之を破る。循走り遂に殺さる。

後秦亡ふ

義熙十二年、後秦の主姚興卒し、子泓立つ。劉裕諸軍を督して之を伐つ。彭城を發し、洛陽を抜き、尋て潼關を破り、長安に入る。泓出て降る。遂に之を斬る。後秦亡ふ。裕彭城に還る。夏主勃勃長安を陥れて帝と稱す。裕相國宋公となり、遂に人をして晋帝を縊弑せしむ。恭皇帝立つ。即位の明年、裕爵を進めて宋王となる。尋て建康に至り、禪を受く。東晋是に至るまで凡十一世、一百四年、西晋東晋通して一百五十六年にして亡ふ。裕位に即く。是を宋の高祖武帝となす。

東晋亡ふ

第六章 魏武の經略——宋齊の篡奪

太武帝立

魏の明元皇帝崩じ、太武帝立つ。鷲勇善く兵を用ふ。夏主赫連勃勃殂じ、

吐谷渾
夏、北燕、北涼皆亡ふ

太子昌立つ。太武自ら將として夏を伐ち、昌を執へて以て歸る。昌の弟定、平涼に自立す。定、西秦を伐ち、その王乞伏慕末を以て歸り、之を殺す。定また北涼を撃ちて、その地を奪はんと欲す。吐谷渾その軍を襲ひ、定を執へて魏に送る。吐谷渾は慕容氏の別種なり。是に於て西秦の故地魏に屬す。太武の十二年(西紀四二二)魏北燕を伐ちて之を滅し、十六年北涼を伐ちてまた之を平け、後また吐谷渾を逐ふて河湟の地を定め、柔然を撃ちその酋大檀社倫の從弟を敗り、諸部を降し、のち屢之を破りて威を塞北に立つ。高麗および西域諸國みな魏に朝貢す。

五胡

晋八王の亂後、戎狄の江北に國するもの五種、匈奴、羯、鮮卑、氐、羌是なり。之を五胡と謂ふ。而して百有餘年の間、漢族また國を建て、前後興敗するもの凡十五姓、十九國なり。漢と前趙とは、もと同姓一國なり。冉魏西燕國を建つる頗る短し。故に史にこの三國を除きて十六國と稱す。前後起滅す。是に至りて魏、夏、燕、涼を滅して江北を混一し、漢土分れて二大國となる。宋は晋の故業を襲き、古の吳、越、楚、蜀の地を有し、魏は苻秦

十六朝

南北朝

の遺緒を紹き、古の秦、晋、燕、齊の地に據る。北は南を烏夷と謂ひ、南は北を索虜と謂ふ。兩主互に帝と稱す。號して南北朝となす。
宋魏連年互に相侵伐す。王玄謨宋に勸めて大舉せしむ。元嘉二十七年(五三〇)宋竟に玄謨を遣ひ、攻めて碣磔を取り、進て滑臺を圍む。冬に至りて魏主自ら將として河を渡る。衆百萬と號す。玄謨敗走す。魏帝兵を引きて南に下り、長驅江に臨て還る。殺掠勝て計るへからず。過るところ赤地となり、春燕林木に巢ふ。宋王即位より二十八年間、號して小康となす。是に於て邑里蕭條、元嘉の政衰ふ。
宋文帝、太子劭に弑せらる。武陵王駿兵を舉げて劭を誅す。王立つ。是を孝武帝となす。帝殂し、太子子業立つ。孝武骨肉を疎忌し、多く誅殺す。是に至りて尤も甚たしく、諸父を異忌し、殿内に幽して捶曳し、復た人理なく。中外騷然たり。幾もなくして宋人之を廢す。明皇帝立つ。
蘭陵の人蕭道成、深沈にして大量あり。帝の初より兵に將として征討功あり。尋て淮陰を鎮し、豪俊を收養す。已にして南充州の刺史となる。

蕭道成

宋亡ふ

明帝殂し、褚淵、道成を薦めて右衛將軍となし、顧命の大臣と共に機事を掌る。太子昱立つ。嬖人の子なり、明帝之を子とし、之を立てんと欲して諸王十餘人を殺す。たゞ桂陽王休範、庸劣を以て免る。是に至て反し、建康を攻む。蕭道成撃て之を敗る。
宋主驕恣にして殺を嗜む。中外憂惶す。道成袁粲、褚淵と廢立を謀る。淵賛し、粲をかす。遂に之を弑して休範の子準を立つ。是を順皇帝となす。粲、道成を誅せんと謀る。淵子の謀を道成に告ぐ。粲父子ともに石頭城に殺さる。沈攸之もまた兵を江陵に舉げ、道成を討す。軍潰えて死す。道成相國齊公となり、遂に禪を受く。是を齊の太祖高皇帝となす。宋高祖より、是に至るまで八世五十九年にして亡ふ。(五三二)
宋篡奪相襲く。齊に至りて特に甚たし。太祖殂し、武帝立つ。武帝殂し、太孫昌業立つ。尙書令蕭鸞之を弑して、その弟昭文を立つ。未だ幾ならずして廢して之を弑し、自立す。是を明帝となす。高武の子孫を殺して餘類なく。明帝殂して太子寶卷立ち、朝士に接せず。嬖倖を親信し、屢大臣

蕭衍

を誅す。左右事を用ふるもの日に甚たし。太尉陳顯達先づ兵を擧げて建康を襲ふ。敗死す。將軍崔慧景命を受けて叛州を討す。兵を還して建康に逼る。時に豫州の刺史蕭懿兵に將として近きにあり。命を奉じて入て援く。慧景敗死す。懿を以て尙書となす。尋て死を賜ふ。懿の弟衍兵を襄陽に起し、引て東し、建康を圍む。齊人主を弑して衍を迎ふ。太后制を稱し、衍を相國となし、梁公に封す。寶卷の末寶融兵を江陵に起し、已にして自立す。是を和帝となす。姑孰に至り、詔して梁に禪る。位に即き僅に一年にして弑せらる。齊高帝より是に至るまで七世凡て二十三年にして亡ふ。(五三二)

第七章 魏の分裂——魏梁の滅亡

魏初の諸

魏の武帝さきき功臣崔浩を殺し、宗愛を用ふ。愛東宮の官屬を譖す。多く坐して誅死す。太子晃憂を以て卒す。武帝追悼して已ます。愛懼れて帝を弑す。晃の子濬立つ。是を文成帝となす。愛を討して之を誅す。初め太武四方を經營す。國頗る虚耗す。文成嗣くに鎮靜を以てす。人心復た

魏の政風

安し。宋の景和元年(五三二) 殂し、獻文帝立つ。聰睿夙成、剛毅にして斷あり。黃老佛屠の學を好み、常に遺世の意あり。年甫めて十八、位を孝文帝に傳へ、自ら太上皇帝と稱す。孝文幼なるを以て、仍ほ萬機を總ふ。太上の嫡母馮太后李奕を幸す。太上事に由りて之を誅す。太后怒り、遂に太上を弑し、制を稱す。魏夷狄に起り、刑峻にして法刻なり。太武崔浩に命じて律令を更定し、經義を以て疑獄を決せしむ。然れども父祖の舊習未だ全く除かざるなり。獻文に至りて叛逆にあらされは、罪其身に止まらむ。帝仁孝恭儉、政を親らするに及ひて、専ら文治を以て政をなす。威刑に任せず。禮を制し、樂を作り、胡服胡語を禁して、姓を元と改め、都を洛陽に遷す。蔚然として太平の風あり。然れども遷都の後、武事漸く弛み、風俗侈靡に流れ、禍機實に此に萌す。帝殂し、(齊廢帝永元元年、我千五百五十九年) 宣武帝立つ。宗室を疎忌し、嬖倖政をなす。帝崩して、子詡立つ。甫めて六歳なり。母胡氏制を稱す。長するに及ひて遊騁を好み、朝を見ず。胡后亦淫亂なり。魏の政益亂る。

將軍張彞の子仲瑀封事を上て武人を排抑す。喧謗路に盈つ。羽林虎賁千人に近し、相率ゐて尙書省に至り。詬罵瓦石を以て省門を撃つ。上下懾懼して敢て禁討せず。遂に彞が第に至てうの舎を焚く。仲瑀重く傷て走り、彞死す。遠近震駭す。胡后うの凶強八人を收めて之を斬る。餘は復た治せず。懷朔鎮の函使高歡洛陽に至る。張彞が死を見て家に還り、賞を傾けて客に結ぶ。歡先世より法に坐して北邊に徙る。遂に鮮卑の俗に習ふ。深沈にして大志あり。侯景等と相友とし善し、任俠を以て郷里に雄たり。

胡后朝に臨てより、嬖倖事を用ひ、封疆日に蹙まる。孝明没く長し、母子嫌隙日に深し。時に六州の大都督秀容の酋長爾朱榮、兵強し。高歡榮にすゝめ、兵を舉げて帝側を清めしむ。會胡太后帝を鳩す。榮兵を舉げて孝莊帝を立つ。胡后を執へて河に沈め、晋陽に還る。北海王顛梁に奔る。梁の武帝將を遣り、送て洛陽に入れしむ。孝莊出奔す。爾朱榮來り救ふ。顛走死す。孝莊歸る。

高歡

爾朱榮

東魏、西魏

宇文泰

侯景、梁を亂す

榮功を以て天柱大將軍となり、不臣の志を蓄ふ。帝陰に榮を誅せんと謀る。榮入る。帝手から之を刺す。爾朱世隆、爾朱兆と宗室長廣王曄を立てて洛陽に入り、帝を弑す。世隆また曄を廢し、節閔帝を立つ。高歡兵を起して爾朱氏を誅し、洛陽に入り、帝を廢して孝武帝を立つ。節閔および曄皆帝に殺さる。高歡大丞相となり、府を晋陽に立てし居る。帝歡を畏れ、晋陽を伐たんと謀る。歡兵を擁して來る。帝長安に奔り、關西の大都督宇文泰に依る。泰を以て大丞相となす。歡また清河王の世子善見を洛陽に立て、鄴に遷る。道武より是に至りて十二世一百四十九年、分れて東魏、西魏となる。孝武長安に至り、半年を踰えて又泰と隙あり。泰之を鳩し、文帝を立つ。歡泰と連年攻戦し、互に勝負あり。歡卒す。侯景もと歡の子澄を輕す。河南を以て西魏に降り、未だ幾ならずして復た梁に附く。東魏慕容紹宗をして景を撃たしむ。景敗れて南に走り、梁の壽春を襲ふて之に據り、命を請ふ。梁就て南豫州の牧となす。既にして東魏成を梁に求む。意に

景を得んと欲するなり。景梁の東魏に通するを恨む。遂に反し兵を引きて南に渡り、建康を圍む。梁は武帝位に即きてより、國內久しく無事なり。帝また佛を崇み、上下之に化し、武備大に弛む。援兵至るものみならず、景に敗らる。武帝人を遣り、景と盟ひ、以て大丞相となす。帝景の爲めに制せられ、憂憤して殂す。簡文帝立つ。制を景に受くるのみ。

梁はより大に亂れ、湘東王繹江陵に鎮じ、自ら假黃鉞大都督と稱じ、中外諸國承制。岳陽王譽襄陽に鎮じ、繹と相攻む。譽使を遣じ、西魏に降り、以て援を求む。西魏以て梁王となす。侯景自立して漢王となり、簡文を廢して之を弑し、已にして位を篡ふ。是より先き始興の太守陳霸先、兵を起して景を討す。繹また王僧辯をして景を討せしむ。景篡て數月にして僧辯、霸先か爲めに敗られ、亡けて吳に走る。遂にうの下に殺さる。繹立つ。是を元皇帝となす。侯景の亂より、州郡大半西魏に入り、蜀もまた魏に有せらる。梁は巴陵より以下建康に至るまで、長江を以て限となす。

陳霸先

北齊、東魏に代る

後梁

西魏亡ひ

東魏の大將軍高澄異志あり、その下に弑せらる。弟洋丞相となり、齊王に封せらる。洋帝に逼て位を禪らしむ。是を顯祖文宣帝となす。世之を北齊と號す。東魏十七年にして亡ふ。(五三〇) 西魏の文帝殂じ、太子欽立つ。宇文泰之を廢して、その弟廓を立つ。泰儒を崇み、蘇綽を擧げて尙書となし、心を推して之に任す。承聖三年(五三四) 泰、柱國于謹を遣はし、梁を伐て江陵に入る。梁の元帝古今の圖書十萬卷を焚き出で降る。殺さる。西魏尋て襄陽を取り、梁王譽を江陵に徙し、帝と稱せしむ。兵を屯じ之を守る。是を後梁となす。西魏に臣たり。王僧辯、陳霸先、晋安王方智を奉して制を建康に稱す。是よりさき貞陽侯淵明、北齊の爲めに獲らる。是に至て兵を以て之を納る。王僧辯奉して建康に歸り、帝と稱す。陳霸先、僧辯を殺し、淵明を廢じ、方智を立つ。是を敬帝となす。西魏の宇文泰、尋て卒じ、世子覺嗣く。宇文護之を輔く。未だ幾ならずして、覺を以て周公となす。恭帝周に禪る。西魏二十四年にして亡ふ。覺、周

周 起る
梁 亡ひ 陳 起る

天王と稱す。性剛果にして護の専なるを惡む。護之を弑す。諡して孝閔皇帝といふ。泰の長子毓を立て、帝となす。是を世祖明帝となす。梁の丞相陳霸先また相國となり。陳公に封せられ、尋て梁の禪を受く。是を高祖武帝となす。梁四世五十六年にして亡ふ。是に於て東魏西魏および梁、皆亡ひて、北齊、周および陳起る。

第八章 齊、周、後梁、陳—隋の一統

北齊 亡ふ

北齊の文宣帝狂暴甚たし、盡く元氏の族を滅す。殂す。太子立つ。文宣の母弟演太子を廢して自立す。是を孝昭帝となす。尋て殂す。母弟湛また孝昭か子を廢して自立す。是を武成帝となす。暴虐文宣に譲らす。位を太子緯に傳へ、自ら太上皇帝と稱し、尋て殂す。緯また昏亂にして嬖寵多し。政亂る。周北齊を伐て鄴に入り、緯を執へて歸て之を殺し、その族を夷く。北齊國を立て、五世三十年(西紀五三三)にして亡ふ。齊はさきに宇文護明帝の明敏にして、識量あるを憚り、之を毒す。武帝立つ。深沈にして遠識あり、宇文護を誅して始めて始めて政を親らす。政事嚴

楊堅

周 亡ひ 隋 起る

明なり。稱して賢主となす。こゝに至て齊を亡はし、悉く齊の五十州を平く。帝殂し、宣帝立つ。楊氏を以て皇后となす。后の父隋公楊堅事を用ひ、大司馬となる。宣帝太子たりし時より、好て小人を昵近し、立て未た一年ならず、位を靜帝に傳へ、自ら天元皇帝と稱す。驕侈彌甚たし、尋て殂す。楊堅自ら大丞相となる。相國隋王に進む。未た幾ならず、靜帝位を隋に禪る。隋王盡く宇文氏の族を滅す。周帝と稱してより五世二十五年にして亡ふ。隋王帝と稱す。是を隋の高祖文帝となす。

後梁 亡ふ

後梁統ふるところ、たゞ數郡のみ。西魏に臣たり。魏亡ひ周に事ふ。宣帝殂し、孝明帝立つ。周亡ひてまた隋に従ふ。孝明帝殂し、太子琮立つ。隋帝廢して之を滅す。宣帝江陵に立てより、凡三十三年にして亡ふ。陳の武帝即位三年にして殂し、文皇帝立つ。帝難難より起り、民の疾苦を知る。性明察にして儉勤なり。帝殂し、廢帝宣帝を歴て叔寶立つ。淫佚驕奢にして三高閣を起し、妃嬪文士と日に酣歌す。文武解體す。隋開皇八年晋王廣を元帥となし、師を帥めて陳を伐つ。陳の君臣は伐を奏

陳亡ふ

し、酒を縦にし、詩を賦して輟ます。隋軍叔寶を俘にして以て歸る。陳武帝より是に至るまで五世二十六年にして亡ふ。(五紀二)東晋の元帝より、二百七十三年にして、南北始めて一に統ふ。

第九章 朝鮮の古代——支那との關係

箕子

朝鮮の文化も亦北方に起り、漸次南方に光被したるものなり。傳へ云ふ、開祖檀君平壤に都す。實に支那唐虞の時なりと。固より史籍の徵すへきなく、深く信を置くに足らず。周武王殷を亡はし、王族箕子を朝鮮に封す。箕子その徒と朝鮮に入り、平壤に都す。徳政を布き、蠻民を化し、農蠶を勧め、百姓を利す。是れ支那の文化朝鮮に入りし始なり。而して、當時の所謂朝鮮とは今の黃海道以北および滿州南部の地に過ぎず。周衰へ、戰國の時に至り、燕王秦開をして地を東方に略せしめ、朝鮮の地を取る。國勢遂に弱し、秦の時箕子四十世の孫否、畏れて之に屬す。否死して子の準立つ。秦の亂るゝや、支那東北の民多く亡けて之に歸す。盧縮燕王となるに及びて、準燕と涓水(鴨綠江)を以て界となす。縮後

秦開

燕王盧縮

附註

反して匈奴に入り、燕人衛滿亡命して黨千餘人を聚め、東涓水を渡り、永く西界に居て藩屏とならんと請ふ。準之を許す。衛滿亡黨を誘ふこと稍衆し、遂に準を襲ふ。準走りて馬韓に至る。滿入て王儉(平壤)に都す。箕子朝鮮に入りしより是に至る凡九百餘年なり。(五紀四)

涉何

當時漢初めて天下を定め、事を邊に起すを欲せず。滿に約して外臣となし、塞外の蠻夷を保して邊を侵すなからしむ。是を以て滿の勢頗る盛にして眞番(今滿州府)臨屯(江陰府)を役屬し、傳へて孫右渠に至る。漢武帝元封二年(五紀五)涉何を使とし、右渠に諭し、來朝せしむ。右渠何を怨み、襲て何を殺す。武帝楊僕荀彘をして、道を分て之を撃たしむ。朝鮮右渠を殺し、以て降る。衛滿箕準を逐ひしより、凡て八十七年にして亡ふ。漢武帝乃ちちの地を以て、眞番、臨屯、樂浪(平壤府)玄菟(咸鏡道)の四郡となす。昭帝始元五年(七紀五)二府を立て、眞番玄菟二郡を以て、平州都督府となし、臨屯、樂浪二郡を以て、東部都督府となす。東府都督府は平壤に治す。

三韓

かく北部に興亡ある間に、南部即ち漢江以南に三國あり。馬韓、辰韓、弁韓なり。是を三韓となす。馬韓最も大なり。その地、今の全羅、忠清、京畿、三道の地なり。箕準の衛滿に逐るゝや、馬韓の金馬郡(金山郡)に居り、自立して韓王となる。辰韓は今の慶尙道の地なり。秦の時、人民苦役を避けて韓國に徙る。馬韓人々の東界の地を割きて之に與ふ、即ち辰韓なり。弁韓は今の慶尙道の南邊にして、辰韓と雜居す。辰韓弁韓みな馬韓正の制する所となる。

後の三韓

漢朝鮮を郡縣とし、後幾もなくして新羅、高句麗、百濟の三國起る。復た之を三韓と稱す。初め長白山の西北に扶餘國あり。即ち今の滿洲盛京省の東境なり。もと北夷橐離國より出づ。橐離は内蒙古科爾沁左翼の界内にあり。皇紀後百年頃よりその地の種族南方に出で、遂に土人を驅逐征服して、後遂に全半島を占有するに至れり。蓋し漢人種北部に侵入せしか故なり。皇紀六百二十四年扶餘王の子、高朱蒙難を避けて南に走り、國を古朝鮮の地に立て高句麗と號す。のち省て高麗といふ。

高句麗

是より先き扶餘人種の已に南に遷るものあり。朱蒙國を立つるに及びて、四方來り附くもの頗る多し。傍近の諸族を敗り、國勢やゝ張る。漢の王莽、高句麗の兵を發して匈奴を伐たしめんとす。さかす。漢嚴尤を遣り、來り撃たしむ。王なほ從はず。却て漢の邊を犯す。尋て扶餘と戦ひ、その王を殺し、その地を取る。漢光武海を渡りて樂浪を伐ち、その地を郡縣にす。薩水(平安道 清川江)以南漢に屬し、高句麗と境を接す。高句麗の建國より少しく遅れて、朱蒙の子溫祚百濟國を建て、河南の慰禮城(忠清道 禮山縣)に居る。(西紀六)尋て都を漢山(京畿道 漢州)に徙し、馬韓王を攻めて之を亡ほせり。是よりさき赫居世新羅を建つ。もとの辰韓の地にして、その即位は漢宣帝元鳳元年にして、實に我六百〇四年なり。卞韓來り降る。三傳昔脱解に至り、始めて國號を鷄林と改む。以後賢君相次ぎ、國基益固し。是に於て三韓の故地概ね百濟新羅に屬し、朝鮮の故地高句麗に屬す。今の所謂朝鮮の地分れて三となる。高麗最も大にして新羅最も小なり。後漢の末、公孫度(初平元年 遼東)遼東に據りて王と稱し、樂浪郡を取る。公孫

百濟

新羅

鷄林

公孫度

康の時に及びて、樂浪郡の南部を分ちて、帶方郡(遼東)を置く。以て韓貊を制せんとするなり。公孫淵立ち、魏の景初二年、明帝司馬懿を遣して、淵を伐たしむ。遂に之を斬り、その地魏に入る。而してその北境は、高句麗の據るところとなる。

母丘儉

後漢の世、高麗屢、滅貊鮮卑等と漢の邊を侵し、玄菟遼東を攻む。魏の時、幽州の刺史母丘儉、擊て之を破り、高麗の國都丸都を屠る。尋て復たその地に據る。晋の時、燕王慕容皝復た大に之を破る。その王高釗降を請ふ。後高麗百濟を構へ、百濟の近肖古王高麗を攻め、高釗矢に中て死す。

日本と朝鮮

是より先き我九州邊民屢使を支那朝鮮に遣す。當時皇化此土に及ばず、擾亂の極、遂に卑彌呼なるもの一統する所となる。漢史之を女王國といひ、我國史之を熊襲と稱す。魏に貢し、新羅と結ひ、以て朝廷に抗す。蓋し弁韓の地新羅に屬すと雖も、なほ許多の小國分立す。加羅安羅等是なり。傍近の小國を併せて之を任那と稱す。新羅屢、任那を侵す。任

任那

日本府

那援を我日本の朝廷に請ふ。仲哀天皇熊襲を征し、中道にして崩す。神功皇后その禍根を絶たんと欲し、進て海を渡りて新羅を征す。新羅抗する能はず。降て屬國となる。大抵東晋の時に當る。百濟近肖古王の時、また我國に朝貢す。新羅の貢物を奪ふ。我國將を遣し、新羅を伐つ。百濟來り會す。擊て新羅を破り、任那を取り、此地に日本府を置きて、諸韓國を統ふ。任那の地を分て百濟に與ふ。百濟是より朝貢怠らす。のち秦王苻堅、勢頗る盛なるに及び、高句麗新羅みな之に臣たり。堅、胡僧および佛像佛教を高麗に遣る。其王丘夫佛寺を建て、また大學を興す。高麗儒佛の教此に始まる。百濟は近肖古王に至り、始めて文字書記あり。博士王仁を我に遣し、儒書を獻す。晋の孝武帝の時、佛教また百濟に入る。その王枕流之を禮す。のち百六十餘年我に傳ふ。我國儒佛の教、みな此く三韓の媒による。

儒佛朝日
本に傳り
に傳ふ

のち高句麗新羅と隙あり、高麗王璉、師を興して新羅に入る。新羅救を任那に乞ふ。我鎮將之を救ひ、高麗の兵を破る。宋帝昱の時(我雄略時)高句

高麗最盛の時期

任那新羅に降る

麗王璉百濟を攻め、漢城を陥れ、その王餘慶を殺す。雄略帝百濟の質牟大をその國に納れんとす。別に舟師を遣して高麗を撃つ。克たず。當時高麗最強最盛の期と稱す。好を南北支那に結ひ、我國と絶つ。後新羅また任那を攻め、數城を取る。時に梁武帝の朝にして、我繼體帝位に在り。帝近江の毛野を任那に遣す。任那人密に兵を新羅百濟に請ひ、毛野を攻む。尋て駕洛新羅に降り、任那の地益蹙まる。而して我朝の威令遂に行はれず。陳の文帝天嘉二年（我朝明三年）任那の地悉く新羅に没す。欽明帝將を遣り新羅の罪を問ひ、別に高麗を討たしむ。新羅任那を建つ。また之を攻む。推古帝將を遣り、之を救ひ、新羅を攻む。新羅降を請ふ。乃ち師を班す。任那のち復た新羅に降る。隋文帝開皇十八年（皇朝仁）高句麗王元鞠靺を率ゐて遼西を侵す。帝水陸の軍を發して高麗を伐つ。克たす。煬帝に至りて武を遼東に耀さんと欲し、三九ひ高麗を征して、三九ひ克つ能はず。唐に至りて漸く之を服す。

第十章 印度—佛教の東漸

印度の支那に知られしは、漢武の時に始まる。張騫西域に使してその名を聞き、幾たひか之に通せんとして成らす。當時之を身毒といふ。即ち今の印度なり。

度羅毘陀 亞利亞種

四族

印度は世界舊國の一なり。國中二大河あり。恆河は喜馬拉耶山に沿ひて東流し、支那地方と界し、印度河はソリマン山脈に沿ひて南流し、伊蘭地方と境す。古代印度の開化は、實に此間に起る。度羅毘陀人種なるもの早くこの地に住す。凡四千餘年前亞利亞人種の一派、中央亞細亞より印度河を渡り、土着の度羅毘陀人と戦ひ、一部は之を驅逐し、一部は之を服屬し、居をその地に定む。印度の文化は此亞利亞人種の文化なり。深邃なる哲學宗教、優秀なる工藝技術、多くはその手に出で、殆ど古代文明の頂上に達せり。印度人は理想に長し、歴史の念に乏し。今韋陀の教典及び摩奴の法典によりて、當時の事實や考ふへし。蓋し亞利亞人の此地に移住せしより、自然に階級の制度立ち、四族の別甚た嚴なり。第一は婆羅門とい

ひ。僧族にして祭祠及教導の職を掌り。四族中最も尊貴なるものなり。第二は刹諦利といひ、王族にして、兵權を握り、政治を行ふ。尊貴なること波羅門に次く。第三は吠舍といひ、商農の族なり。第四は首陀羅といひ、農工牧畜を業とする族にして、最下なるものなり。蓋し征服人種と被征服人種との關係より起りしものなり。

今傳説によれば、亞利亞人士民度羅毘陀人を驅逐して、王國を今のペンシヤブに建て、ブラーマバラタと號す。次てハスチナバルの朝となり。イオヂアの朝となる。その末年紀綱紊亂し、摩奴の法典は空文となり、韋陀の證典をさへ疑ふもの出て、波羅門の教義最早虚禮にすぎすなりぬ。是に於て道義腐敗し、國勢萎微し、一大變革を待つものゝ如し。

釋迦是に於てか崛起して萬代の教主となりぬ。

僧族と王族との争は、太古より已に存せしか如し。口碑によれば、僧族一時王族を壓倒して、殆ど絶滅に歸せしめんとするの勢ありき。僧族腐敗するに及びて、益私見我意を擅にし、その弊底止する所なし。時に

王族に釋迦出て、婆羅門を排して四民平等の説を主唱す。或は云ふ、釋迦は種族の名にして即ち塞なりと。名を悉達瞿曇といふ。中印度の一部却比羅伐宰堵王の子なり。周靈王十四年(西紀二五三)に生れ、周敬王四十四年(西紀二二二)に歿す。享年八十。殆ど孔子と同時代の人なりといふ。夙に厭世の念あり。人みな老病生死の苦を道るゝ能はざるを悲み、遂に家を出て、博く師を訪ね、その疑を決し、九十餘種の外道を學ひ、婆羅門教以外に一新宗教を開き、四十餘年の間、安心立命の妙理を説き、弟子雲集して外道屈服せりと傳ふ。

時に波斯の國勢頗る盛にして、その王ダリアス雄資を以て、四方を經略す。周の敬王の時(西紀二五〇)印度に侵入してインダス河岸の地を取る。ダリアス末年希臘と戦端を開き、その子ゼルセス大軍を率ゐて希臘を攻め、敗岨す。想ふに東西兩洋衝突の最初なるへし。ダリアス印度に侵入せしより、大凡百餘年をへて、希臘の亞歷山大帝波斯を服し、尋て印度に寇す。是れ第一次衝突の反動と見るべきものなり。當時印度國

スレソ

内四分五裂して統一せず。就中ボウルス王最も強大なり。希臘の大軍印度河を渡り、印度に入るや、四方みな降る。獨りボウルス王善く防ぎしも、力遂に敵すること能はず。希臘の軍進て摩迦陀國を攻めんとす。將士みな歸を思ひ、敢て進まず。亞歷山大帝遂に師を班す。亞歷山帝は皇紀三百三十八年に殂し、その將セレソス、東方一帯の地を領して矢利亞王國を建つ。是より先き亞歷山帝の印度を去るや、摩伽陀國の首陀族サンドラグマ、その國を統一し、希臘人を逐ふ。セレソス兵を率ゐて印度に入り、之と和す。當時矢利亞王國の勢頗る強盛にして、西北は黒海、阿拉爾海に達し、東はガンガ一河に及ぶ。皇紀三百八十一年セレソス殂す。その子アンナソス二世立つ。及ひて安息(バルチア人)大夏(バクトリア人)みな叛き去る。後矢利亞羅馬の爲めに滅はさる。

毛利亞朝

サンドラグマ英明にして、當時摩伽陀の國勢頗る盛なり。是を毛利亞の朝といふ。帝殂して、ミトラグマ立つ。次て立ちしものは即ち亞

亞輪迦

朝アンドラ

傳佛敎の流

輪迦なり。國勢益盛なり。敎諭を石標に刻するもの、近時往々掘出せらる。頗る史料に資す。此朝の始祖もと卑族なり。故に婆羅門の族を惡み、佛敎の公布を以てその政略とす。毛利亞朝亡ひてサング朝之に代り、サング朝亡ひてアンドラ朝之に代る。婆羅門敎興復し、佛敎排斥せられ、其徒多く城外に逃る。アンドラ朝亡ひてバラ、ゴナルタの兩朝對立し、後唐の時に至り、回々敎徒スームード印度に侵入すること前後十七回にして、ベンヂヤブ地方盡く其有に歸す。子孫相傳へて南宋の高宗紹興二十二年(皇紀三)に至りアフガン人、アラウゲンの爲めに滅せらる。佛敎は亞輪迦王先きに使僧を四方に派し、後婆羅門に逐斥せられ、頗る印度中部以外に及び、大抵南北の二派となる。其南に流れしものは錫蘭に入り、南方佛敎となり、北に流れしものは中央亞細亞を経て支那に入り、北方佛敎となる。秦の始皇帝の時、異俗の人來る、或は以て佛僧となす。漢武の時佛敎已に支那北塞に行はれ、霍去病匈奴を撃ち、金

を獲て還る。帝之を甘泉宮に列す。或はいふ金像は佛像なりと。張騫大宛に使して身毒なる名をきき、また佛教の存するを知り、帝に奏して印度に通せんと欲して、成らざる。哀帝の時、秦景月氏の使者に就て、佛經の口授を受く。然れども此等は佛教東流の漸と稱すべく、其實に支那に入りしは、後漢明帝の時なりとす。永平七年（三四七）帝蔡愔等を西域に使はし、翌年迦葉摩騰、竺法蘭を伴ひ、佛像佛經を得て還り、洛陽に白馬寺を立つ。支那の佛寺あることよに始まる。摩法蘭四十二章經を摘譯す。譯經の始めなり。以後梵僧の支那に來るもの前後相續き、皆梵經の翻譯に従事す。摩騰等の來る、道家の徒之と争ひしも勝たず。その後道佛二教の爭常に絶えず。三國の時、蜀獨り佛教行はれず。魏最も之を信ず。文帝支那人にして佛戒を受けて僧となるを許したり。南北朝に至りて佛教轉々盛なり。

中等
教科
東洋史卷一終

版權所有

明治廿九年七月十四日印刷
明治廿九年七月十七日發行

東洋史 全貳冊

定價卷一、二、各金三拾五錢

編纂者

藤田 豊八

發行者

小林 義

印刷者

橘 磯吉

印刷所

三協合資會社

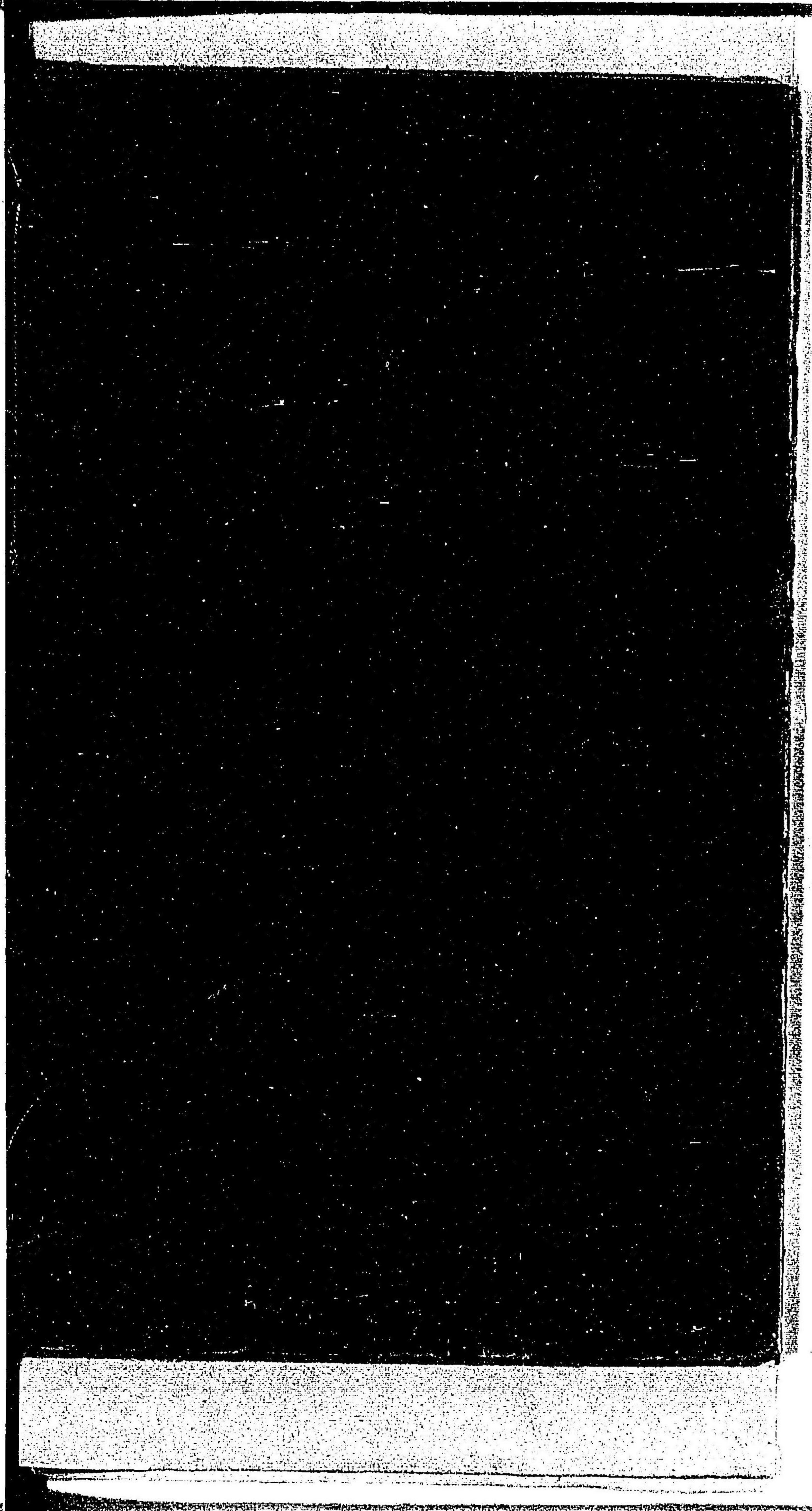


東京市日本橋區本町四丁目十六番地

發兌

文學社

109
57



109
2
57

東洋史

卷一

003347-001-4

109-57

東洋史

藤田 豊八/著

M29-30

ACC-1849

